

紀要56号

# 研究報告書

平成31年3月

尼崎市立教育総合センター

## はじめに

今年度、教育委員会では、尼崎市版「授業改善の視点」を作成しました。これは、平成29年に告示された学習指導要領において示された、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進という方向性を受けたものです。

作成に当たっては、この視点が形式的な授業マニュアルにならないよう、これまでの尼崎市の各学校等の実践に基づく具体的な視点となるよう工夫を重ねました。

「授業改善の視点」については、今後、学校等における授業実践に生かすとともに、教育委員会においても各学校等への指導に際し、共通の視点として活用していくこととなります。

さて、その視点作成において大いに参考にしたのが、この冊子に収められている「アクティブ・ラーニング部会」等の授業実践です。

小学校国語科教育部会では、尼崎の地域素材の教材化を切り口に、個別対応も含めた主体的な学びの実現、「自己との対話」「他者との対話」「対象との対話」といった対話の幅の広がり、評価を関係させての深い学びの考え方等の研究が進められました。

小学校算数科教育部会では、「友だちの考えとのズレ」「予想とのズレ」「感覚とのズレ」「既習事項とのズレ」などから、子どもの「問い」を引き出し、その「問い」を中心に据えた授業実践がされています。

中学校教育部会では、「ICT活用チーム」「深い学びチーム」「研修普及チーム」に分かれ、それぞれの実践報告を分析するとともに、アクティブ・ラーニング通信の活用で各学校の授業実践を共有し、裾野を広げる取組が紹介されています。

また、道徳教育部会や外国語・英語科教育部会でも、貴重な授業実践に基づく先進的な研究が紹介されています。

これらの研究は、各学校において実際に実践に生かしていただくことが、何より重要です。是非参考にさせていただけたら幸いです。

最後になりましたが、今年度の研究を進めるに当たり、御多忙にもかかわらず御指導いただきました専任講師の先生方に深く感謝申し上げます。また、校長先生をはじめ、時間を惜しまず熱心に取り組んでいただいた研究員の皆様、御協力をいただいた全ての方々に重ねて厚くお礼を申し上げます。

平成31年3月

尼崎市立教育総合センター  
所長 西川 嘉彦

# 目 次

- 1 小学校国語科教育アクティブ・ラーニング部会…………… 1  
主体的・対話的で深い学びの実現に向けてー国語科における学習評価の在り方  
を探るー
- 2 小学校算数科教育アクティブ・ラーニング部会…………… 20  
アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）で創る算数科の授業を  
目指して
- 3 中学校アクティブ・ラーニング授業実践部会…………… 37  
主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の授業づくりを通して  
ー「アクティブ・ラーニング」の授業実践と校内での広まりー
- 4 道徳教育研究部会…………… 54  
「共に考え 共に語り合う」授業づくり  
ー「生命の尊さ」を扱い、各校種に応じた授業づくりを考える。ー
- 5 外国語活動・英語科教育研究部会…………… 83  
児童が、【書くこと】への意欲を高め、前向きに学習を進めることができる指導  
の在り方を探る

## 主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

### － 国語科における学習評価の在り方を探る －

指導主事 松 本 隆 範

#### 【内容の要約】

平成28年度より、市内の各小学校から選任された教員が一堂に会し、国語科における主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)の実現に向けた研究部会を立ち上げ、授業改善を推進している。専任講師として桃山学院教育大学教育学部准教授 今宮 信吾 氏を招聘し、講話・演習・交流等を通して、不断の授業改善に向けて歩みを進めてきた。今年度は、3カ年における研究の集大成として、ルーブリックを設定した指導案を部員全員が作成し、授業実践を通して、国語科における学習評価について  
の学びを深めていく。

明確な証拠・根拠を必要とするエビデンスに基づいた評価を行うためにも、教師がこれまで以上に児童の実態把握や教材研究に努めることが求められる。そして、児童が目標を持って学びに向かうためには、ルーブリックの重要性について共通理解を図り、教師の主観や児童の人間性に左右されない、国語科における学習評価が不可欠である。

本研究では、二つの実践事例をもとに「主体的・対話的で深い学びの行方」について探り、授業改善の視点を市内全体に広めていくことを目的とした。

キーワード：学習評価、ルーブリックの設定、深い学び

1	はじめに	1
2	部会部員名	1
3	研究の内容	2
4	実践事例	7
(1)	実践事例1	7
(2)	実践事例2	13
5	専任講師による研究の総括「ローカルで、グローバル、そしてワイドな教育を」 (桃山学院教育大学 今宮信吾)	16
6	終わりに	18

## 1 はじめに

「常に学び続けるものにこそ、教える権利あり」

学び続ける教員は、子どもたちを「深い学び」へといざなうために、日々、授業改善に取り組んでいる。

本部会の専任講師である桃山学院教育大学准教授、今宮信吾氏は、“深い学びを創る”ことについて、「深い学びは、量的な評価ではなく、質的な評価によって明らかになると考えたい。そのためには、評価活動を確かに行うことが必要となる。評価の大切さは今までも言われてきたが、新しい指導要領ではそれを具現化させることを求められている。欲張らず、確実に、正確にということが要求されるであろう。」と述べている(今宮, 2018)。

深い学びを質的な評価によって捉えるためには、様々な場面での評価とそれに合わせた多様な評価方法を試みなければならない。また、教師が評価活動を確かに行うためには、目標を設定し、それに対する評価規準を決め、ルーブリックを明確にしなければならない。

今宮氏の指導の下、43名の研究部員にとともに、国語科における学習評価の在り方について研究を進める。

## 2 部会部員名

各小学校から、部会の部員として推薦された教員

学校名	名 前	学校名	名 前	学校名	名 前
明城	葛原 稔久	成徳	岡田 実樹	武庫南	西川 達也
難波	砂田 祐馬	わかば西	藤田 慎也	武庫北	上田 篤
難波の梅	中尾 武史	大島	上田 絵梨香	武庫東	梅園 千鈴
竹谷	菅原 咲樹	大島	清水 優希歩	武庫庄	松井 啓明
下坂部	古田 智代	浜田	渡部 真広	武庫の里	森本 祥一
潮	中島 衣美	立花	宇都 亨	園田	奥村 文那
長洲	井上 学	立花南	井本 早耶	園田北	合田 香織
清和	小杉 宏美	立花西	西村 純	園和	増田 有希
杭瀬	下村 一貴	立花北	笹部 裕也	園和北	杉山 未記
浦風	松本 みゆき	名和	喜多 淳子	園田東	原田 麻畝
金楽寺	山田 真維	塚口	明石 幸子	上坂部	戒能 隆幸
浜	金城 裕輔	尼崎北	上月 由貴	小園	田中 知佳
大庄	田村 和香子	水堂	小林 真子	園田南	有馬 陽一
大庄	木口 範彦	七松	村内 亜莉沙		
成文	伊場田 朝	武庫	辻 武史		

## 3 研究の内容

### (1) 研究テーマ

主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

－ 国語科における学習評価の在り方を探る －

### (2) 研究テーマの設定理由

「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)の実現に向けた授業改善を行う」と言いつつ、受け身の教員が増えているのではないか。専任講師である今宮先生のご指摘を受け、国語科の授業をより能動的に展開していくために、尼崎の地域素材を教材化した、教科横断的な学習(カリキュラム・マネジメント)に取り組んできた。そこでは、児童の興味・関心・意欲を高め、幅広い対象との対話を通した児童中心の学びが展開され、教師が「教える」というよりも「育む」という要素が強まっている。

一方で、「別の方法でやってみたら」という学び方の提示や「こんな考え方もあるよ」という論点の提示、また、「この子はここまでたどり着いている」「この学びは素晴らしい」という価値づけ等、指導者・評価者としての役割も重要である。

今年度は、これまでに今宮先生が提案されてきたルーブリックの作成や評価セッションの実現に向けた取り組みを具現化するために、上記の研究テーマを設定し、学年グループによる研究・交流・授業実践を通して、尼崎市内の連携を図るとともに、深い学びの実現を目指すこととした。

### (3) 研究の流れ

回	実施日	実施内容
1	6月7日(木)	講話「主体的・対話的で深い学びの行方」
2	7月27日(金)	講話「1学期の授業をふりかえる」 授業創り演習 レポート交流(1学期の評価について)
3	8月3日(金)午前	講話 桃山学院教育大学教授 二瓶 弘行 氏 「言葉の力を育む国語授業づくり」
4	8月3日(金)午後	講話「国語科の評価を考える」 学年グループによる指導案の検討
5	8月22日(水)	講話「深い学びを創る」 学年グループによる指導案の検討
6	2月13日(水)	公開授業① 5年「わらぐつの中の神様」 難波の梅小学校 中尾 武史 教諭
7	2月19日(火)	公開授業② 4年「詩を書こう 野原に集まれ」 園和小学校 増田 有希 教諭
8	2月26日(火)	本年度のまとめ(成果と課題) 講話「本年度のまとめと今後の方向性」

1. 第1回部会 平成30年6月7日(木)

第1回の部会では、今宮先生の講話「国語科における主体的・対話的で深い学びとは」の中で、新学習指導要領が目指すもの、国語科における評価活動の在り方について共通理解を図った。

- ①児童像・教師像・授業像(Yチャート)
- ②新学習指導要領のポイント
- ③これからの国語教育の課題
- ④言語活動の充実
- ⑤評価活動の在り方
- ⑥深い学びの実現に向けて



【第1回部会の様子】

#### 部員のふり返り

- ・心に残ったことは、評価活動の在り方の、めあて、ふりかえりの部分です。めあての書き方ですが、いつも提示していたので、共有や創造で子ども達から考え出させる方法があることに驚きました。めあてを創造させると、教師が意図していない展開にもなりうると思うのですが、授業をどのようにつくればいいのかまた教えていただきたいと思います。
- ・評価について、自校では今年度から学年であゆみの様式が変わることもあり、自分の中でどのようにしていけばいいのか悩んでいるところでもあるので、次回また他の先生方がどのような評価をされているのか知ることができるのは大変よい機会だと思っています。
- ・国語科における深い学びとは何か？教師力のRPDCAなど、新しい考えが得られました。中でも印象的なのは、対話についてです。語り合う→伝え合う→学び合う→紡ぎ合うこの力は未来を創造する子ども達にとって大切な力だと思うので、私がしっかり学んでいかねばと思いました。
- ・次回の課題にあがっている評価のしかたについては、前勤務校の研究でも、いつもどうすればよいのかと全体の課題になっていた。個々を45分内でどのように評価するのか、特に話し合い等の活動の場では非常に難しいと感じていたので、次回みなさんのレポートを見せていただくのが楽しみです。

#### 2. 第2回部会 平成30年7月27日(金)

第2回の部会では、各部員が1学期に行った国語科授業における学習評価について、学年グループで交流を行った。PMIシートを活用し、実践を通して出された課題を共有し合い、改善のための手立てを共通理解することができた。1年生の「や・ゆ・よ」の指導については、音声とのセットで指導すること、評価のエビデンスが児童の書く能力に左右されることについては、録画や録音、インタビューなど音声言語での評価の可能性も探ること等、今宮先生から具体的な助言を頂いた。

#### 3. 第3回部会 平成30年8月3日(金)午前

講話「言葉の力を育む国語授業づくり」

講師 桃山学院教育大学教授 二瓶 弘行 氏

- (1) 言葉の持つ力
- (2) 「ふしぎ」金子みすゞ
  - ・くりかえし(リフレイン)
  - ・リズム(七五調)
  - ・色(対比)
  - ・ひっくり返し(倒置)
  - ・連の構成
- (3) 「いたいな」木島始
  - ・詩の世界がどんどん見えてくる
  - ・言葉の力とは 学びとは



【第3回部会の様子】

#### 4. 第4回部会 平成30年8月3日(金)午後

第4回の部会では、2学期に行う国語科の指導略案を各自が持ち寄り、学年グループによる交流を行った。特にループリックの設定については、今宮先生から直接指導していただいた。学年ごとのグループで指導案検討を進め、授業の具現化へ向けて活動を深めていった。

- (1) ループリック評価の可能性
- (2) ループリック評価の問題点
- (3) 学年グループによる指導案検討
- (4) PMI シートによる全体交流
- (5) 今宮先生による指導助言



【第4回部会の様子】

#### 部員のふり返り

- ・今まで評価規準について、ここまで話し合ったことがなく、ああじゃないかこうじゃないかと話し合うことで、なるほどと思うことがたくさんありました。今宮先生にも、量じゃなく質で分ける方が自分も評価しやすい、見えるものは必ず評価するべきだが見えないときがあるのはしかたがない、とおっしゃっていただき、絶対に見ないといけない、どう見たらいいのだろうと悩んでいたのですが、気持ちが楽になりました。
- ・「書くこと」の重要性は、以前から身をもって学んでいる。本校でも書くことの大切さは研究を通して共通理解しており、研究テーマにも「書くこと」を入れて取り組んだ。ただ、子どもが持つ力の差はやはり大きく、支援ばかり考えがちになっていることに気づいた。おそうじループリックを通して、A 評価できることはたくさんある。ということは、子どもの力の高め方や目標はまだたくさんあり、子どもの伸びしろは無限だと感じた。

#### 5. 第5回部会 平成30年8月22日(火)



第5回の部会では、「深い学びを創る」をテーマに、前回持ち寄った指導略案を再検討し、改善したものをもとに交流を深めた。改めてルーブリックの設定について今宮先生から助言を頂き、2学期の授業実践に向けての学びを深めた。

6. 第6回，第7回は代表者による公開授業を行った。詳細は【4 実践事例】にて後述する。

7. 第8回部会 平成31年2月26日(火)

第8回は今年度の「国語科教育アクティブ・ラーニング部会」のまとめの会である。はじめに各学年グループによる授業実践の交流を行った。

- ・評価を明確にさせることにより、私自身も授業がやりやすくなったと感じています。これまで、評価でどうしてもひっかかる場所がありましたが、Bを無理のないところで考えるという今宮先生の助言を頂き、評価が決めやすくなり、私もゴールをはっきりさせることができるようになりました。もちろん子どもたちも、ここまでできたから次はAを目指そうと、はっきりとした目標が持てるようになり、意欲にもつながりました。
- ・授業を「点」ではなく「線」で考えられるようになりました。単元のゴール、授業のゴールを常に意識して、授業を作るようになりました。ルーブリックに関しては、できるだけ具体的な姿を想定するようになったことで、授業のねらいや目指す子ども像がより具体的になりました。
- ・ルーブリックを設定した授業を行うことで、子ども達が見通しを持って取り組むことができたり、どうすればAになれるだろうかと意欲を持つことができたりと成果が見られました。また、教師側も今までの授業はどうだったのか、と反省する程、ルーブリック評価を意識することで、めあてに合った声かけ、発問をすることができました。

授業創りにおける評価の在り方や考え方の変容について多くの部員が自覚していた。一方で、下記のような課題に直面した部員の声も拾うことができた。

- ・ルーブリックのA評価を考えるのが難しかったという点もあり、まだまだ勉強が必要だと感じています。これからも子どもたちが発言しやすく、考えやすい楽しい授業づくりができればと思います。
- ・日々追われる対応などで、いつもいつもルーブリックを意識した授業にならなかったことは反省です。これから1年1年積み上げたものを、これからの授業に生かしていきたいようにしたいです。



【第8回部会の様子】

交流の後、今宮先生から本年度のまとめと今後の方向性について講話いただいた。

(1) 深い学びを見通す

- ・考えが深まった状態というのは、ふり返りや評価シートで判断するのか？  
→深まりは時間的な幅がないと判断できない。事前にみとった初期値との幅で判断をする。
- ・多読へつなげるよい方法はないか？  
→図書館との連携(読書通帳)  
他教科との連携(カリキュラム・マネジメント)  
家庭との連携(読書交換)
- ・ペアでの学力差があり、話し合いが成立しない。何か手立てはないか？  
→ペアだから話せないのかもしれない。3人で試してみる。

(2) 学年末にチェックしておきたいこと

- ・子どもの言語能力
- ・成果物の整理
- ・年間指導計画の修正
- ・来年度への引き継ぎ資料

講話を終えて、各部員には今後の抱負を記述してもらった。

- ・今回のアクティブ・ラーニング部会で得たものの1つは、“とにかくものさしをつくること”です。完全なものを目指してしんどくなることが多々ありましたが、ものさしを作り、子どもと合意形成をしながら、自分自身も子どもの実態を踏まえて次のものさしに活かせばいいんだと思えました。楽しんでいきたいと思います。
- ・子ども同士で深め合えるような指導法を研究していきたい。交流=深め合ったことにはならないので、深まったかどうかの評価についても研究していきたい。
- ・今まで、課題や活動に対して、「これでいいや」という取り組み方をする児童が多く感じていましたが、ルーブリックを設定すると、“よくできた”を目指してがんばる児童が増え、私自身も驚きました。同時に教師のこんな工夫で子どもが変わるのであれば、今までしてこなかったことに反省も感じました。校内の先生からは、「ルーブリックって？」と反応が様々でしたので、校内で広めていくことの重要性を感じています。



【第8回部会の様子】

#### 4 実践事例

(1) 実践事例 1 難波の梅小学校 第5学年

1. 実践の概要

(1) 単元名 特色をとらえながら読み、物語のおもしろさを探ろう

教材名 「わらぐつの中の神様」(光村図書)

指導者 難波の梅小学校 中尾 武史 教諭

(2) 指導者の思い

これまでの国語科の学習では、学びのポイントとなる児童の感想や意見を拾い集めて授業を展開してきた。しかし、それは教師の都合によるものではないだろうか。結局児童は黒板に出てきた大事だと思う考えをノートに書いているだけではないだろうか。児童一人一人の考えは本当に深まっているのだろうか。評価の在り方を検討していく中で、そのような疑問が生まれてきた。

そこで、「一人一人の考えを深めるためには、まずは一人一人の考えをしっかりとつかませることが大切である」と仮定し、児童全員の感想を1枚のシートにまとめて、活用していくという実践を行う。

事前学習『見るなのざしき』では、この活用により児童の考えが広がっていることを感じた。児童は1回で大切なことを読み取るのではなく、何回も読んでいくことで少しずつ見えてくることがあり、自分の思いをうまく言葉にできない児童も、友達の言葉を読むことで、自分の思いに合う言葉を見つけたり、感想を書いたりできたのではないかと感じた。

本実践では「わらぐつの中の神様」の学習展開の中で、児童の感想シートを活用する。

- ・ 1時間目 物語を聞き、初発の感想を書く。
- ・ 2時間目 全員の感想(教師がまとめたもの)をプリントにまとめ、児童に配付。  
同じ感想を見つけていくことでカテゴリー化。  
(筆者の書き方、わからない言葉・昔の言葉、登場人物、神様)
- ・ 3時間目 言葉について(方言も含む)
- ・ 4時間目 登場人物 ・おみつさんについて ・大工さんについて
- ・ 5時間目 筆者の書き方  
・『大造じいさんとがん』との比較  
・額縁構造について
- ・ 6時間目 物語のおもしろさについて(一人一人)
- ・ 7時間目 本時  
みんなの考えた物語のおもしろさを読み、意見が似ている人同士で集まり、意見をまとめる。(予定では、まとめた意見を全て見て、自分の考えたおもしろさと比べるところまで進めるはずであったが、まとめるところまでしかできなかった。)
- ・ 8時間目 サブテーマを決める(一人一人)
- ・ 9時間目 サブテーマを発表し合い、自分の考えと比べながら聞き、考えを深める。

児童の感想シートを活用し、深い学びをみとるための評価活動にもつなげていきたい。

(3) 本時の学習(7/9時間)

ア 目標

クラス全員の感想を読み，グループや学級で交流し，物語のおもしろさを探るための観点に気づくことができる。

イ 展開

学習活動	指導上の留意点	評価
<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の学習課題を確認する。</li> </ul>		
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">                     みんなの感想を読み，物語のおもしろさについて考えを深めよう。                 </div>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラス全員の感想を読み合う。</li> <li>・作品のおもしろさはどこにあるか，自分の考えを整理する。</li> <li>・選んだ観点ごとのグループで，考えを深める。</li> <li>・グループで話し合ったことを，学級で交流する。</li> <li>・「わらぐつの中の神様」という題名がつけられた理由や，題名が表しているものについて考える。</li> <li>・本時の学習を振り返り，次時の学習の見通しをもつ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時に書いた全員の感想をプリントにまとめ，配布する。</li> <li>・今までに話し合った観点「神様」「登場人物」「筆者の書き方」「言葉・表現」などに分かれ，物語のおもしろさとしてまとめさせる。</li> <li>・題名について考えることで，次時のサブテーマを考えることにつながるように要点をまとめていく。</li> </ul>	<p>【読】 会話や心情表現，行動を表す分に注目し，登場人物の人柄やものの見方・考え方，構成や方言の効果について，作品の特色をまとめていく。</p> <p>【言】 物語の構成を捉え，その効果について考えている。</p>



【難波の梅小学校 公開授業の様子】

## わらぐつの中の神様 1時間目

### 〈みんなの感想〉

- ① 大工さんも同じ気持ちで働いていたんじゃないか。
- ② 大工さんに気持ちをわかってもらえてうれしかったらうな。
- ③ 話の人物と物語の実際の人物が結びつけられていた。
- ④ わらぐつの作り方は見ているだけでは大変だ。
- ⑤ おみつさんのうれしい気持ちが書かれていることことから伝わってきた。
- ⑥ 昔の言葉があった。
- ⑦ おじいちゃんはマサエのげたを見て思い出したのか。
- ⑧ 心をこめて仕事をするのが大切。
- ⑨ 大工さんがおじいちゃんできびくりにした。
- ⑩ 見た目では判断しない人
- ⑪ お金を自分でかせぐのがえらい。
- ⑫ 雪げたに神様がいて私も思った。
- ⑬ 神様がただでげたを買わせてくれるのかと思った。
- ⑭ 神様はすぐそこにいる。
- ⑮ 昔の言葉がわからない。「くるくと働いていた」など
- ⑯ 聞き覚えのない言葉「こたつにあたる」「あらかたかわいた」
- ⑰ 「しんしんと」やさしい雪がふっている感じ。
- ⑱ 心をこめて作ったものの全部を大切にできるようにになりたい。
- ⑲ おじいちゃんの顔が赤くなったのはなぜ？
- ⑳ わらぐつの中に神様がいてかもしれない。
- ㉑ 物語の続きでわらぐつかスキーぐつをはいていったのか。
- ㉒ 本当はおみつさんに会いたくてきているんじゃないか。
- ㉓ 余計なものなどほしいと思ったことがないっていうのがすごい。
- ㉔ 物を大切にしなければならない。
- ㉕ おばあちゃんにうれしかったからずっと覚えているんだなと思った。
- ㉖ わらぐつの中には神様がいてんだなと思った。
- ㉗ いろいろなことはすべて気持ちしだいだなと思った。
- ㉘ 余計なものはいらぬ人がほしがらぬぐらだからすごく美しかったんだなと思った。
- ㉙ マサエの気持ちが変わって次の日はわらぐつをはいていったと思う。
- ㉚ 問いと答えになっている。

(1名欠席)

※5年3組一人一人の感想を担当が読み、ポイントをひろって集めたものです。これをもとにして、みんなの感想を比べてわかること、似ている意見などを一つずつまとめていきました。その結果、4つの観点ができました。

『筆者の書き方』『わからない言葉・昔の言葉・表現』『登場人物』『神様』

これらの観点から学習を進めています。

## わらぐつの中の神様 6時間目

〈物語のおもしろさは？〉

- ② 大工さんとおみつさん、両方の顔が赤くなったところ
  - ③ 努力して手に入れたものを置いておく考え
  - ④ マサエの言っていることが最初と最後でちがう
  - ⑤ 相手を気づかずに買ってもらうことをわざわざ聞くところがすごい
  - ⑥ 今のことばと比べるとおもしろい
  - ⑦ おみつさんがおばあちゃんとわかったしゅんかん
  - ⑧ およめに来てほしいと言った時
  - ⑨ マサエはわらぐつをはいていったと思う
  - ⑩ おばあちゃんが自分の話をするとところ
  - ⑪ おじいちゃんはやさしい
  - ⑫ おみつさんがおばあちゃんに気づいたところ
  - ⑬ まどのしょうじがカタカタとなった
  - ⑭ きれいな雪げたをはけなかったというところ
  - ⑮ おばあちゃんがないしょにしているところ
  - ⑯ けっきょく1回もはかずに終わったところ
  - ⑰ 人物が同じだったこと
  - ⑱ おばあちゃんの話でマサエの心が変わったこと
  - ⑲ おみつさんが雪げたを見つけたのはキセキみたい
  - ⑳ 現在と昔の人物をつなげているところ
  - ㉑ 「しんしんと」雪がいっぱいふりそそいでいる感じ
  - ㉒ 昔の言葉と今の言葉の差がある
  - ㉓ 方言をつかっているところ
  - ㉔ おばあちゃんがおみつ、おじいちゃんが大工
  - ㉕ 使う人の身になって心をこめて作ったものには神様が入っている
  - ㉖ 実話を物語のように話しているところ
  - ㉗ 雪げたを買ってくれたけどはかなかったこと
  - ㉘ 自分で働いてほしい物を買うところ
  - ㉙ マサエの気持ちが変わったところ
  - ㉚ 大工さんがわらぐつを買うところ
  - ㉛ マサエがおばあちゃんの名前に気づくところ
- (1名欠席)

## わらぐつの中の神様 9時間目

### 〈物語のサブテーマ〉

- ② 照れ屋の二人
- ③ あなたにとっての神様って何ですか。
- ④ おばあちゃんの昔話
- ⑤ おみつさんの正体
- ⑥ おじいちゃんとおばあちゃんの過去の出来事を知る話
- ⑦ 私たちのまわりにも神様が？
- ⑧ おばあちゃんのお話 かことみらい
- ⑨ 物には神様がいる
- ⑩ おじいちゃんとおばあちゃんが出会う物語
- ⑪ おばあちゃんの雪げたの思い出
- ⑫ 雪げたは大切
- ⑬ おじいちゃんとおばあちゃんの今と昔の物語
- ⑭ おみつさんがつくったわらぐつにも神様がいるんじゃないか
- ⑮ 神様はわらぐつや雪げたにいる
- ⑯ まさえの心情の変化
- ⑰ まさえ明日何はいていく？
- ⑱ おばあちゃんのふしぎなお話
- ⑲ まさえとわらぐつの神様の出会い
- ⑳ 神様がくれたキセキの出会い
- ㉑ おばあちゃんの大事な思い出
- ㉒ 過去の話をするおばあちゃんのお話
- ㉓ わらぐつがおみつさんと大工さんをつなげた物語
- ㉔ おみつさんの雪げた
- ㉕ 神様は思いのつまっている物にいるかもね
- ㉖ ある日おばあちゃんのお話で…
- ㉗ おみつさんと大工さんをつないだわらぐつ
- ㉘ 神様からのプレゼント
- ㉙ おばあちゃんの話で過去を知る物語
- ㉚ 次の日わらぐつはいたかな
- ㉛ まさえの気持ちが変わった話
- ① 雪げたを買おう！

- ・子どもたちがみんなのサブテーマを聞き、自分と同じテーマが多い、少ないなど、比べて聞くことがいつも以上にできており、20人ほどがそのような感想を書いていた。
- ・さらに、似ていても微妙に違って、一人一人の考えが違うことに気づく児童もいた。
- ・自分の意見が深まったという感想を半分ぐらいの児童が書いていた。

### 2. 実践の考察

(1) 〈授業者より〉

ア 成果

考えを深めるということを目標としてきたことで、児童が考えを比べながら聞き、新たな発見を求める姿勢がついてきた。自分と比べて聞いたり、みんなの意見を比べて聞いたりしながら、わかったことを感想に書いている児童が多数いた。おもしろさについて話し合ってきた中で身につけられたと感じている。

イ 課題

- ・考えを深めるということや物語のおもしろさは一人一人違うので、全員が目標を達成できているかという評価は大変難しいものであった。
- ・単元計画や本時の計画はほぼ指導書通りの計画で考えてきたが、時間的に計画どおりいかない部分が多いと感じた。児童に何をさせたいか、考えさせたいか、より吟味して計画するが必要であると感じた。

(2) 〈部員のPMIシートより〉

P(プラス)	M(マイナス)	I(インテレストィング)
<ul style="list-style-type: none"><li>・観点ごとに話し合いができる</li><li>・感想が比較できる</li><li>・児童の話し合いが活発</li><li>・全員の意見の視覚化</li><li>・1hと6hの感想の変化</li><li>・4つの観点が浸透している</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・感想を抽象的な言葉でまとめてしまっている</li><li>・似た意見の子ばかり深まりはあるのか</li><li>・違う意見の子とも交流ができればよい</li><li>・一步踏み込んだ深まりにはたどりつけていない</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・付箋に書かせて自分でラベリング</li><li>・深まったかどうかわからないところがある</li><li>・4つの異なる観点から迫っていくところ</li><li>・「おもしろさ」をどうまとめるか</li></ul>

(3) 〈部員の振り返り〉

- ・「子どもの考えが深まる」とは、ということに疑問を持ち、実践されることはとても素晴らしいことだと思います。参観していた私たちも、深まるとは何なのかを考えることができました。
- ・「考えを深める」ということは、自校の研究でも課題に挙がるテーマで、とても勉強になりました。子どもたちに考えを深めさせたいと思いますが、まずは考えを深めたいという子どもの気持ちが必要ではないかと思いました。どうなれば深まったといえるのか、深まるとどんないいことがあるのか、ということが子どもの中にないと、深める活動は活性化しないのではないかと思います。教師側が深まるとはどういうことか、どんないいことがあるのか、はっきりわかっている必要性があります。それを考えるきっかけとなる授業で、大変興味深かったです。

児童全員の感想を1枚のシートにまとめ、学びを深めるための手立てとした実践であった。普段はノートに書かれていて、話し合いや発表などで共有していた個々の考えや意見を視覚化することで、友だちとの共通点や相違点が明確になり、対話的で深い学びに向かっていく学習モデルが提案できたと考える。

(2) 実践事例2 園和小学校 4年



1. 実践の概要

(1) 単元名 「詩を書こう 野原に集まれ」(光村図書)

指導者 園和小学校 増田 有希 教諭

(2) 本時の展開

学習活動	指導上の留意点	評価規準
1. めあてを確認する。		
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     伝えたいことが詩に表れているかどうか意見を述べ合い                      詩の表現をさらに工夫しよう。                 </div>		
2. 読み取りの観点を確認する。	①構成・題名, ②表現技法とその効果, ③言葉の選び方, ④作者の視点を手がかりにして読み取る。 ・作者が伝えたいことは, イメージマップや伝えたいことを書いたワークシートを参照する。	
3. 3人のグループで友達の詩を読み合う。	・「作者が伝えたいことは何か」を, 観点ごとに色の違うふせんに書きこみ, 詩に貼りつける。 ・着目した言葉や文などに, ふせんと同じ色の色鉛筆で印をつける。 ①構成・題名(赤ふせん) ②表現技法とその効果(青) ③言葉の選び方(黄) ④作者の視点(緑)	思 着目した表現に印をつけたり, ふせんに書きこんだりしている。
4. 意見交流をする。	・ふせんに書いたことについて, 意見を述べ合う。 ・作者が伝えたいことと詩の表現が繋がっているかを確認するために, イメージマップや挿絵を参考にする。	表 自分の意見を述べたり, 友達の意見を聞いたりしている。
5. 自分の詩を推敲し, 下書きに書き加える。	・下書きの詩に, 友達の意見を聞いて書き直したいことを赤で書き加える。	思 友達の意見をもとに, 表現を工夫して書き直している。
6. ワークシートを使い, ふりかえる。	・自分が, 詩を通して伝えたいことと, それを伝えるために工夫したことを書く。	思 自分が伝えたいことと工夫したことを書いている。

(3) 単元の評価規準

	A	B
学びに向かう力・人間性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マインドマップや詩に表したり、友達と交流したりして、伝えたいことを明確にしようとしている。</li> <li>・単元の終わりに、どのような方法で何がわかったりできるようになったりしたのかをふりかえっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マインドマップや詩に表したり、友達と交流したりして、伝えたいことを明確にしようとしている。</li> <li>・単元の終わりに、わかったことやできるようになったことをふりかえっている。</li> </ul>
知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「のはらうた」の詩を読んで、表現の工夫を見つけ、その効果を捉えている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「のはらうた」の詩を読んで、表現の工夫を見つけている。</li> </ul>
思考力・判断力・表現力等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イメージマップをもとに、最も伝えたいことを明確にして詩に表している。</li> <li>・書いた詩について、表現の工夫を観点に意見を述べたり聞いたりして、自分の伝えたいことをより明確にし、表現を工夫して書き直している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イメージマップをもとに、自分の思いや考えを明確にして詩に表現している。</li> <li>・書いた詩について、表現の工夫を観点に意見を述べたり聞いたりして、表現を工夫して書き直している。</li> </ul>

(4) 本時の評価規準

評価項目	A	B
<p>伝えたいことが詩に明確に表れているかどうかを、表現の工夫を観点にして意見を述べ合い、より明確に伝わる表現に書き直すことができる。</p> <p>【思考力・判断力・表現力等】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・書いた詩の表現の工夫について意見を述べたり聞いたりして、自分の伝えたいことがより明確に表れるように自分の詩を書き直している。</li> <li>・書き直す必要がないと判断した場合は、その理由をワークシートに書いている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・書いた詩の表現の工夫について意見を述べたり聞いたりして、自分の詩の表現を書き直している。</li> </ul>



【園和小学校 公開授業の様子】

## 2. 実践の考察

### (1) 〈授業者より〉

今回の詩の授業では、「詩を通して自分の伝えたいことを素直に表現すること」を意識して単元計画を立てた。本時は、友達と対話をしながら推敲する場面であったが、結果として、推敲しない方がその児童らしい工夫が出ていたり、味わいのある表現をしていたりするものが多々あったように思う。よりよい授業にするための工夫を、以下の視点で考えた。

#### ア 詩を書くときの手立てについて(イメージを持つ)

工藤直子さんの「のはらうた」を読むことを楽しむことで、児童は「自分も書いてみたい。」という気持ちを持っていた。自分の伝えたいことを引き出すために、自分なりにやりたい自然のものについて、イメージマップを書かせた。イメージマップの中から、詩に書いてみたいものを選び、それをもとに詩を書いたことで、「何を書けばいいのかわからない。」ということはほとんどなかったと思う。

課題として、イメージマップの中から詩の題材として選んだものを、どうふくらませるかということがある。イメージマップの末端にあるものを選んだ児童は、そのことについてイメージがふくらんでいないからである。例えば、選んだものを中心にしてさらにイメージマップを書いてはどうか。

また、「伝えたいこと」をどこまで掘り下げて書くのかが不明瞭だった。例えば、「ありは夏に(みんなに見えるところで)活動することを伝えたい」という具体的事実を挙げる児童もいれば、「(つばめの巣立ちから)親子の切ない気持ちを伝えたい」と抽象的なテーマを意識する児童もいる。これについては、②に書いている「題名の工夫」につながってくるのかもしれない。

#### イ 詩を書くときの手立てについて(観点と対話)

詩を書いたり推敲したりするにあたって、観点として「構成・題名」「表現技法」「言葉の選び方」「作者の視点」の4つを児童に示した。児童それぞれに工夫したいことが違うだろうと予想して4つ設定したが、結果として、これらの意味を児童が理解できず、児童が混乱してしまい、友達の詩を読んで対話する場面においても効果を生み出しきれなかった。

今回のように、「表現したいことが詩に表れているかどうか」という視点で推敲するなら、「題名」の工夫に絞るなどしてはどうか。また、他者との対話、自己との対話をしながら題名に工夫を凝らしていく過程で、児童が伝えたいテーマが見えてくるかもしれない。

#### ウ 推敲することについて(推敲の必要性)

推敲は、詩以外にも様々な場面で用いるが、果たしてそのよさを児童が感じているのか。今回は、「書き直す」という前提から始まってしまったため、無理に書き直すことで、元の詩の良さが無くなってしまった児童がいた。まずは、児童自身が推敲の必要性を感じる必要がある。例えば、みんなで詩の推敲をして、表現の工夫によって変わる感動を味わったりするなどができるのではないかな。そして、「直さない」という選択肢も示しておく。

#### エ 評価について

今回は、「自分の伝えたいことが詩に表れているか。」を視点に推敲したが、前に書いたイメージマップを見ながら自分で確認できたのはよかった。

ただ、「自分の伝えたいことが表れているか」という基準は曖昧で、児童も教師も評価しにくいものである。しかし、100%客観性のある評価をすることは不可能であり、詩の評価は難しい。例えば、「何を伝えるために、どのような工夫をしたか」をふりかえり、詩と合わせて評価するのが妥当ではないかと考えた。

評価をすることによって、児童が学習する意義を見出し、次の学びにつなげられるようにしたい。「推敲をすることでさらによい詩ができた。」「話し合うことで伝えたいことが明確になった。」といったことがふりかえりに表れていればよいと思う。また、話し合いの場面を、児童にとって必然性のあるものにし、効果的な方法で行われるように人数や机の位置、メンバーの組み合わせなどを工夫することが課題である。

#### オ 教師の役割について

教師は、活動の前や活動と活動の間の動きが重要であると学んだ。ただそれぞれの学習過程を示し、進めていくだけでなく、考え方のモデルになる児童のしていることを紹介したり、状況を観察して、全体に伝えたり、より思考する発問を投げかけたりすることを役割として意識する必要がある。今回、一人の児童が友達の意見を詩に書きこんでいる様子を紹介したが、実物投影機に写すなど、全員にわかるように工夫をすればよかったと思う。教師の動き一つ一つにこだわっていきたい。

#### (2) 〈部員のふり返し〉

- ・推敲という内容を取り扱っていたことで、新しい視点として参考になった。書き直しというイメージが強いので、子どもたちのモチベーションが上がらないことが多いと思うが、どの時点でアドバイスし合うのか、どういう内容を伝え合うか、またはよいものを改悪してしまわないようにする手立てなど、自分が授業を行うときに考えるきっかけとなった。
- ・詩の授業でいつも難しいと感じるのは、どこまで自由に書かせるか、どこまで広げるかを迷います。先生が焦点化し、絞って教える内容を考え与えることが大切だと言われていたので、自分の考えがすっきりまとまりました。今日の授業を見て、子どもたちに具体的に伝えるモデル文やルールを伝える手立てが必要だと実感しました。
- ・イメージマップを意見交流でも用いるのは、いい考えだと思う。もっと活用して自分の思いを話せたらよかった。詩という、一人一人の思いを大切に表現させてあげたい教材で、推敲やアドバイスをどの程度取り上げるか難しいと感じた。この1時間で、自分の詩にほとんど変化がなかった子は、自分の学習を実感できたのか、疑問に思った。

## 5 ローカルで、グローバル、そしてワイドな教育を

桃山学院教育大学 今宮 信吾

### (1) ふりかえる習慣を

平成という時代が終わり、新しい時代が訪れようとしています。本年度は、道徳が教科として位置付き、英語も先行実施され、2020年に向けて着実に歩み始めたように思います。新しい教科書の検定も終わり、教育内容の充実がそこからもうかがうことができます。

一方で教師の働き方改革など、教師の負担軽減の取り組みも本格化しているように思います。加えて、AI時代に向けてということで、私たちの仕事も変化を求められるようになってきました。「温故知新」ということばがあります。どれだけ時代が新しくなろうとも、変わらないものという「不易流行」と比べて考える事もありますが、私はこんな風にいまの時代を捉えています。新しいものに出会った時には、不安や、不信感があるものです。また、古いものを知る過程の中にこそ、新しいことを発見する要素があると思うのです。時代が変わろうとする過渡期に、しっかりと足元を確かめて進む必要性を感じます。そんな時に思い浮かぶことばは「脚下照顧」です。他に向かって理屈を言う前に、まず自分の足元を見て自分のことをよく反省すべきことを指しています。尼崎の先生とかかわらせていただいて、常に思うことは、教育に対するひたむきさと、謙虚さです。「常に学び続けるものにこそ、教える権利あり」ということばも同時に浮かびます。

### (2) 尼崎スタイルの創造を

足掛け4年間「アクティブ・ラーニング」部会としての活動を見守ってきました。1年目と比べて、変わったことは、授業創りの楽しさと難しさを感じたことだと思います。

そんな過程で、尼崎という地域を見つめ直すことができるようになってきたのではないのでしょうか。新しく尼崎城も再建されました。そして、「すみよい街ランキング関西」で1位になったこともあり、人口も増えてきています。給食のオープンの素晴らしさがテレビでも取り上げられました。

尼崎で生きる子どもたちに対して、このアクティブ・ラーニング国語部会から率先して、尼崎のことが好きな子どもたちと先生を増やして行ってほしいと思います。そのためには学びに関する尼崎らしい授業スタイルを創作してほしいです。それを考えるためのキーワードを新教育課程に照らして四字熟語として期待する子どもの姿で考えてみましょう。

**【知識及び技能】**・・・凡事徹底，一所懸命

当たり前のことを当たり前身につけて、社会で生きて働くための知識及び技能は身につけなければいけません。そのために、子どもたちに声かけをしたいことばです。

**【思考力・判断力・表現力】**・・・沈思黙考，切磋琢磨

一人で黙って黙々と考えることができる子どもに育てたいと思います。その上で、人と共に学ぶ姿勢も身につけてほしいと思います。互いの違いを豊かさにできるそんな子どもたちに育てたいです。

**【学びに向かう力】**・・・気宇壮大，自由闊達

気構えや度量、発想などを大きく持ち、大胆に行動できるような自由さを持って学びを捉えてほしいと思います。その子に合わせた学び方や学ぶ意欲を高められるようなダイナミックな授業を目指してほしいと思います。

### (3) 多面的に観る

子どもたちに対する眼差しを多面的にもってほしいと思っています。その際に、「虫の目」「鳥の目」「魚の目」という三つの目を持つことが大切だと言われます。簡単に説明すると、物事の状況を判断する際に「大局観のある人」と使われることが多いです。

まず、「虫の目」とは、虫のように小さな目で物事の状況を見てみる。(ミクロ世界)のことです。子どもたちの小さな変化を見逃さないで、それを将来の成長に向けてどのように判断し、指導の手を加えるのかということ。ローカルな目でみとることです。

次に、「鳥の目」とは、鳥のように上から俯瞰して(鳥瞰図)物事の状況を見てみる。(マクロ世界)のことです。目の前で起こっている現実を、場当たりの解決で終わらせないために、少し、離れたところから見通して観ること。ワイドに見つめることです。

最後に、「魚の目」とは、魚の特徴を活かした能力のことです。その魚の能力とは、「潮の流れを読む」、つまり時代や市場の流れを読むことです。いま、目の前で起こっている状況は、時代や地域、など時流の中でどこに位置づいているのかということを考えることです。この流れに乗るべきなのか、避けるべきのかなどの判断力が伴います。目の前に課題をどう対応していくのかということを見極める視点作りにもなります。世の中は、国連が設定した持続可能な開発目標としてのSDGsを解決するための教育に動こうとしています。グローバルな視点を持って授業創りを楽しんでほしいと思います。

### (4) 深い学びのための評価眼

子どもたちをどのようにみとり、それを生かすために、全体と部分を判断しながら、授業創りをすることが求められています。これからの課題は、「深い学び」とは何かを子どもたちと保護者、世間に伝えるための説明責任(アカウンタビリティ)を、評価として提示することです。つまり、証拠(エビデンス)をきちんと示しながら教育活動を行うことが求められています。証拠として示すためのポイントをいくつか挙げて、これからの実践に期待したいと思います。

- ①子どもたちに学んでいるという達成感があるか
- ②子どもたちの成長が見える化できているか
- ③学ぶ意味を伝え、これから生きる意味を伝えているか
- ④自分にしかできないことをきちんと伝え、感じ取らせているか
- ⑤学校という学びの場の必要性を感じ取らせているか。

評価と聞くと、どうしても厳密で難しいものと捉えてしまいがちですが、もっと柔軟で楽しいことと考えられるような教師の意識の転換を求めたいと思います。「主体的・対話的で深い学び」の実現のためには、評価の方法としての尼崎スタイルが必要です。そのことが部会でも話題になったループリックの設定と活用です。教師のみならず、子どもたち自身がループリックの必要性を感じ取れるといいと思います。

これからの教育は、時流を捉えたグローバルな視点は欠かせません。しかし、その際

に、尼崎としてのローカルな視点も忘れてはいけないと思います。尼崎だからできることをよりワイドな視点で考えられる教育に期待します。

## 6 終わりに

「アクティブ・ラーニング部会に参加してみて、国語の授業づくりについて積極的になることができました。今までは、指導書を参考に進めてばかりでした。が、今宮先生のご講話や部会で出会った他校の先生方のお話を聞いて、一つ一つの単元について計画立ててやっている姿勢に、自分も目の前の子どもの姿から計画を立て、評価していかなくてはならないという気持ちになりました。」(部員のふり返りより)

平成28年度より、市内の各小学校から選任された教員が一堂に会し、国語科における「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)」の実現に向けた研究を進めてきた。アクティブ・ラーニングに焦点をあてた授業改善(平成28年度)、地域教材の開発とカリキュラム・マネジメント(平成29年度)、「深い学び」の実現と学習評価の在り方(平成30年度)。部員の先生方が、3年間の研究を通して、学びを共有し、刺激し合い、お互いに高め合っていく姿を目の当たりにした。

また、部会での学びを、所属校の校内研究や学年研究、学校独自のスタディ座談会等で伝達してもらい、発信者としての役割も担ってもらった。

「評価を自分で考えていた分を、学年で共有し、考えたい」「評価を子どもたちと考えてみたい」「授業内の評価(A, Bの基準)を伝えるということに取り組むと子どもたちがより意欲的になった」など、評価の在り方について研究を進める中で、その重要性や成果について、部員も実感できたのではないだろうか。

本年度の研究に際して、専任講師である今宮先生より、「他に類を見ない尼崎市独自のスタイル創造を！」との言葉を頂き、実践を重ねてきた。「尼崎市発」と胸を張って誇れるような授業改善、授業実践に向けて、不断の努力を重ねていかなければならないと考える。

学び続ける教員同士のネットワークを大切にしながら、尼崎市だからこそできるような研究を今後も継続して行っていきたい。

### 【参考・引用文献】

今宮 信吾『人間教育をすすめるために-主体的・対話的で深い学びを創造する-』  
株式会社ERP 2018年3月

二瓶 弘行『最高の「言葉の力」を育む国語科単元づくり』  
東洋館出版社 2016年8月

## 「アクティブ・ラーニング(主体的・対話的で深い学び) で創る算数科の授業を目指して」

研修担当係長 相方伸二

### 【内容の要約】

本研究部会では、算数科における「授業改善」を図り、「アクティブ・ラーニング」(主体的・対話的で深い学び)で創る授業を構築していく上で、以下のような実践に取り組む。

○部会での学びを通して、目標とする授業の様相や子どもの姿を明確にしていく。

- ・専任講師による継続した指導をもとに、自分の授業の問題点を自覚するとともに、それらを日々の算数授業における授業改善に役立てる。
- ・専任講師により示された「子どもの声や問いに常に寄り添って、問いが連続するような授業を展開すること」を授業変革の第一歩とする。

○教師自身もアクティブに学びを得られるよう参加型の研修を設定する。

- ・教材を研究する力、教材提示や指導技術等の実践的な授業力を身につける。
- ・「授業を観る力」、「子どもを観る力」を鍛え、「授業を創る力」に直結させる。
- ・各自が事前作成課題を持ち寄り、授業実践交流を行う。

○代表者による公開授業を設定する。

キーワード： 4つのズレ、問いを引き出す、問いが連続する授業展開

1	はじめに	20
2	研究について	20
3	研究経過について	23
4	実践報告	26
	Ⅰ 公開授業【4年生】(園田南小学校 吉田 大)	
	「広さを調べよう」	26
	Ⅱ 公開授業【5年生】(武庫小学校 山本 正貴)	
	「割合の表し方を考えよう」	30
5	専任講師による研究の総括「子どもに寄り添う展開」 (関西大学初等部 尾崎 正彦)	35
6	終わりに	36



## 1 はじめに

本年度から次期学習指導要領に向けての「移行期間」が始まった。今回の改訂のキーワードである「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、さまざまな取組や実践がなされており、その成果や課題についても報告がなされているところである。

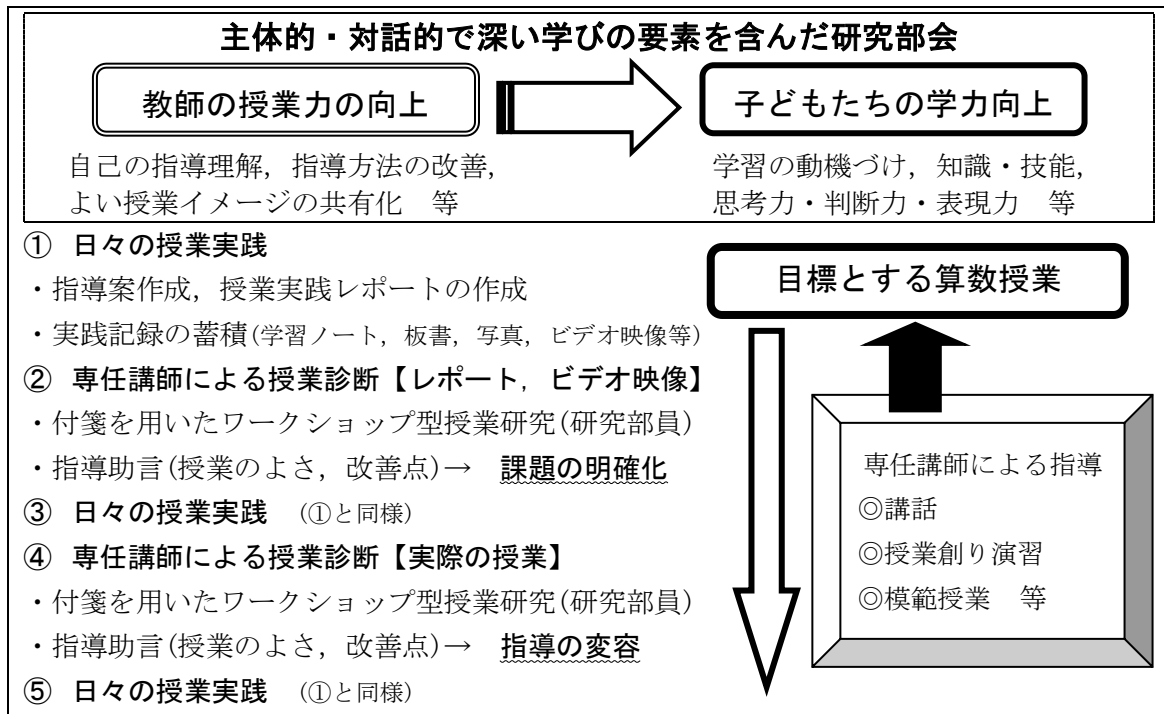
本市教育委員会でも、小学校における2020年度(平成32年度)の全面実施に向けて、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善と尼崎の子どもたちの実態に適した学習・指導方法の改善、そして、それらの改善した内容を市内へ普及させることを目的として、一昨年度より「アクティブ・ラーニング学習モデル研究事業」を実施している。

本研究部会は、2014年(平成26年度)より算数科教育研修講座にて継続的な指導をいただいている関西大学初等部 尾崎 正彦 氏(全国算数授業研究会全国常任理事)を専任講師として迎え、尼崎市内小学校より推薦された41名の教員で構成している。

これまで、尾崎先生より示していただいた「子どもの思いを大切にし、子どもに寄り添う授業展開を継続する中で、子どもの思考を価値づける、そんな授業創りをめざして、今後も教師としての授業スキルを高めてもらいたい。」との指針をもとに、今年度も本研究部会では「授業改善」に焦点をあて、『アクティブ・ラーニング(主体的・対話的で深い学び)で創る算数科の授業』について研究を進めることとした。

## 2 研究について

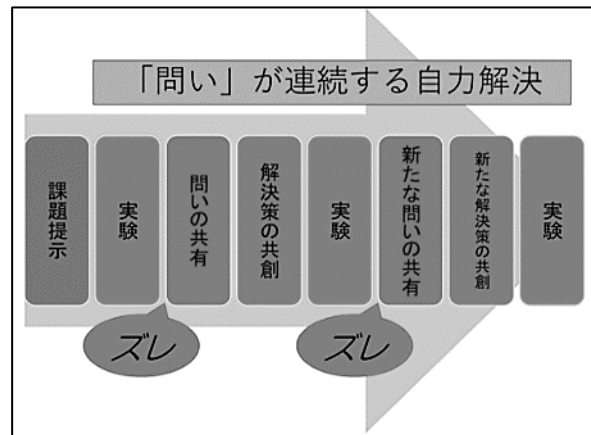
### (1) 小学校算数科教育アクティブ・ラーニング部会の構想



## (2) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の方向性

専任講師の関西大学初等部 尾崎 正彦氏より授業を変革する第一歩として示されたのが、子どもの声や問いに常に寄り添って、問いが連続する授業を展開することであった。

そして、右図の「問い」が連続する授業展開プランについて、授業創り演習や尾崎先生の具体的な授業実践を通して提示いただいた。(ただし、あくまで一例であり、形式的指導に当てはめるものではない。)



特に、次の3点を意識して授業実践を行ってきた。

- ① 導入場面など授業のどこかに「友だちの考えとのズレ」「予想とのズレ」「感覚とのズレ」「既習事項とのズレ」をしかけることで、子どもの「問い」を引き出すこと
- ② 「だったら」「例えば」「たまたまじゃないの」「絶対に」「もし…だったら」「でもさあ」「やっぱり」など授業のなかで生まれる子どもの価値あるつぶやきを教師自身がキャッチし、そのつぶやきを価値づけたり、学級全体に読み解かせたりするなど共有化を図ること
- ③ 教師が親切に解説しすぎず、子どもの「問い」を中心に据えた授業を展開すること

さらに、部会においては、授業力の向上を図る上で次の三点が効果的であると考えている。

### 1. 授業創り演習を設定

まずは、個人で検討した上でグループ交流、そして各グループの代表による模擬授業を行った。最後に、専任講師の授業実践が子どもの姿とともに具体的に提示された。このような「自分ならどう実践するか？」を思考、プランニングする場面を必ず設定することで、日々の授業実践に直結させる仕掛けとなった。

### 2. 担当学年による少人数グループを構成

年間を通じて、学校を越えた担当学年によるグループを編成しており、所属の学校は異なるが、同じ尼崎市の子どもたち、同じ学年の子どもたちという共通点をもった先生方が集い日々の算数の授業創りについて刺激し合えるコミュニティとなった。

### 3. 事前作成課題をもとに交流する場の設定

部会では、必ず「事前作成課題」を持ち寄ることとした。ある程度の負荷がより学びを充実させるものとなった。

- ・各自が公開授業を想定して作成した指導案をもとにプレゼン交流をする。
- ・自分が本時の授業を実施することを想定し、「どんなふうに展開したいか」等についてまとめた指導略案(本時案)を持ち寄り、代表者による公開授業を参観する。
- ・算数授業実践レポートをもとにプレゼン交流をする。

部会での『学び』と毎日の『授業実践』が直結し、往還的な関係性を保ち続けられるような教師自身が学びを継続できる実践的なサイクルにより、授業改善を図ってきたところである。

(3) 小学校算数科教育アクティブ・ラーニング部員

	学校名	氏名	学年		学校名	氏名	学年
1	明城小学校	淵崎 光	3年	22	立花北小学校	中野 一哉	4年
2	難波小学校	辻岡 悠佳	5年	23	名和小学校	藤原 淳子	3年
3	難波の梅小学校	森 大祐	6年	24	塚口小学校	澤 航平	2年
4	竹谷小学校	西浦 一樹	2年	25	尼崎北小学校	澤田 泉	2年
5	下坂部小学校	藤田 和久	5.6年新学習	26	水堂小学校	安田 直樹	4年
6	潮小学校	川中 啓	1年	27	七松小学校	関井 康人	4年
7	長洲小学校	水本 雅昭	4年	28	武庫小学校	山本 正貴	5年
8	清和小学校	志水 昌彦	3年	29	武庫南小学校	池淵 正樹	6年
9	杭瀬小学校	岡 委久	4年	30	武庫北小学校	山崎 明美	5.6年新学習
10	杭瀬小学校	渡邊 美和子	5.6年新学習	31	武庫東小学校	鈴木 佳世	6年
11	浦風小学校	大谷 昇平	3年	32	武庫庄小学校	伊藤 優	4年
12	金楽寺小学校	丸橋 弘和	6年	33	武庫の里小学校	鎌尾 千晶	4年
13	浜小学校	角井 智美	5年	34	園田小学校	早藤 沙恵	2年
14	大庄小学校	野口 祥代	1年	35	園田北小学校	大戸 美奈子	5.6年新学習
15	成徳小学校	荒木 菜那	5.6年新学習	36	園和小学校	亀岡 優子	5年
16	わかば西小学校	利重 里奈	1年	37	園和北小学校	辻本 悠之助	3年
17	大島小学校	松下 紋華	1年	38	上坂部小学校	竹内 宏美	5.6年新学習
18	浜田小学校	岡田 早百合	5年	39	小園小学校	牧原 由季	3年
19	立花小学校	渡邊 由香	5.6年新学習	40	園田南小学校	吉田 大	4年
20	立花南小学校	西村 信作	1年	41	園田南小学校	郷田 峻次	5年
21	立花西小学校	小野 裕未	2年				

(4) 小学校算数科教育アクティブ・ラーニング部会 年間の取り組み

回	実施日	研修内容等
1	7月6日(金)	大雨警報発令のため中止
2	7月27日(金)	講話：「算数科で創る主体的・対話的で深い学び」 授業創り演習：3年生「円と球」の授業プラン 指導案演習①：各自が作成した指導案提案，質疑 指導案演習②：各学年グループで代表授業を決定
3 ・ 4	8月2日(木) 【午前】【午後】	指導案交流 代表授業者決定 授業映像を使った研究 園和小学校 亀岡 優子 教諭 1年「3つのかずのけいさん」 研究協議，指導助言
5	8月22日(水)	基調講話：すべての子どもを算数好きにする「しかけ」「しこみ」 講師：筑波大学附属小学校 教諭 山本 良和 氏
6	12月17日(月)	授業代表者による公開授業① 園田南小学校 吉田 大 教諭 4年「広さを調べよう」 研究協議，指導助言

7	2月6日(水)	授業代表者による公開授業② 武庫小学校 山本 正貴 教諭 5年「割合の表し方を考えよう」 研究協議, 指導助言
	2月18日(月)	尾崎先生による公開授業(園田南小学校にて) 4年「変わり方(こんな変わり方ってあるの)」 算数科指導におけるQ&A
8	2月25日(月)	学年等のグループによる授業実践レポート交流(グループ→全体) 指導助言:「算数科で創る主体的・対話的で深い学び」

### 3 研究経過について

#### (1) 第2回 平成30年7月27日(金)教育総合センター601・602研修室

講話・演習「算数科で創る主体的・対話的で深い学び」

講師 関西大学初等部 教諭 尾崎 正彦 氏

##### ①主体的・対話的で深い学びって？

- ・主体的な学び→問題を見いだす(問い)
- ・対話的な学び→話したい・聞きたい場面設定 ×形式的対話
- ・深い学び→一般化や新しい場面の創造 ×発展問題

##### ②主体的になる仕掛けはありますか？ →主体的な学びを引き出す仕掛けが「問い」

- ・「たい」を引き出す授業構成を
- ・「問い」の連続が授業を変える
- ・教師の授業スタンスの基本

##### ③授業創り演習

##### ④指導案創り演習

- ・指導プラン作成および提案
- ・各担当学年グループで代表授業選出

##### ⑤次回に持ち寄る課題

- ・代表授業と同じ場面の授業略案作成(どちらかの代表授業)
- ・A4版1枚以内(裏表可), 参加者分印刷

#### (2) 第3・4回 平成30年8月2日(木)教育総合センター601・602研修室

##### ①指導案交流, プレゼン協議

##### ②各グループの模擬授業によるプレゼン発表

- ・模擬授業, 使用する教材を提示 等
- ・代表授業者2名選出

##### ③亀岡先生の授業を分析しよう

- ・個人→グループ交流→全体交流
- ・視点1: 子どもは主体的に動いていたか
- ・視点2: 次の公開授業に引き継ぐものは何か

##### ④次回に持ち寄る課題

- ・代表授業と同じ場面の授業略案作成(どちらかの代表授業)

・ A 4 版 1 枚以内(裏表可), 参加者分印刷

(3) 第5回 平成30年8月22日(水)教育総合センター701研修室

講話 すべての子どもを算数好きにする「しかけ」「しこみ」

講師 筑波大学附属小学校 教諭 山本 良和 氏

①数学的な問題発見, 問題解決の過程を重視した数学的活動

- ・算数の学習場面から見いだした問題を解決する活動
- ・日常の事象から見いだした問題を解決する活動

②算数授業の「しかけ」と「しこみ」とは?

- ・「しかけ」1時間の授業の中での手立て
- ・「しこみ」長いスパンで捉えられる授業の手立て

③算数授業の「しかけ」と「しこみ」の関係

④算数授業の「しかけ」と「しこみ」の方法とその意味・機能

⑤「深い学び」のある算数授業

- ・「きめる」→直感的, 感覚的に
- ・「きめ直す」→子ども自身の価値基準をもとに
- ・「きめ直す」→より絞り込まれた子どもの価値基準を基に

⑥「きめ直し」を通して数学的な資質・能力を育む

⑦算数授業の「しこみ」として価値づけるべき子どもの姿

(4) 第6回 平成30年12月17日(月)園田南小学校

①公開授業 第4学年 算数科 「広さを調べよう」

・指導者 園田南小学校 吉田 大 教諭

②公開授業についての研究協議会

- ・授業者より
- ・個人による分析
- 視点1: 子どもは主体的に動いていたか
- 視点2: 次の公開授業に引き継ぐものは何か

・指導助言 講師 関西大学初等部 教諭 尾崎 正彦 氏



【この授業のよさ】	【この授業の課題】
<ul style="list-style-type: none"> <li>○的あてゲームのおもしろさ</li> <li>○切る, 重なる, 数えるにつながる教材</li> <li>○子どもの弦きを生かそうとしている</li> <li>○調べ方にズレが生まれた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○本時は何ができれば良かったのか</li> <li>○グループのズレを全体の舞台にのせる</li> <li>○各発表の共有がたりない</li> </ul>

(5) 第7回 平成31年2月6日(水)武庫小学校

①公開授業 第5学年 算数科 「割合の表し方を考えよう」

・指導者 武庫小学校 山本 正貴 教諭

②公開授業についての研究協議会

- ・授業者より
- ・個人による分析
- 視点1: 子どもは主体的に動いていたか
- 視点2: 毎日の算数授業に引き継ぐものは何か



・指導助言 講師 関西大学初等部 教諭 尾崎 正彦 氏

【この授業のよさ】	【この授業の課題】
<ul style="list-style-type: none"> <li>○どちらがお得かすぐには判断できない素材</li> <li>○大切な発言を共有させる技</li> <li>○価格カードの工夫</li> <li>○子どもから生じた気付きと主体的学び</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○教師が誘導してしまった。→教師が投げかけるのではなく、子どもから「疑問の声」を引き出さないといけない。</li> <li>○授業の核心に迫るための児童の「問い」が十分に膨らんでいなかった</li> </ul>

(6) 尾崎先生による公開授業 平成31年2月18日(月)園田南小学校

①公開授業 第4学年 算数科 「変わり方」

指導者 関西大学初等部 尾崎 正彦 教諭



②事後研究会

・算数科における Q&A

専任講師の尾崎先生に参加者からの質問に答えてもらう

- ◆導入～しかけの発想
- ◆言語活動(読解力/記述力 等)
- ◆授業のねらい/構成の仕方
- ◆グループ学習について
- ◆教師と子どもの役割
- ◆個別対応 など

(7) 第8回 平成31年2月25日(月)教育総合センター601・602研修室

①算数授業実践レポートを基にしたプレゼン交流(グループ交流→全体交流)

※「一番うまくいった算数授業」, 「一番愉しく展開できた算数授業」をテーマとした授業実践レポートを各自で作成の上, 持参(A4版1枚以内)

②尾崎先生による講話・講評(演習含む)

※子どもがどうすれば主体的に学ぼうとできる「問い」になるか?

## 4 実践報告

### I 公開授業【4年生】(園田南小学校 吉田 大)「広さを調べよう」

(1) 単元名 「広さを調べよう」

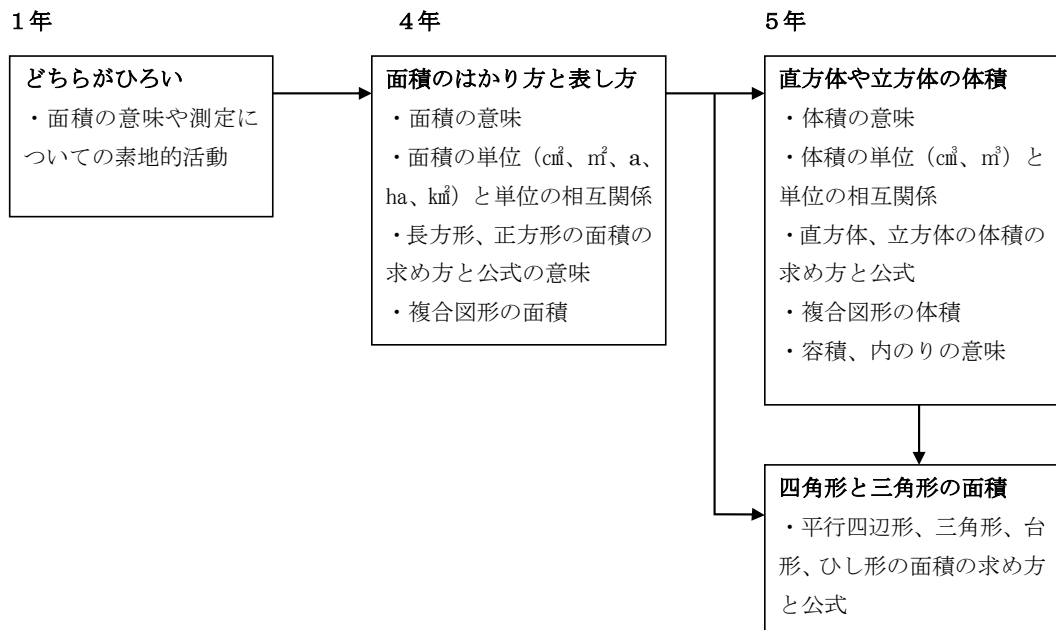
(2) 単元目標

- 面積を数値化して表わすことよさや、計算によって求められることの便利さに気づき、身の回りの面積を求めるなど生活に生かそうとする。(関心・意欲・態度)
- 面積について、量や乗法の学習を基に、単位の何こ分で数値化して表すことや、辺の長さを用いて計算で求められることを考え、とらえることができる。(数学的な考え方)
- 長方形、正方形の面積を、公式を用いて求めることができる。(技能)

○面積について、単位と測定の意味や、長方形や正方形の面積は計算によって求められることやその求め方を理解し、面積についての量感を身につける。(知識・理解)

(3) 単元について

○系統図



(4) 指導計画【全 1 1 時間 本時：第 1 時】

時	目標	学習活動	おもな評価規準
(1) 広さの表し方 下 p.12~15 2 時間			
1 本時	○面積の比べ方をいろいろな方法で考え、面積を比べることができる。	・的当てゲームの、的の当たりの部分の面積の比べ方を考える。	既習の量の場合を基に、いろいろな方法で面積の比べ方を考えようとしている。【関・意・態】
2	○面積の単位「平方センチメートル( $\text{cm}^2$ )」を知り、面積の意味について理解する。	・面積の単位「平方センチメートル( $\text{cm}^2$ )」を知る。	面積の意味や面積の単位「平方センチメートル( $\text{cm}^2$ )」を理解している。【知識・理解】
(2) 長方形と正方形の面積 下 p.16~23 3 時間			
3	○長方形、正方形の面積を計算で求める方法を理解し、面積を求める公式をつくらることができる。	・長方形、正方形の面積を計算で求める方法を考える。 ・「公式」の意味を知り、長方形、正方形の面積の公式をまとめる。	面積は計器による測定でなく、縦、横の長さから計算で求められることの便利さに気づいている。【関・意・態】 面積の公式を用いて、長方形、正方形の面積を求めることができる。【技能】
4		・公式を用いて、長方形や正方形の面積を求めたり、辺の長さを求めたりする。 ・周りの長さが等しい長方形や正方形の面積を調べ、周りの長さが等しくても面積が異なる図形があることをおさえる。	
5	○既習の長方形や正方形の	・長方形を組み合わせた図形の面積	どの考え方も既習の長方形や正方形の

	面積を求める学習を活用して、長方形を組み合わせた図形の面積の求め方を考え、面積を求めることができる。	を、分割したり、補ったりするなどのいろいろな考えで求める。 ・他者の考えを読み取り、図や式などで説明する。	形を基にして求めていることに気づき、既習を活用するよさを認めている。 【関・意・態】 長方形を組み合わせた図形の面積の求め方を、求積方法が既習である長方形や正方形に分割するなどして考え、図や式などを用いて説明している。【数学的な考え方】
(3)大きな面積の単位 下 p.24~27 4時間			
6	○面積の単位「平方メートル( $\text{m}^2$ )」を知り、辺の長さがmの場合も、長方形や正方形の面積の公式が適用できることを理解する。	・長方形の形をした教室と正方形の形をした理科室の面積の求め方を考える。 ・面積の単位「平方メートル( $\text{m}^2$ )」を知る。 ・辺の長さがmで表わされていても、面積の公式が使えることを確認する。	辺の長さがmで表された長方形や正方形の面積も、面積の公式を適用して求められることを理解している。【知識・理解】
7	○面積の単位 $\text{m}^2$ と $\text{cm}^2$ の関係を理解する。	・1 $\text{m}^2$ は何 $\text{cm}^2$ になるか調べる。 ・紙を使って、1 $\text{m}^2$ の正方形を作り面積の量感をつかむ活動に取り組む。	面積の単位 $\text{m}^2$ と $\text{cm}^2$ の関係を理解している。【知識・理解】
8	○面積の単位「アール(a)」「ヘクタール(ha)」「平方キロメートル( $\text{km}^2$ )」を知り、面積の単位の相互関係を理解する。	・1辺の長さを10mや100mにしたときの面積を考え、面積の単位「アール(a)」「ヘクタール(ha)」を知る。	1 $\text{cm}^2$ 、100 $\text{cm}^2$ 、1 $\text{m}^2$ 、1a、1ha、1 $\text{km}^2$ で表される正方形の1辺の長さとの面積から、正方形の1辺の長さが10倍になると面積は100倍になる関係を見出し、説明している。【数学的な考え方】 面積の単位「a」「ha」「 $\text{km}^2$ 」と、その相互関係を理解している。 【知識・理解】
9		・町の面積を調べ、面積の単位「平方キロメートル( $\text{km}^2$ )」を知る。 ・1 $\text{km}^2$ は何 $\text{m}^2$ になるか調べる。	
まとめ 下 p.28~29、127 2時間			
10	○学習内容を適用して問題を解決する。 ○数学的活動を通して学習内容の理解を深め、面積についての興味を広げる。	・「力をつけるもんだい」に取り組む。 ・[やってみよう]身の回りのいろいろな物の面積を、見当をつけてから調べる。	学習内容を適切に活用して、活動に取り組もうとしている。 【関・意・態】 学習内容を適用して、問題を解決することができる。【技能】
11	○学習内容の定着を確認し、理解を確実にする。	・「しあげ」に取り組む。	基本的な学習内容を身につけている。 【知識・理解】

(5) 本時の展開(1 / 11)



①目標

- ・面積の比べ方をいろいろな方法で考え、面積を比べることができる(数学的な考え方)。

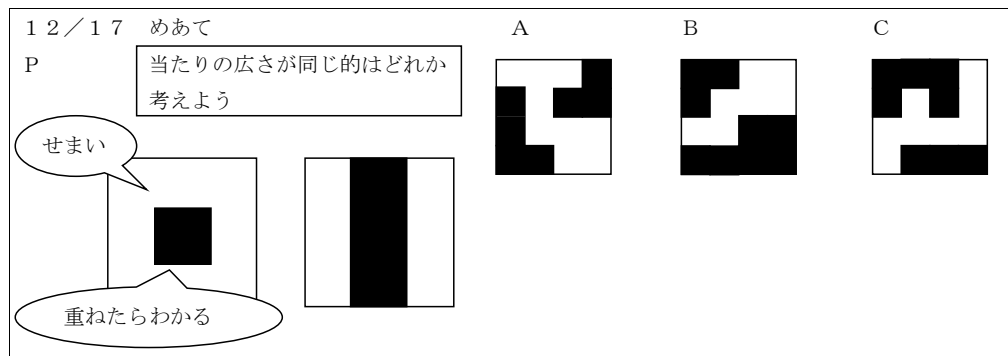
②準備物

- ・的当てゲームの的(玉) ・ワークシート ・拡大したワークシート

③本時の展開

学習活動 ○児童の反応	指導上の留意点	評価
<p>1. 的当てゲームを通して、本時の課題をとらえる。</p> <p>○2つの当たり部分の広さがちがうと、不公平になる。</p>	<p>・まず数人にやらせて、ゲームのやり方をつかませる。</p> <p>・次に、クラスを2つに分けたチーム戦を提案する。</p> <p>・その際、各チームに当たり部分の広さが異なる的を提示して、公平かどうか判断させる。</p>	<p>・本時の課題をとらえ、進んで課題解決に取り組もうとしている。</p> <p><b>【関・意・態】</b></p>
<p><b>当たりの広さが同じ的はどれか考えよう</b></p>		
<p>2. 提示した3つの的の中で、当たり部分の面積が最初に見せたのと同じものはどれか考える。</p> <p>○当たり部分を切って、重ねてみよう</p> <p>○マス目に区切って、何マス分かで比べよう</p> <p>3. 的の当たり部分の面積についてグループで話し合う。</p> <p>4. 的の当たり部分の面積について全体で話し合う。</p> <p>5. 今日の学習をふりかえる。</p>	<p>・ワークシートを配布して、書き込んだり、切って移動したりしながら、考えられるようにする。</p> <p>・話し合う時に、お互いのノートを見せ合いながら説明するように声をかける。</p> <p>・発表させる際には、拡大したワークシートを使ったり、児童のノートを大型テレビに映したりするなどして、分かりやすく説明できるようにする。</p> <p>・今日学習した様々な面積の比べ方について、ノートにまとめるように指示する。</p>	<p>・ワークシートの図に書き込んだり、図を切ったりしながら面積を比較する方法を考えている。<b>【数学的な考え方】</b></p> <p>・学習した面積の比べ方を理解している。<b>【知識・理解】</b></p>

④板書計画



(6) 事後研究会から～部員の振り返りより～

【導入～展開】

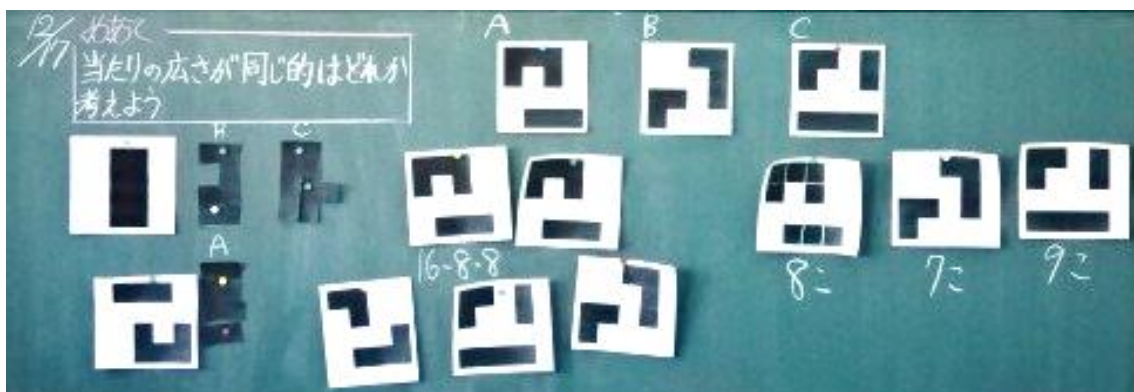
- ・導入の「的あてゲーム」に対する子どもたちの反応がよく、全員の「やる気スイッチ」が入っていた。
- ・グループ活動で少し間延びしてしまったので、授業の最後まで引っ張って楽しむことが必要だった。
- ・主体的に学びたいと思って取り組めるようにするためには、子どもが自分の考えとの「ズレ」を見つけられるようにする必要があった。
- ・課題を子どもが理解できると、教師が何も言わなくても進んで学習することがわかった。
- ・めあては子どもから出てくるようにするとよい。

【教師と子どものやりとり】

- ・吉田先生の落ち着いた授業の進行やつぶやきを拾う姿がとても良く、子どもに寄り添った授業だったと思った。
- ・児童の様子にアンテナを張って、大事なつぶやき(発言だけでなく、ジェスチャー含む)を聞き取り、全体で共有しながら「つなげていく力」を身に付ける必要がある。  
→教師が日々価値づけることで、子どもたちから自然と意見を深められるのでは
- ・子どもの意見をやみくもに引き出すだけでなく、どの考えを深めたいのか授業者も考えて、取り上げる順番などを工夫する必要がある。

【数学的な考え方】

- ・「量と測定」分野では「見えないもの」が「見える」ように数値化することが大切だとわかった。
- ・子どもが進んで数値化する「よさ」を見いだせるようにしたい。



## Ⅱ 公開授業【5年生】(武庫小学校 山本 正貴)「割合の表し方を考えよう」

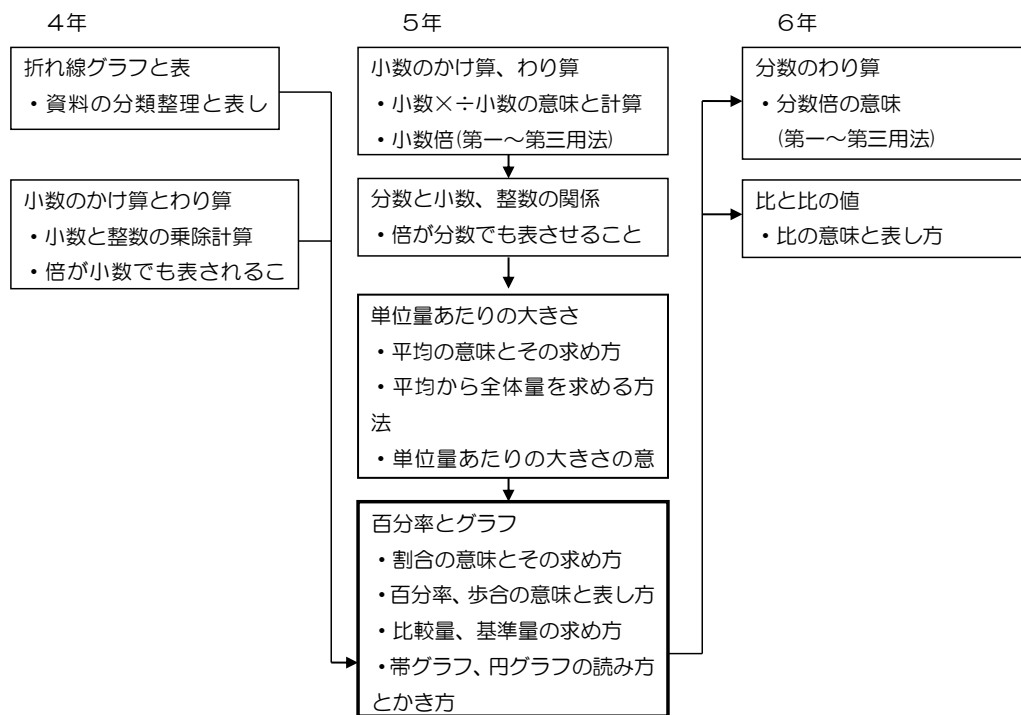
### (1) 単元名 「比べ方を考えよう～百分率とグラフ～」

### (2) 単元目標

- 割合を用いて比較したり考察したりするよさに気づき、生活や学習に活用しようとしている。(関心・意欲・態度)
- 倍の見方を基に割合を考え、目的な場面に応じて数量の大きさの間の関係を割合でとらえることができる。(数学的な考え方)
- 数量の関係から割合や百分率、基準量、比較量を求めたり、資料の全体と部分などの関係を表す割合を円グラフや帯グラフに表したりすることができる。(技能)
- 割合や百分率、基準量、比較量の求め方や、円グラフや帯グラフのかき方及び歩合の表し方を理解する。(知識・理解)

### (3) 単元について

#### ○系統図



【事後研究会の様子】

(4) 指導計画【全12時間 本時：第11時】

時	めあて	○学習活動 と ・予想される子どもの反応	□評価
1	割合の意味を理解し、もともとの数を1にそろえて、何倍かで比べられる。	○くじのあたりやすさを比較していく。 ・分数で比べられる。 ・通分したり、約分したりすれば比較できる。 ○通分がやりにくい数を比較する。 ・分子÷分母をして小数で表すことができる。 あたりやすさ＝当りの数÷くじ全部の数	<b>関</b> 倍の見方を用いて考えようとしている。 <b>考</b> 全体を1とみて部分の大きさを表して比べる方法を考え、説明している。
2	割合の意味を理解し、もともとの数を1にそろえて、何倍かで比べられる。	○シュートが上手なのはだれかを比較していく。 ・分数で比べられる。 ・通分したり、約分したりすれば比較できる。 ○通分がやりにくい数を比較する。 ・分子÷分母をして小数で表すことができる。 シュートのうまさ＝入った数÷シュートした数	<b>関</b> 倍の見方を用いて考えようとしている。 <b>考</b> 全体を1とみて部分の大きさを表して比べる方法を考え、説明している。
3	割合の意味を理解し、もともとの数を1にそろえて、何倍かで比べられる。1より大きい時もあることに気づく。	○どこの中学が入りやすいのかを比較していく。 ・分数で比べられる。 ・通分したり、約分したりすれば比較できる。 ○通分がやりにくい数を比較する。 ・分子÷分母をして小数で表すことができる。 中学の入りやすさ＝希望者数÷定員人数	<b>関</b> 倍の見方を用いて考えようとしている。 <b>考</b> 全体を1とみて部分の大きさを表して比べる方法を考え、説明している。
4	比べられる量は、もともとの数×割合で求められることを理解する。	○当たりの数はいくつあるのかを検討する。 ・全部でくじの数はいくつあるの？ ・あたりやすさがわかればできる。 ○テープ図と線分図を使って、くじの数と1に対してあたりやすさの割合から当たりの数を求める。 当たりの数＝くじの数×割合(あたりやすさ)	<b>考</b> 図や線分図を用いて、当たりの数の式を立て、説明している。 <b>技</b> くじの数と割合から当たりの数を求めている。
5	もともとの量は、比べられる数÷割合で求められることを理解する。	○くじの数はいくつあるのかを検討する。 ・当たりのくじの数はいくつあるの？ ・あたりやすさはどのぐらい？ ○テープ図と線分図を使って、当たりの数と1に対してあたりやすさの割合からくじの数を求める。 くじの数＝当たりの数÷割合(あたりやすさ)	<b>考</b> 図や線分図を用いて、くじの数の式を立て、説明している。 <b>技</b> 当たりの数と割合からくじの数を求めている。
6	百分率や歩合の意味とその表し方を理解する。 学習内容の適用問題を解決する。	○各学年の欠席について調べる。 ①5年生100人の0.3倍が欠席。 欠席している人数は？ ②6年生24人が欠席で全体の0.25倍。 6年生の人数は？ ③4年生90人のうち、18人が欠席。 全体の何倍にあたりますか？ ○0.3倍を30%といった百分率の用語や定義を知る。	<b>関</b> 百分率を用いると、割合を整数で表すことができ、分かりやすくなる良さに気づいている。 <b>技</b> 割合を百分率で表したり、百分率で表された割合を小数で表したりする。 <b>技</b> 学習内容を活かして問題を解くことができる。
7	帯グラフや円グラフの読み方や特徴を理解する。	○都道府県別のみかんの収穫量の割合はどのようなグラフに表せばよいかを考える。 ・表よりグラフの方がわかりやすい。 ・収穫量を見なくても割合で何倍か比較できる。 ○帯グラフ、円グラフについて知る。 ○都道府県別のみかんの収穫量のグラフを読む。	<b>関</b> グラフの割合のとらえやすさに気づき、資料の特徴や傾向をとらえようとしている。 <b>知</b> それぞれのグラフの読み方を理解している。

8	帯グラフや円グラフのかき方や特徴を理解する。	○好きな教科や給食の割合を百分率で求めて、それを帯グラフや、円グラフに表す。 ・割合の合計が100%にならないけど、どうすればいいのかな。 ・グラフには、どこからかいていけばいいんだろう。	<b>関</b> それぞれのグラフでの表し方に関心を持ち、特徴がとらえやすいように工夫している。 <b>技</b> それぞれのグラフをかくことができる。
9	グラフから、割合や絶対量を読み取り、問題を解く。	○東小と西小の好きな給食のメニューの、割合や絶対量を読み取り、問題を解く。 ・西小は割合が大きい順に並んでいないね。 ・グラフによって、読み取りやすさがちがうね。	<b>技</b> グラフを読み取り、問題を解いている。 <b>考</b> 割合の多少と絶対量の多少は一致しないことに気づき、その理由を説明している。
10	和や差を含んだ割合の場合について、比べられる量を求めることができる。	○スーパーの割引セールの問題を解く。 ・全品20%引きだから、定価×0.2だ。 ・それを定価から引かないといけない。 ○大豆の増量問題を解く。 ・30%増量だから、1+0.3で1.3になる。 定価×1.3だ。	<b>考</b> 割引や、割増の場面で、ひかれる、たされる金額に着目して解決の仕方を考え、説明している。 <b>知</b> 割合の和や差を含んだ場合の、比べられる量の求め方を理解している。
11	差を含んだ割合、基準量が下がった後の差を含んだ割合の場合について、比べられる量を求めることができる。	○どちらのスーパーに行く方がよいか考える。 A店:全品500円引き B店:全品4割引き ・金額によって行く店がちがう ・金額が高いとB店で安いとA店。 ・得をする金額の境目はどこだろう。 ○さらに値引きした時の場合も考える。 A店:さらに4割引き B店:さらに300円引き	<b>関</b> どちらの方が得なのか、さまざまな数値で帰納的に確かめようとしている。 <b>考</b> 高額な商品ほど、割引額が大きく、B店の方が得と説明している。 <b>技</b> さらに値引きした場合も値引きされた金額を基準量として計算して求めている。
12	学習内容の適用問題を解決する。	○学習したことを生かして問題に取り組むことができる。	<b>関</b> 学習内容を活かして問題に取り組んでいる。 <b>技</b> 学習内容を活かして、問題を解くことができる。

(5) 本時の学習(11 / 12)

①本時の目標

A店(500円引き→40%引き)とB店(40%引き→300円引き)の商品の値引き後の代金を比較することを通して、定価によって代金が異なることに気づき、よりお得な買い方を考えることができる。

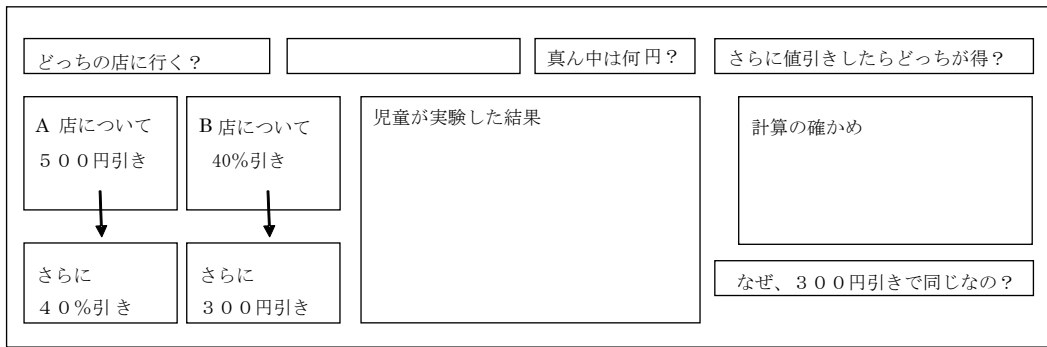
②本時の展開

学習活動	予想される子どもの反応(○)と教師の発問や言動(・)	教師の働きかけ
1. 問題を把握する(どちらの店で買うか判断する) A: 500円引き B: 40%引き	・2つの割引チケットを見せ、どちらの店で買うか投げかける。 ○500円! 40%!と意見が分かれる。 ○何を買うかによるんじゃないかな。 ○定価の安い方と高い方によってちがうと気づく児童。 ・「どういうこと?」と問い、事例を挙げさせる。 ・10000円や、6000円の場合などが例に挙げたら取り上げ、「たまたまでしょ」と問い、実験へと誘っていく。 <b>定価金額によって、選ぶ店はかわるの?</b>	□テレビでチケットを見せ、場面状況を説明し、児童の関心を高める。 □ズレが生まれたと感じたら、子ども達に問う。 □既習した%引きの計算を確認し、今日は×0.6で行うことを共有する。

<p>2. 様々な定価(商品)でどちらが得か確かめていく。</p> <p>【評価①】</p> <p>3. 考えを交流していく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どちらの店がいいかな?</li> <li>・気づいたことを共有する。</li> </ul> <p>【評価②】</p> <p>4. 真ん中の定価がいくらか確かめていく。</p> <p>5. さらに値引きから、どちらの店で買うか判断し、調べていく。</p> <p>A: 40%引き B: 300円引き</p> <p>【評価③】</p> <p>6. ふりかえりをする。</p>	<p>○多くの事例を出して定価によって値引き率がちがうことを確かめられる子。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・手が止まっている子には、商品例を見せ、図や式などを使って考えさせる。</li> <li>・どんな定価で確かめたか発表させていく。</li> </ul> <p>○定価が大きくなればなるほど、40%の値引きが多くなるから、買いたいものが高い時はB店で、安い時はA店がいい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・友だちの気づきをペアで確認したり再現したりさせる。</li> <li>・定価が高い方がB店で、安い方がA店でいいよねと念押ししたり、黒板で視覚化したりして、境目はどこかを考えさせる。</li> </ul> <p style="text-align: center;"><b>真ん中の値段はいくらかな?</b></p> <p>○並んでいる順だと、定価1000円と1500円の間だね。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなの情報をもとに、だいたいの値段を検討させる。</li> </ul> <p>○1250円がちょうど、境目だ!</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・さらに40%引きしたA店に対抗して、B店はどうしたと思うと問い、500円引きすることで同じになるという錯覚をさせ、300円引きにすることから、ズレを引き出す。</li> </ul> <p>○B店が500円引きしないと同じにならないから、A店の方が安くなっているはず。</p> <p style="text-align: center;"><b>閉店セールになったら、どちらがお得になるか</b></p> <p>○あれ? 同じ値段になった! どの定価でも同じ代金になる。</p> <p>○500円引きで同じになるはずなので、どうして300円引きで同じになったのかな?</p> <p style="text-align: center;"><b>どうして、300円引きで同じになるのかな?</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・<math>(1000-500) \times 0.6</math>と<math>1000 \times 0.6 - 300</math> 何か見えるかな?</li> <li>・自分の変容や、友だちの名前を出し、具体的に書いている子を賞賛する。</li> </ul>	<p>□机間巡視し、多くの事例で挙げている子を賞賛したり、苦手な子へ指導したりする。</p> <p>□結果を用紙に書かせる。</p> <p>□みんなで確かめた情報をバラバラに並べていき、定価の順に並べたいと思わせる。</p> <p>□価値のある発言を賞賛し、ペアで再現させたり、もう一度聞き返したり、発言を止め途中から言わせたりする。</p> <p>□子どもが境目について着目しなければ、次の活動へうつる。</p> <p>□ズレの発生やつぶやきをキャッチし、問い返し、共有していく。</p> <p>□さらに値引きする計算を1つの定価で共有する。</p> <p>□同じになったら「たまたまでしょ」と問い、場面を拡張させていく。</p> <p>□1つの事例を挙げ、一つの式を作って考えさせる。</p>
---	--	--

### ③評価

	①定価の金額によって、店を選別わかることを調べている(意・関)(技能)	②実験した事例を提示していく中で、気づきを説明し、共有することができる(考え方)	③さらに値引きする計算方法を理解し、同じ値段になることを確かめている(技能)
B	定価が安い金額と高い金額について計算し、定価が高い場合はB店、定価が低い場合はA店へ行くことを確認することができる。	定価の金額が大きくなればなるほど、40%の値引き率が大きくなることについての説明をペアで再現することができる。	最初に値引きされた金額に、A店は、 $\times 0.6$ をして、B店は、 $-300$ をすることを理解し、同じになることを確認できる。
A	安い金額、高い金額だけでなく、多くの事例をとりあげ、定価が高い場合はB店、定価が低い場合はA店へ行くことを確認したり、おおよそここを境目にして変わること気づいたりする。	定価の金額が大きくなればなるほど、もとの量が大きくなり、40%の値引き率が大きくなることを図などを使って、分かりやすく説明することができる。	1つの金額にとどまらず、色々な金額で、値段が同じになることを確かめている。



(6) 事後研究会から～部員の振り返りより～

【“しかけ”や“しこみ”】

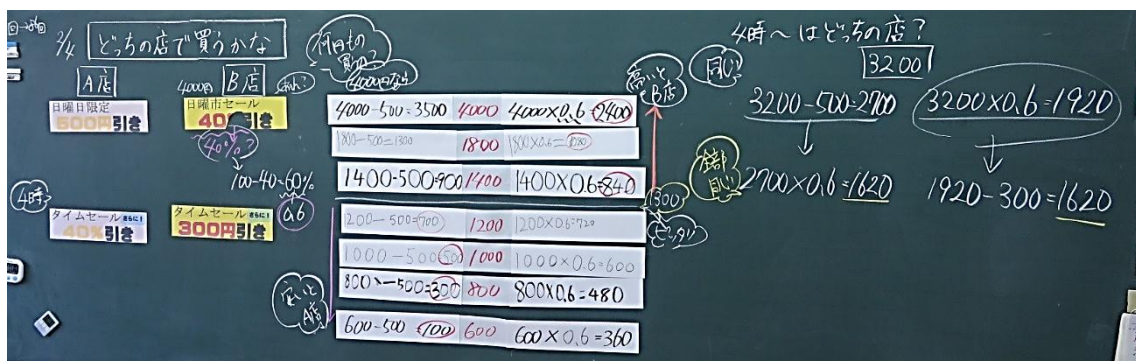
- ・子どもたちの集中力は9秒くらいしか持続しないので、導入が命になる。
- ・情報が多いと子どもたちも理解しにくい。
- ・子どもたちが「どっちなんだろう？」「調べてみたい」「試してみたい」と思うような“しかけ”や“しこみ”を普段の授業にも入れていきたい。
- ・大人が「おもしろい」と感じる場所と子どもが感じる場所が異なることもある。
- ・子どもと一緒に楽しめるように、「おもしろさ」を共有する仕掛けを作るのは難しい。
- ・「割合」は普段の授業内容を理解しにくい子がさらに分かりづらくなる單元なので、楽しく分かりやすく授業する工夫が必要だと感じた。

【教師のくふう～学んできたこと】

- ・山本先生の熱意が教材や指導案、掲示物などの随所に見られたほか、授業の流れの作り方も勉強になった。
- ・授業中に子どもの発言を途中で止めたり(「今なんて言った?」「続きを言える?」)、ペアで考えさせたりして、対話を通してクラスで考えを共有する時間をとっていた。
- ・子どものつぶやきをしっかり黒板に書き留めていて、普段からきちんと板書しているのだなと思った。

【子どもに寄り添う授業展開】

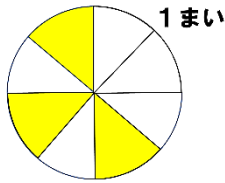
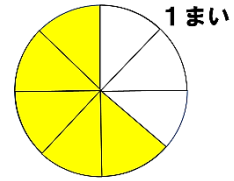
- ・指導案を捨てても、子どもたちに寄り添う授業展開(子どもに任せる勇気)も時には必要となる。
- ・友だちとの考えのズレを生じさせる課題を提示し、そのズレを埋めていく活動を通して、思考を鍛える授業をやってきたい。
- ・子どもの発言を価値づけて、方向づけられるように意識したい。



## 5 専任講師による研究の総括「子どもに寄り添う展開」

関西大学初等部 尾崎 正彦

3年生の「分数」の授業時間。子どもたちに、「これから見せる大きさを分数で表すことはできるかな」と投げかけた。右の図であれば、「 $\frac{5}{8}$ まい」と子どもたちはその大きさを表現してきた。



続いて、「こんな図もできるかな」と言って、左の図を提示した。ピザとピザの間に隙間がある図である。この図を見た子どもから、「あれ」「どういうこと」と戸惑いの声があがってきた。先ほどの問題と同じように簡単に分数表記できると思っていた私の想定とは異なる反応である。「あれ」「どういうこと」と言った子どもの思いを共有することにした。

「だって、隙間があるからできないよ」

「ピザがバラバラだもんね」

ピザの図の構成の違いに子どもたちは違和感を持ったのである。ところが、今度は「さっきと同じだよ」という声があがってきた。

「これってね、隙間とピザを入れ替えたらいいんだよ。そうしたら、ピザがくっつくでしょ」

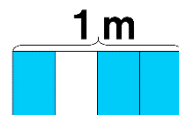
「ピザがくっつけば、さっきまでの問題と同じだよ」

隙間をなくすことで、先ほどの問題と同じ場面設定ができるというアイデアである。この見方を使えば、このピザは「 $\frac{3}{8}$ まい」と表現できる。

ここで、「これって、式でもできるよ」という声が聞こえてきた。分数のたし算・ひき算は次時に扱う予定であった。すでに、そのための教材も準備していた。ところが、子どもたちはこの場面で分数の計算を使いたいと考えたのである。そこで、この子どもの思いに寄り添い展開を変えることにした。

「1つのピザのピースは $\frac{1}{8}$ まい。これが3まいあるから $\frac{1}{8}$ まい+ $\frac{1}{8}$ まい+ $\frac{1}{8}$ まいという式になるよ」

この立式に子どもたちは納得である。そこで、今度は右図を提示し、「これも式で表せるかな」と投げかけた。すると、「 $\frac{1}{4}m + \frac{2}{4}m$ 」の式のほかに、「ひき算もできるよ」「1mは $\frac{4}{4}m$ でしょ。だから $\frac{4}{4}m - \frac{1}{4}m$ 」



と立式場面をひき算に拡張するアイデアも生まれてきた。さらには「かけ算にもできるよ」「 $\frac{1}{4}$ まい×3だよ」と、5年生の分数のかけ算につながるアイデアまで生まれてきた。

本講座では、子どもがアクティブに算数授業に関わる授業方法を探ってきた。参加された先生方の授業創りのレベルは確実に向上した。ズレを引き出す課題作りや課題提示の工夫のレベルは向上した。一方、自分が考えた授業プランに固執するあまり、授業後半でアクティブな展開とはかけ離れることはなかっただろうか。子どもの思いを完全に予測することは不可能である。授業展開に応じて子どもの思いを瞬時に読み取り、展開を柔軟に変えていくことも必要である。前述の分数の授業では、次時のために用意していた教材はすべてお蔵入りとなった。しかし、子どもはアクティブに分数の計算に取り組んだ。子ども



に寄り添うことを忘れずに、今後もアクティブな授業創りに取り組んでもらいたいと考えている。

1年間、おつかれさまでした！

## 6 終わりに

本年度、市内の小学校から推薦された41名の教員と共に、この研究部会で取り組んできた研究成果をまとめた。ある研究部員は、1年間の研究活動を通じた自己の変容を振り返り、以下のように記述していた。

“今までは「めあて」に向かって、考えたり、新しい知識・技能を身につけさせるという授業イメージだったのが、子ども達の素ぼくな見方や考え方をひき出したり、分からない困った状態から、一緒に考えていったりというような授業イメージに変わっていききました。その結果、子ども達が子どもらしい表現で表したり、誤答であっても、考えを言ったりできるようになってきたと感じています。”

冒頭で述べた通り、本研究部会では「アクティブ・ラーニング(主体的・対話的で深い学び)で創る算数科の授業を目指して」のテーマのもと、算数科の授業の質的な改善を目指してきた。上掲した部員の記述は、まさにこのねらいに沿ったものである。一例として、一人の部員を取り上げたが、多くの部員の記述から、「アクティブ・ラーニング」を重視しようとする授業観への変容を見ることができた。

一方で、最終日の第8回では専任講師である関西大学初等部の尾崎先生から、本部会の授業実践から見てきた課題について(前章の寄稿文に書かれた内容を踏まえ)、以下のように御指摘いただいた。

### 「教師の思いが強すぎる授業は“アクティブ・ラーニング”ではない」

授業冒頭で主体的だった子どもが、次第に静かになる要因の一つは、教師の思いが強すぎることである。教師の思いが前面に出すぎると、子どもは教師の思いに付度して、教師が思う通りに動いてくれる。しかし、これは“アクティブ・ラーニング”と【正反対の姿】だといえる。

### 「教師の想定通りに展開しない授業はよくあること」

教師は授業中に子どもの思いを瞬時に把握し、その後の展開を修正していく力が必要である。これは「(瞬発的な)授業再コーディネート力」だと言える。思考の「ズレ」を生じさせる“てだて”を入念に準備することは重要なことだが、時には、指導案を全部捨てる覚悟も大切である。

各研究部員はこの1年間の研究成果から得たものを活用し、そして部員相互の交流や尾崎先生の指導助言などから見つけた課題に取り組み、今後も不断の授業改善に取り組んでもらいたい。同時に、この部会で学んだことを校内、そして市内の教員に広げていく、「アクティブ・ラーニング」の推進役として活躍してくれることを期待している。

## 主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング） の授業づくりを通して

### － 「アクティブ・ラーニング」の授業実践と校内での広まり －

情報教育担当 藤井俊史

#### 【内容の要約】

中学校の「アクティブ・ラーニング授業実践部会」は、市内全中学校から推薦された部員により組織された部会であるが、各校からは、可能な限り、過去に所属したことがある部員とは違う教員を推薦してもらおうようお願いをして、部会を組織した。

取組内容については、今年度は次の点をねらいとする。

○アクティブ・ラーニングの授業づくりを通して、その重要なポイントを明確化することができる。

○上記の視点をもとに、3つのプロジェクトチームを組織し以下のような活動に取り組む。

- ・「ICT 活用」チームを結成し、ICT 機器を活用した効果的なアクティブ・ラーニング授業に取り組む。
- ・「研修普及」チームを結成し、教員向けの研修等をデザイン、実施モデルを作成する。
- ・「深い学び」チームを結成し、「深い学び」になるようアクティブ・ラーニング授業実践に取り組む。

○部会での内容等を、校内でどのように広めるかを考える。

○自分以外の教員（できれば他教科）も巻き込んで、「アクティブ・ラーニング」の授業実践を広める。

キーワード：主体的・対話的で深い学び，授業実践事例の積み重ね，校内での広まり  
プロジェクトチーム実践例

1	はじめに	37
2	研究について	37
3	研究経過について	39
4	アクティブ・ラーニング通信について	50
5	プロジェクトチーム授業実践等について	51
6	終わりに	51

## 1 はじめに

教職員の学び支援課が、平成28年度から実施している「アクティブ・ラーニング学習モデル研究事業」では、求める成果として「課題の発見・解決に向けた主体的・対話的に学ぶ学習（アクティブ・ラーニング）の効果的な活用により、教員の授業力向上を図り、児童生徒の学力向上をめざす。」と示している。

市内全中学校17校から推薦された部員により組織された「アクティブ・ラーニング授業実践部会」では、「これから必要とされる資質・能力の育成をめざし、課題の発見・解決に向けた主体的・対話的に学ぶ学習の充実と尼崎の子どもたちに適した学習・指導方法を学び、市内への普及を図るとともに指導方法の工夫改善を一層推進する」ことを目的とし、部会を通じて「アクティブ・ラーニング授業実践」について学び、その内容等を各学校及び市内全体に広めることをめざす。

3年目を迎える今年度は、各中学校に、可能な範囲で、過去2年間とは違う教員を部員として推薦していただくようお願いした。校内に、本部会で学んだ先生が複数名いることで、その取組等がより一層、校内で広まっていくことを期待してのことである。

過去2年間の取組を通じて積み重ねた実践事例をもとに、今年度も多くの実践事例を積み重ねながら、各学校での「アクティブ・ラーニング授業実践」の推進につなげたい。

また、過去2年間の取組から以下のような課題も見えてきた。1つ目は、過去の部員が実践してきた事例が羅列的なままであり、効果的に活用しにくい。2つ目は、過去の事例は、ICT機器を活用した事例、「尼崎モデル」となるような一般的な事例、「深い学び」を考慮した事例が少なく次期学習指導要領への対応が難しい。これらのことを踏まえながら、昨年度に引き続き、授業実践部会には、大阪教育大学大学院連合教職実践研究科准教授の寺嶋浩介氏と鳴門教育大学大学院学校教育研究科講師の泰山裕氏を専任講師にお迎えして、年間の活動に取り組んだ。

## 2 研究について

### (1) 研究について

本授業実践部会の研究・活動については、第1回部会の中で、寺嶋氏から次のように示された。

まず、部会の開催にあたって「互いに学び、広げよう」と、次の5点を確認した。

- みんなが参考となる地に足ついた取組をし、互いから学び合おう。
- 教科を越えた「中学校での日常の授業改善」をしよう。
- 次期学習指導要領を見据えよう（ICT活用、深い学び）
- 成果を市内の先生方へ還元し、広げよう。
- まずは、自分たちがアクティブに取り組み、楽しもう。

次に、「この講座の大きなねらい」として、次の3点を示した。

- アクティブ・ラーニング（AL）の授業づくりを通して、その重要なポイントを明確化することができる。
  - ・アクティブ・ラーニングの特徴がわかる。
  - ・アクティブ・ラーニングの授業づくりや実施のポイントがわかる。
- 上記の視点を基に、教員向けの研修等をデザイン、実施することができる。

- ・研修のデザイン・実施技法を習得できる。
- ・普及できる。

○尼崎市のアクティブ・ラーニングにおける課題に対しプロジェクトチームを編成し、活動内容をハンドブックとしてまとめる。

また、授業実践事例集につながる具体的な取組として、「アクティブ・ラーニング通信」の作成をしていくことを伝えた。

## (2) アクティブ・ラーニング授業実践部会 部員について

部員については次のとおり。

中学校名	教員氏名	教科	プロジェクトチーム
成良中学校	田川 雅弘	数学	ICT活用チーム
中央中学校	清山 かほる	英語	深い学びチーム
日新中学校	西田 篤司	理科	深い学びチーム
小田中学校	森山 多生	数学	研修普及チーム
小田北中学校	原 慶大	数学	深い学びチーム
大成中学校	早川 洋平	数学	研修普及チーム
大庄中学校	森沢 貴文	社会	ICT活用チーム
大庄北中学校	中北 萌香	理科	ICT活用チーム
立花中学校	草留 真弓	英語	深い学びチーム
塚口中学校	松田 寿子	数学	研修普及チーム
武庫中学校	日名子 聡子	社会	研修普及チーム
南武庫之荘中学校	寺岡 亮	理科	研修普及チーム
武庫東中学校	大堀 法之	数学	深い学びチーム
常陽中学校	西沖 尚士	社会	研修普及チーム
園田中学校	皆倉 陸	理科	ICT活用チーム
園田東中学校	吉川 勇貴	数学	ICT活用チーム
小園中学校	坂本 知弘	社会	深い学びチーム

## (3) 年間の活動について

年間の活動については、以下のとおりである。

実施回数	実施日	場所	備考
第1回	5月25日(金)	教育総合センター	
第2回	8月1日(水)	教育総合センター	
第3回	8月31日(金)	教育総合センター	
第4回	9月12日(水)	尼崎市立園田東中学校	ICT活用チームのみ
	9月28日(金)	尼崎市立南武庫之荘中学校	研修普及チームのみ
	10月29日(月)	教育総合センター	深い学びチームのみ
第5回	11月29日(木)	教育総合センター	
第6回	1月18日(金)	教育総合センター	
第7回	2月28日(木)	教育総合センター	

### 3 研究経過について

(1) 第1回 平成30年5月25日(金) 教育総合センター 602号室

1. 「アクティブ・ラーニング概論」

(大阪教育大学大学院連合教職実践研究科准教授 寺嶋 浩介 氏)

①次期学習指導要領から

②アクティブ・ラーニングの学習過程の3要素

- ・学ぶ意味と自分の人生や社会の在り方を主体的に結びつけていく「主体的な学び」
- ・多様な人との対話や先人の考え方(書物等)で考えを広げる「対話的な学び」
- ・各教科等で習得した知識や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせて、学習対象と深く関わり、問題を発見・解決したり、自己の考えを形成し表したり、思いを基に構想・創造したりする「深い学び」

③アクティブ・ラーニングを意識する価値

- ・第一段階は、生徒自らが少しでも楽しく学べるように工夫すること
- ・第二段階は、生徒が納得でき、必要性がある形で、知識・技能を習得していくこと
- ・第三段階は生徒が得られた知識・技能を活用する場面を取り入れていくこと
- ・第四段階は、単元間の連携や教科を越えた能力やスキル獲得を視野にいれていくこと

④アクティブ・ラーニングー設計の4原則ー

- ・生徒が動機づけられる「課題」を設定する
- ・子どもが主体的・対話的に取り組むことの意義を明確にする
- ・子どもが情報に出会い、整理・思考し、発信する
- ・振り返らせる

**子どもが動機づけられる「課題」**

ARCSモデル

- ・面白そうな課題か? **主**
- ・自分に関係がありそうな課題か? **主**
- ・やってみれば、何とかできそうな課題か? **主.協**
- ・解決したら、達成感が得られそうな課題か? **主.協**

子どもが行う ←→ 教師が設定する

【課題を設定する(子どもが動機づけられる課題)】

**主体的・対話的に  
取り組むことの意義を明確にする**

- ・子どもにとって出される成果物にメリットがある場合
  - ・  $0.5+0.5=1$  (例:ジグソー学習)
  - ・  $1+1=3$  (新しい価値の創造)
- ・他の人と行動すること自体にメリットがある場合
  - ・他の人を見て、「なるほど、こうすればいいんだ」と考え、次に活かすことができる(スキル)
  - ・他の人と一緒に取り組んで、達成感がある(情意面)
  - ・他の人にはない自分の良さの発見(情意面)

【主体的・対話的に取り組むことの意義を明確にする】

### 子どもが情報に出会い、 整理・思考し、発信する場面づくり

- 子どもが情報に出会う
  - 必要な情報を留意する
  - 子どもの実態に応じて、広げたり、絞ったりする
- 子どもが情報を整理し、思考する
  - シンキングツールの活用
- 子どもが発信する
  - まなボードの活用
  - すぐ書ける、みんなで情報を共有しやすい

### 振り返らせる

- 自分たちがどう考えて、問題解決に至った(至らなかった)のか
- (至った場合)  
何が効果的に機能し、問題を解決できたのか
- (至らなかった場合)  
知識のなさが問題なのか、  
解決方法に問題があったのか  
**教師にとって、授業づくりに対する評価にもなる**

【子どもが情報に出会い、整理・思考し、  
発信する場面づくり】

【振り返らせる】

## 2. 「自己紹介」

初めてのグループワークなので、まずは自己紹介を行った。

自己紹介の前に、次の2点を示し、自己紹介の話の中に入れてもらうよう、まずは個人で考える時間を設けた。

- 各2分で、自身の学校の学力上における課題を、自校の「学力向上アクションプラン」を用いて説明してみましょう。
- アクティブ・ラーニング部会でどのような授業実践等が役に立ちそうかを考えてみましょう。

これは、アクティブ・ラーニングによる授業実践を、自校の学力向上における課題の改善につなげることができないかとの考えからで、そのためにも、まずは課題の把握をしっかりとしたいとのねらいがあった。その中で、各校共通の課題として、家庭学習と授業が連動していないため、家庭学習が定着しないことや、活用力、応用力を問われる問題の正答率が低いなどが共有された。課題共有だけでなく、各校で行っている取組も共有することができた。

## 3. 「先行事例から学ぼう」

今年度の研究にあたって、昨年度の部員が実施した先行事例を紹介することで、今までアクティブ・ラーニングの授業を難しくとらえていたが、少し身近なものに感じることができた。

- ①昨年度部会の年間の取組紹介
- ②冊子『平成29年度アクティブ・ラーニング通信のまとめ』から事例紹介

## 4. 次回までの課題について

「アクティブ・ラーニング通信（AL通信）」1号を作成する。各校の学力向上における課題と次回までに実施したアクティブ・ラーニング授業実践のうち「ベスト2」を選び、通信にまとめる。

2つの実践については、最低限、「教科、指導略案、使用した教材、ALのポイント、生徒の反応」項目を盛り込む。

(2) 第2回 平成30年8月1日(水) 教育総合センター 601号室

過去2年間の取組から見えた課題として、1つ目は、過去の部員が実践してきた事例が羅列的なままであり、効果的に活用しにくい。2つ目は、過去の事例は、ICT機器を活用した事例、「尼崎モデル」となるような一般的な事例、「深い学び」を考慮した事例が少なく次期学習指導要領への対応が難しい。これらの課題解決に取り組むプロジェクトチームがスタートした。

1. 「プロジェクトチームの立ち上げにあたって」

「深い学びのAL授業実践について」というテーマで、寺嶋先生と、泰山先生に指導助言を頂いた。

①尼崎版ALハンドブックをまとめるプロジェクトチーム別の活動

- ・ICT活用チーム
  - －まずどの学校でも取り組める事例
  - －今後を見据えた事例（生徒による活用）
- ・研修普及チーム
  - －各学校の課題の把握
  - －効果的な研修パック（資料や研修案）の作成
- ・深い学びチーム
  - －AL好事例の抽出とまとめ
  - －深い学びの授業実践事例

②学校教育で育てるべき「思考力」「考える力」とは何か、を考えてみる。

③授業中に行われる「思考」の種類⇒具体化することで、思考を診とり、支援する。

- ・「生徒が何を考えるのか」 ・「先生が何を考えてほしいのか」
- ・「それをどう支援するのか」 ・「それをどう把握するのか」
- ・「なぜ考えられないのか」

④「思考スキル」…「考える方法」を指導する。

思考スキル	定義
多面的にみる	多様な視点や観点にたって対象を見る
変化をとらえる	視点を定めて前後の違いをとらえる
順序立てる	視点に基づいて対象を並び替える
比較する	対象の相違点、共通点を見つける
分類する	属性に従って複数のもののまとまりに分ける
変換する	表現の形式（文字・図・絵）を変える
関係づける	学習事項同士のつながりを示す
関連づける	学習事項と実体験のつながりを示す
理由づける	意見や判断の理由を示す
見通す	自らの行為の影響を想定し、適切なものを選択する
抽象化する	事例からきまりや包括的な概念をつくる
焦点化する	重点を定め、注目する対象を決める
評価する	視点や観点をもち根拠に基づいて対象への意見をもつ
応用する	既習事項を用いて課題・問題を解決する

構造化する	順序や筋道をもとに部分同士を関連づける
推論する	根拠にもとづいて先や結果を予想する
具体化する	学習事項に対応した具体例を示す
広げてみる	物事についての意味やイメージ等を広げる
要約する	必要な情報に絞って情報を単純・簡単にする

⑤「考え方」を示し補助するツール ⇒「シンキングツール」

⑥シンキングツールを活用することで

- ・具体化 … この授業で行っている「考える」は何か明示する。
- ・可視化 … シンキングツールに書き込むことで考えを可視化する。
- ・過程の共有 … 意見の途中や根拠を明示し、思考の過程を共有する。

## 2. プロジェクトチームの活動（1回目）

①ICT活用チーム

- ・指導方略とICT活用

導入	学習者の注意を喚起する	「おやっ」と思わせる情報提示
	学習目標を知らせる	明確に、大きく
	前提条件を確認する	前の時間にやったことを想起させる
展開	新しい学習事項を提示する	情報の焦点化、発問
	学習の指針を与える	
	練習の機会を設ける	繰り返し、情報の共有
	フィードバックする	
まとめ	学習の成果を評価する	ことばと映像で定着を
	学習の保持と転移を促す	次の時間（機会）に今回のことを示す

- ・大阪市立新巽中学校の山本昌平先生を迎え、学校でのICT機器を活用した授業実践例をもとにタブレット活用の視点についてお話をいただいた。これらの視点を基に、今後チームで授業実践を行うことを確認した。

②研修普及チーム

- ・教員向け校内研修をデザインするため市内全中学校の教員を対象にアクティブ・ラーニングについてのアンケート調査を実施した。その結果の中で、「グループ等で生徒との間で話し合う活動を各単元1回以上実施している教員」の割合は約70%、「生徒が、自分の意見や考えを他の人に説明したり、文章を作成したりするなどの学習活動を各単元1回以上実施している教員」の割合は約65%となった。また、「アクティブ・ラーニングの視点での授業改善をすることに必要性や効果を感じている教員」の割合は65%と、校内でアクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善を進めていくためには、さらに校内研修を充実させいくことが必要であると認識させられた。これらの課題に対して、部員が今まで受講して良かった研修を共有しながら、今後はいくつかの研修モデルを作成することを確認した。

③深い学びチーム

- ・それぞれが持つ深い学びについての疑問を「定義」、「必要性」、「校内への広め方」、



「授業のやり方」, 「時間」, 「評価」の6つにカテゴライズし共有した。その中で、深い学びの「定義」と「必要性」について尼崎市の教員が活用できる、実践事例等を提案していくことを確認した。

- ・部員自身が、深い学びについて理解を深めるため新学習指導要領解説総則編を読みながら、深い学びについて書かれた文言の抽出を行った。
  - －各教科の「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることで「見方・考え方」をさらに成長させながら、資質・能力を獲得していくこと。

### (3) 第3回 平成30年8月31日(金) 教育総合センター 602号室

前半は自分たちなりの良いアクティブ・ラーニングのイメージを共有し、自分自身の授業実践に対するイメージを広げることをねらいとして、それぞれが作成した「AL通信第1号」をもとに、1学期の授業成果報告を行った。

1. それぞれがまとめた「AL通信第1号」の中から、グループ内で「これはよい」と思う実践を決定し、グループの代表者が発表することで、全体でも共有する。



### 2. プロジェクトチームの活動(2回目)

#### ①ICT活用チーム

- ・各自 ICT 機器を利用したアクティブ・ラーニング授業案を持ちより、授業実践に向けて検討を行った。

#### ②研修普及チーム

- ・過去の部会で作成された、「アクティブ・ラーニングのポイント」の研修用スライド資料を基に、アクティブ・ラーニングの基本的な内容を共通理解し、次回の実践研修に向けての準備を行った。

#### ③深い学びチーム

- ・深い学びの授業イメージを共有するために過去のAL通信から深い学びといえそうな実践事例を抽出した。

### (4) 第4回 平成30年9月12日(水) 園田東中学校 平成30年9月28日(金) 南武庫之荘中学校 平成30年10月29日(月) 教育総合センター 602号室

各プロジェクトチームに分かれて活動をそれぞれ行った。(3回目)

## 1. ICT活用チーム

学力向上事業の「タブレット端末の有効活用」実践校の園田東中学校の公開授業に参加し、先進的な取組を参観した。

### ①タブレット活用に係る公開授業参観（指導者：園田東中学校 数田 拓 教諭）

- ・「古墳は誰がどのような目的でつくったのか？」「古墳の種類の名前を3種類書こう」

「古墳にはどのようなものが入っていた？」など、ワークシートの質問に対して、一人で調べていく。教科書を使い調べる生徒と、教室に配備された計10台のタブレットを使い調べる生徒がいる状況を設定。また、タブレットを使う生徒は教科書を見ないという条件を設定した。続いて4人1組のグループになり、情報交換を行った。自分で調べた内容は黒色で、友達から聞いた内容は赤色で書き、色分けをして区別できるようにした。再度、グループのメンバーをシャッフルし、情報交換を行い、最後は全体で先生が模範解答を示しながら答え合わせを行った。



### ②アクティブ・ラーニングによる情報活用能力の育成」

（大阪教育大学大学院連合教職実践研究科准教授 寺嶋 浩介 氏）

- ・次期学習指導要領の総則（小学校）では、言語活動や体験活動、ICT等を活用した。学習等と充実するよう改善するとともに、情報手段の基本的な操作の習得やプログラミング教育を新たに位置づけたことで、今後中学校でも、ICTの活用により学習の充実が強調される。

## 2. 研修普及チーム

### ①研究授業・研究協議会


南武庫之荘中学校の研究授業・研究協議会の進め方は、各教員があらかじめ決まった生徒（グループ）に視点をしぼり観察を行う。教師の発問に対して生徒の様子が変わるように変化したのかを記録し、研究協議会では、付箋を利用し観察した内容をグループで交流してから全体へ共有を行う。以前、中学校での研究協議会は、授業者に対して授業の感想を述べるだけで終わってしまうことが多かった。今回のような研究授業・研究協議会の進め方を部員が共有できたことは、今後校内での研究授業の進め方の1つとして役に立つと感じられた。

## ②校内研修

研究協議会后、南武庫之荘中学校の教員を対象に部員による研修を行った。

- ・これまでの授業の反省点として、「教えた」という事実のみになっていないか？
- ・「習得した」「学んだ」とはどういうことか？
- ・子どもが情報に出会い、整理・思考し、発信する場面づくりの必要性
- ・取組の工夫、発信や連携、効果となるデータの蓄積



<p><b>AI通信の実践から②</b></p>  <p>教材名:「世界各地で生まれる文明」</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・「非定形問題」の提示</li><li>・「マインドマップ」ツールの利用による情報の整理・発信</li><li>・発表時には、「教師との対話」を重視</li></ul>	<p><b>アクティブラーニングの良い点は？</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・知識を活用することを求める ・本市の課題でもある</li><li>・学習内容以外のスキルを志向している ・問題解決能力、情報活用能力など</li></ul>
--	--

【自身の実践をもとにポイントを説明】

【必要性の説明】

## 3. 深い学びチーム

### ①「深い学び」を定義する

- ・校内での普及を考え、部員以外の先生が深い学びの授業イメージがしやすいように深い学びの定義を考える。再度、次期学習指導要領の総則を基に、以下の4つの項目で定義することとなった。各教科等の「見方・考え方」を働かせながら、
  - ・知識（学んだこと）を相互に関連づける
  - ・情報を精査して考えを形成する
  - ・問題を見出して解決策を考える
  - ・思いや考えを基に創造する

これらの4つは、1時間の授業の中で必ずしも全て実施する必要はないことを確認した。また、2つ以上関連して同時に実施することもあることを確認した。

### ②授業実践に向けて

- ・今後、これらの定義に基づいた授業案を共有し授業実践に取り組むことを確認した。

## (5) 第5回 平成30年11月29日(木) 教育総合センター 602号室

今回は、プロジェクトチームがこれまで取り組んできた内容を報告し、成果についての意見を交流した。

### 1. プロジェクトチームの活動報告

#### ①ICT活用チーム

- ・ICT活用チームからは、部員が取り組んだ授業実践事例が紹介された。
  - －尼崎市のICT環境をより良くするために、自分たちが行っているような事例を増やす働きかけが必要になってくる。
  - －ICT機器を1時間の授業で全部使うようなことはほとんどない。書くこともさせ

ている。

## ②研修普及チーム

- ・校内でアクティブ・ラーニングを普及する1つの方法として、まずは同じ教科の先生方と共通の教材について話しながら教材作成することが考えられる。
- ・アクティブ・ラーニングに特定の型はなく、スタートして校内で例えば、「効果的な課題設定」など1つ決め、それから取り組むことも校内にアクティブ・ラーニングを普及していく1つの方法として考えられる。

## ③深い学びチーム

- ・学びの深さを測るような評価指標に至る活動ができていないのが今後の課題

## 2. 今後の取組に向けて

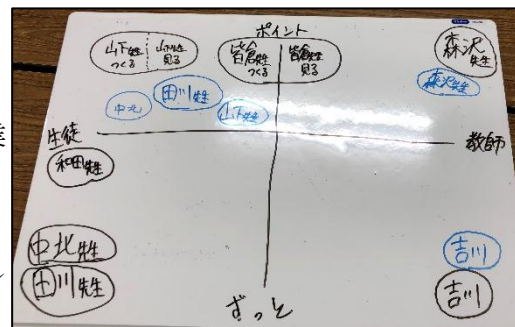
- ・ICT活用チームは今回実施した授業実践のパターンを座標軸に分類した。

それを基に、次回までに実践予定の授業についても分類を行った。

深い学びチームは、前回行った「深い学び」の定義や必要性を整理・具体化しまとめる必要があることを確認した。

研修普及チームは、学校実情に応じて、それぞれに適した研修が実施できるように、

こちらで研修モジュールを作成することとなった。そのモジュールの組み合わせた研修例をいくつか例示するため、モジュールの中身を提案や整理したりすることを行った。



【ICT活用チームの実践座標軸】

## (6) 第6回 平成31年1月18日(金) 教育総合センター 602号室

まず、「AL通信第2号」を基に、実践事例の交流を行った。その後、活動報告冊子の作成に向けて

1. AL通信第2号(自分の授業実践と自分以外の先生の授業実践)を全校分まとめた資料を基に、事例を共有する。



## 2. プロジェクトチームの活動(4回目)

- ・プロジェクトチームのゴールとして、ハンドブックでの最終報告に向けて、次回までにハンドブックの原稿を完成させることを確認した。

(7) 第7回 平成31年2月28日(木) 教育総合センター 602号室

前半は前回「AL通信第2号」を基に行った実践交流の中から、良い実践を5事例選択し、これらの取組をその他の部員に共有した。後半はプロジェクトチームでハンドブックの原稿の最終チェックを行った。

また、3年間の活動のまとめとして、専任講師の寺嶋氏、泰山氏からそれぞれ講評を頂いた。

1. 実践事例共有

テーブルで座っての実践共有とは違い、今回はポスターセッション方式を採用した。テーブルでの共有よりも発表者と聴き手の距離が近くなり、対話的な交流が行われた。



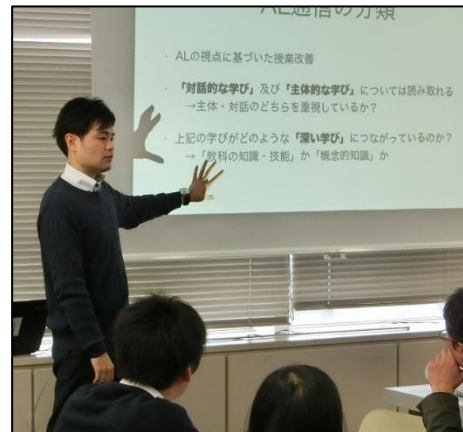
【ポスターセッション方式によるAL通信の共有】

2. 講評「アクティブ・ラーニング部会まとめ AL通信の実践から」  
(鳴門教育大学大学院学校教育研究科講師 泰山 裕 氏)

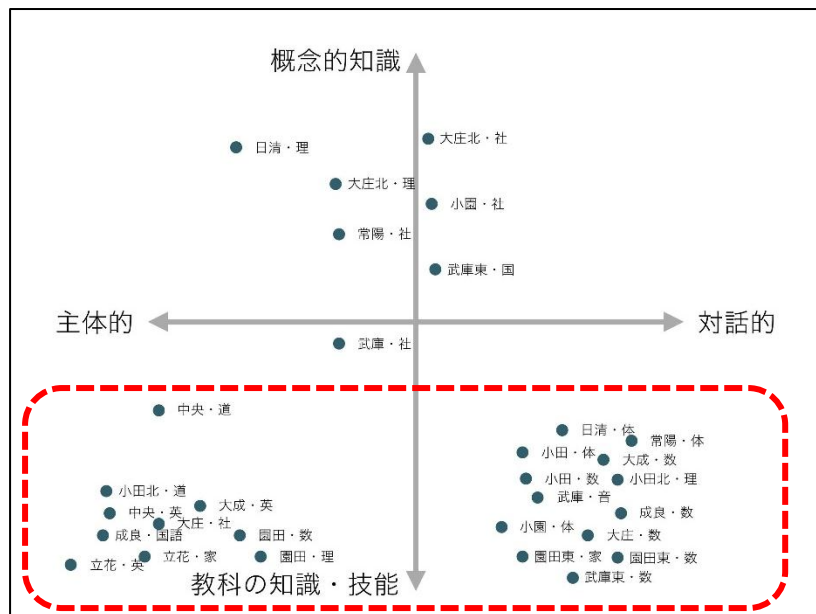
(1) AL通信の分類

各部員により作成されたAL通信を分類し、授業実践事例からわかることを整理した。

- ・アクティブ・ラーニングの視点に基づいた授業改善が見られた。
- ・「対話的な学び」及び「主体的な学び」については、通信から読み取れた。  
→ 主体・対話のどちらを重視しているか。



- ・今回の実践事例は、グループ等の学習形態で課題を解決する事例が多かった。  
→ 対話によって個人の考えが広がっている。
- ・「対話的な学び」及び「主体的な学び」がどのような「深い学び」につながっているのか。  
→ 「教科の知識・技能」か「汎用的知識」か。



【AL通信を座標軸を用いて分類】

(2) アクティブ・ラーニングをさらに進めるために

アクティブ・ラーニングをさらに進めるためには、「何のためのアクティブ・ラーニングか？」を共有することが大切であるとの話があった。共有方法として、「本時や単元の学習目標の具体化」、「本時や単元の活動によって育成を目指す資質能力は何か？」を明確にしておくこと。そのためには、次のことが必要となる。

- ・本時や単元を通して育成を目指す資質・能力を具体的にイメージすること。
    - ほとんどの教科が「内容」を「知識・技能」「思考・判断・表現」を区別して記述。
  - ・どんな知識や技能を身につけるのか。
  - ・身につけた知識を活用して、どのように考えるのか。
  - ・教科での学びを教科横断的、汎用的なものに拓げていく。
  - ・今日の授業で、生徒は「**何ができるようになったか**」を大切にする。
- また、「今日の授業（単元）における深い学びとは何か？」を考えるなかで、
- ・概念的理解
    - －個別の知識ではなく、要素同士の関係の理解，他の場面に活かせる。
  - ・解決策の提案
    - －問題の原因を理解した上で、現実的な解決策を提案する。
  - ・考えの形成
    - －対象を理解した上で自分かどう考えるかを整理する。
  - ・創造
    - －何か新しいものを作り出す。

これら4つの姿が見られる授業が、汎用的な資質・能力の育成につながると指導助言を頂いた。

(3) アクティブ・ラーニングに対する質疑応答

部員として1年間活動してきた中で出た疑問点について、泰山先生にお答えいただいた。その中の一部ではあるが、疑問点について回答をまとめた。

- ・ALを校内に普及させるにはどうしたらよいでしょうか？（部会でも取り組んできましたが、改めてお話が聞きたいです。先進校視察を通じて、真似から入るのが良いでしょうか？）

→まずは、育成を目指す資質・能力の共有が大切だと思います。どんな子供を育てたいのか？を考えれば、授業の過程は自ずとアクティブになると思います。それが共有できたら、同じような目標を持って実践している先進校のやり方を真似するところから入るのがいいと思います。

- ・ALというと、班活動・話し合い活動・発表というイメージがありますが、今までの一斉授業の中で1人で考えるというパターンもALとして分類してもいいのでしょうか？（例えば、数学の授業中に図形の応用問題を1人で考えさせるというのも「自発的な学習」と思いますが・・・）

→ALの定義に沿っていけば、それはALと分類することができます。応用問題を一人で解いているのが、

ー学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「**主体的な学び**」

ー子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「**対話的な学び**」

ー習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「**深い学び**」

につながっているのが大事です。

- ・教科によっては、講義形式授業：AL授業の割合は8：2または、9：1だと聞いたことがあります。その他の教科も含め、適切な割合はあるのでしょうか？

→ALの発想の元に、「知識があるから考えられる、考えるから知識が深まる」という知識と思考の往還が想定されています。その場合、講義とAL授業の割合はあまり重要ではありませんし、講義をしてからAL授業という順番でもない可能性もあります。何を考えさせるか、それを考えるために必要な知識・技能をどのように指導するのかを考えることが重要です。もしかすると、知識習得のためには講義形式よりもドリルなどの形式の方が有効な場面もあるかもしれません。

その他の質問に関しても、前年度に部会で実施した質疑応答も含め「ALのQ&A集」としてとして、ハンドブックに掲載する。

### 3. プロジェクトチームの活動（5回目）

ハンドブック作成に向けて原稿の最終確認を行い、各プロジェクトで年間の活動内容について総括した。

### 4. 講評「部会の取組を振り返って」

(大阪教育大学大学院連合教職実践研究科准教授 寺嶋 浩介 氏)

(1) Society5.0時代の流れは

- ・公正に個別最適化された学びースタディ・ログ, 学びのポートフォリオ, EdTech
- ・基礎的読解力, 数学的思考力などの基礎的な学力や情報活用能力
- ・文理横断からの脱却—STEAM教育, リベラルアーツ

(2) 中学校の次期学習指導要領の総則では

- ・資質・能力の育成を目指す「主体的・対話的で深い学び」
- ・学校教育を通して育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」, 「思考力, 判断力, 表現力等」, 「学びに向かう力, 人間性等」に再整理し, それらがバランスよく育まれるよう改善した。
- ・言語能力, 情報活用能力, 問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力や, 現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を教科等横断的な視点に基づき育成されるよう改善した。
- ・資質・能力の育成を目指す「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が推進されるよう改善された。
- ・言語活動や体験活動, ICT等を活用した学習活動等を充実するよう改善された。

(3) アクティブ・ラーニングを推進し, 成果を把握する(実践を共有する)

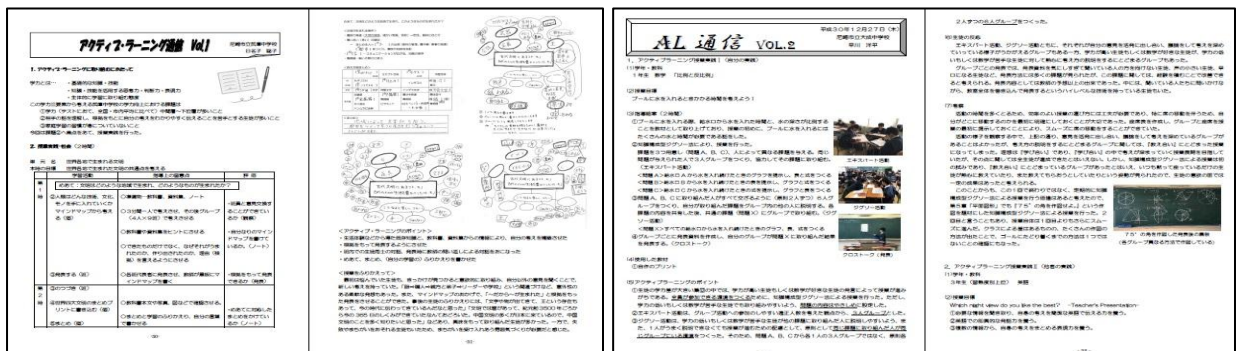
- ・共通化…自分たちの実践を意味付け, 一般化する
- ・個性化…多様な実践を共有し, 自身の授業を改善していく
- ・体系化…カリキュラムを通して汎用的な能力を体系的に育てる

(4) 終わりに

- ・「ゆるくいこう」—やってみるとけっこうよかったと思える  
—生徒が慣れる, 生徒のほうが早く慣れる
- ・「教科を越える」—いろんな教科でできそうな方法を  
—トータルでつきたい力は何かを明確に

### 4 AL (アクティブ・ラーニング) 通信について

この授業実践部会の大きな成果の一つに, AL通信を挙げることができる。各学校のAL通信は, 部員に配付していたり, 教育総合センターのホームページでも閲覧することが可能になっているので, 各学校で活用してほしい。



【AL通信の一例】





【表1】

NO	質問項目	6月実施	1月実施	全国(H29)
1	授業で、先生から示される課題や、学級やグループの中で、自分たちが立てた課題に対して、自ら考え、自分から取り組んでいたと思う。	78%	80%	75%
2	授業で、自分の考えを発表する機会が与えられていたと思う。	80%	85%	84%
3	授業では、学級の生徒との間で話し合う活動をよく行っていたと思う。	74%	75%	84%
4	授業で、課題解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して、発表するなどの学習活動に取り組んでいたと思う。	64%	66%	71%
5	授業で、学級の生徒との間で話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、自分の考えをしっかりと伝えていたと思う。	67%	68%	60%
6	授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたと思う。	47%	55%	57%
7	授業の中で目標(めあて・ねらい)が示されていたと思う。	86%	89%	87%
8	授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思う。	63%	67%	66%
9	授業で扱うノートには、学習の目標(めあて・ねらい)とまとめを書いていたと思う。	74%	73%	80%
10	学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。	68%	75%	65%

(※数値は「あてはまる」と「どちらかといえば、あてはまる」の数値を足したもの)

ほとんどの質問項目に対して、数値が上昇している。特に、NO. 2, 6, 10については、この部会を通じて部員の先生方がアクティブ・ラーニングの授業づくりや実施のポイントを明確化して授業に取り組んだ結果として考えられる。

しかし、もう1つの「アクティブ・ラーニングの授業づくり視点をもとに、教員向け

の研修等をデザイン、実施することができる」に対しては、AL通信を作成し共有することで、学校全体にALの授業をするという雰囲気が出たと、AL通信を利用する活動は見受けられるが、外部からの講師を招聘せずに校内で研修を実施するまでには至っていないのが現実である。その中、普及していくために、お互いの授業を見に行くことをお願いしたり、校内研究授業の前に同じ教科の先生が事前に授業を参観して授業改善に努めたり、ALを勉強するグループを校内でつくったりして、普及を進めている。しかし、これらの取組を校内全体で共有する必要性を感じているものの、どのように進めてよいかわからないといった問題が明らかになった。

今後このような取組が校内にどのくらい普及したのかを追跡したり、アクティブ・ラーニングの授業づくりを普及していくために、教育委員会としてできる有効な手立てがないかを考えたりすることが課題としてあげられる。

## (2) 3年間における成果と課題についての考察

3年間の実践報告を「教育実践事例の開発と交流による集合研修カリキュラム開発」と題して、大阪教育大学紀要68巻(2019年度発行予定)に、寺嶋氏、泰山氏、尼崎市教育総合センターの連名で実践報告を行う。アクティブ・ラーニングの授業づくりについて意識変化を見るために、本研修を受講した教師の自己評価について分析をしたり、教師がまとめたアクティブ・ラーニングの内容が質的にどのように変化をしたのかについて分析をしたり3年間の変遷を総括する。そちらを参照していただきたい。

## (3) 最後に

これからの社会を生きる子供達に必要な資質・能力の育成のために、知識・技能を「生きて働く」ものに、思考力・判断力・表現力を「未知の状況にも対応できる」ものに、学びに向かう力・人間性を「学びを人生や社会に活かそうとする」ものにするための授業が求められている。もしかすると、何かを記憶することを目的にALの授業を実施することは非効率かもしれない。

まずは、「どのような子供達を育てたいか、そのために必要な授業とは何か」を考えることが大切である。もしも、知識をたくさん持っている“だけ”の生徒、人から指示されたことを聞いてその通りにできる生徒の育成を目指すのであれば、ALの授業を実践する必要はないだろう。将来、各教科特有の知識を伝達する”だけ”の授業をするならば、AI(人工知能)を搭載したロボットや授業動画の視聴等で教師は必要なくなると考えられる。

逆に、自分で状況を判断したり、自分の考えを適切に表現したりできる生徒の育成を目指すのであれば、AL以外の方法でそのような資質・能力を育てるのは不可能なはずだ。そんな生徒を育成できる教師が求められる人材だといえよう。

とはいえ、中学校には「入試」という大きな壁が存在する。しかし、大学入試制度が改革されたりと、将来を予測することは困難な社会へと変化しつつある。そんな社会を豊かに生きる生徒たちのために必要な力をどのように育てるのか、ということ意識して授業づくりを始めることが、授業改善の第一歩だと考える。

## 「共に考え 共に語り合う」授業づくり

— 「生命の尊さ」を扱い、各校種に応じた授業づくりを考える。 —

指導主事 小林 誠一郎  
研究員 立 半 博 満 (小園小)  
" 吉 見 響 (塚口小)  
" 富 田 学 (中央中)  
" 黒 越 華 芳 (小田中)  
" 笹 倉 伸 悟 (あまよう特)

### 【内容の要約】

道徳の時間において、児童生徒が他者との対話を通して多様な考えに触れ、ねらいとする道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の(人間としての)生き方についての考えを深めさせることは、他者と共により良く生きようとする道徳性を育むことにつながる。

本研究では、「特別の教科 道徳」の内容項目D-1 9生命の尊さを扱い、各校種の発達段階の違う子どもたちへ、道徳的価値に迫る授業展開について研究を進めた。発問の工夫と共に、多様な意見を出し合い高め合う授業のあり方を求めた授業実践の指導案の変遷を提示する。

キーワード：道徳的価値 基本発問 中心発問 問い返し発問 補助発問

テーマ発問 ホワイトボードの活用 マグネットの活用 相互評価

1	はじめに	54
2	研究について	54
3	実践事例	56
(1)	小学校第2学年	56
(2)	小学校第4学年	61
(3)	中学校第1学年	66
(4)	中学校第3学年	72
(5)	特別支援学校小学部1年	76
4	研究のまとめ	81
5	終わりに	81

## 1 はじめに

道徳教育は、教育の中核をなすものであり、学校における道徳教育は、道徳科を要として学校のあらゆる教育活動を通じて行われるべきものである。道徳科の指導において、各教科等で行われる道徳教育を補ったり、それを深めたり、相互の関連を考えて発展させ、統合させたりすることで、学校における道徳教育は一層充実する。

平成27年度3月に学習指導要領の一部改正により、小学校は平成30年度より「特別の教科 道徳」が実施され、中学校は平成31年度から実施される。文部科学省は、道徳教育の抜本的な改革を図るため、「考え、議論する道徳」への質的転換により、児童・生徒の道徳性を育むことを目指している。これは、これまでの「道徳の時間」が、主題やねらいの設定が不十分で、読み物教材の登場人物の心情理解に終始した授業や、子どもたちに望ましいと思われることを言わせたり書かせたりする価値観の押しつけのような授業が行われている例があることや、効果的な指導法が共有されていないことなどを背景としている。このことから、本研究部会では、授業設計、発問の工夫、指導法について、子どもたちの道徳性を育むための効果的な指導の研究を進めていく。

## 2 研究について

### (1) 研究のテーマ

「共に考え、共に語り合う」道徳の授業づくり

～ 「生命の尊さ」を扱い、各校種に応じた授業づくりを考える。 ～

### (2) 研究テーマの設定の理由

「特別の教科道徳」の目標は「道徳的価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の(人間としての)生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」と規定されている。特に学習活動において、児童・生徒が、より多面的・多角的な見方へと発展しているか、自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視することが求められている。

児童生徒が、自分の考えをさらに深めていくには、自分の考えだけでなく、他者との対話を通して、人の考えが多様であることに気付いていく必要があり、様々な立場や側面から物事を捉え、考えを深めたり広げたりする「多面的・多角的な思考」を行うことが大切である。

そこで本研究では、道徳的価値に迫る発問や多様な意見を出し合い、対話を通して深い学びのある授業のあり方について視点を置き、テーマを「共に考え、共に語り合う」道徳の授業づくりとした。

### (3) 研究の仮説

道徳の時間において、児童・生徒が対話を通して多様な考えに触れ、ねらいとする道徳的価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の(人間としての)生き方についての考えを深めさせることによって、他者と共により良く生きようとする態度を育むことができるだろう。

#### (4) 研究の方法

1 基礎研究	2 指導案研究	3 授業実践と考察
<ul style="list-style-type: none"> <li>・教材の深い読み</li> <li>・教材の分析</li> <li>・発問の工夫</li> <li>・指導方法やその内容等</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対話(自己・他者・資料)をうながす</li> <li>・多様な考えに触れる</li> <li>・道徳的価値について深く考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他者と共に、によりよく生 きようとする</li> <li>・児童・生徒がより多面的・多角的な見方へと発展しているか</li> <li>・自分自身との関わりの中で深めているか</li> </ul>

#### (5) 研究内容

##### 1. 教材について

多くの教材には、登場人物の道徳的変化の様子が描かれている。道徳的変化は、主人公が道徳的価値の重要性を自覚することによって起こっている。この場合、単に「知っている」と「自覚する」ことを区別する必要がある。私たちは、「生命の尊さ」といった道徳的価値をすでに知っているが、普段はあまり意識していない。しかし、何かの出来事が自分の身に起こったときに身にしみて感じ、その価値を深く自覚し、その後の生き方につながる。ねらいに迫る授業のためには、授業者が、教材に描かれている人間の生き方と、そこに含まれる道徳上の問題(道徳的価値)を深く読み取ることが大切である。

##### 2. 発問について

道徳的価値についての多様な意見を出し合う授業にするには、「どこで問うか」「何を問うか」を明確にしなければならない。すなわち、道徳的価値にかかる問題場面はどこか、道徳的価値の何を考えさせるかを明確にしなければならない。

##### (1) 基本発問：beforeについて問う

主人公が生き方を自覚する前について問う発問。主人公が道徳的価値を自覚する前の姿等を把握させる。

##### (2) 中心発問：生き方の自覚について問う

主人公が生き方について自覚する場面を問う。学習の中心場面であり、ねらいに迫るものである。教材にある主人公の言葉や行動を捉えて、その背景にある内面を深く考えさせる。

##### (3) 問い返し発問：児童生徒の発問を捉え、問い返す

発言を手がかりとして、さらに問い返す発問。問い返すことによって、道徳的価値の自覚を促し、生き方についての考えを深める。

##### (4) 補助発問：新しい視点を加える

児童の考えが深まらないとき、新しい視点を加えることで、ねらいに迫るための発問。

##### (5) テーマ発問：本時のねらいとする道徳的価値についての考えをまとめる

授業の終末でまとめをする、道徳的価値に迫る発問。授業で考えたことを振り返って自由に書くことで、道徳的価値を明確にしたり、自分たちの生活に結びつけたりす

る。また、まとめて書いた内容をクラスで共有することで、道徳的価値の自覚を促すことにつながる。

## (6) 授業実践内容の一覧

### 主題 生命の尊さ

実践1 小学校 第2学年	教材名「あずきちゃん」(出典 茨城県教育委員会 作成資料)
	ねらい 誰もが家族から祝福されて生まれてきたのだと気づき、生命あるものの尊さを感じることで、命を大切にしようとする心情を育てる。
実践2 小学校 第4学年	教材名「わたしのいのち」
	ねらい 生命は多くの支えによって存在していることに気づき、与えられた生命を精一杯生きることについて考え、生命の大切にすることについての道徳的実践意欲と態度を育てる。
実践3 中学校 第1学年	教材名「命のビザ～杉原千畝～」
	ねらい 戦乱の中、自らの良心に従って多くの人命を救った外交官杉原千畝の決断を通して、人種や国籍にとらわれず、人間愛に根差した正義や公平の精神を大切にされた杉原の生き方に共感させ、生命尊重のあり方について考えを深める。
実践4 中学校 第3学年	教材名「ドナーカード」(出典 あかつき「自分をのばす」)
	ねらい 決して軽々しく扱われるべきではない生命の尊さを深く自覚し、自他の生命を尊重する道徳的態度を育成する。
実践5 特別支援学校 小学部1年	教材名「ノンノンだいじょうぶ」(出典 みんなのどうとく1ねん)
	ねらい いつもと変わらない朝を迎えられることに喜びを感じるノンノンを通して、自分の命と健康を大切にしようとする道徳的心情を育てる。

## 3 実践事例

### (1) 実践1 小学校第2学年

#### 1. 授業について

(1) 主題名 D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

生命の尊さ

生きることのすばらしさを知り、生命を大切にすること

(2) 教材名 「あずきちゃん」(出典 茨城県教育委員会 作成資料)

(3) ねらい 誰もが家族から祝福されて生まれてきたのだと気づき、生命あるものの尊さを感じることで、命を大切にしようとする心情を育てる。

## 2. 指導案研究前の「本時の展開」

学習活動	主な発問と予想される児童の反応	留意事項
1 「お腹の中にいる赤ちゃん」の大きさをイメージする。	<p>お母さんのお腹の中で、最初赤ちゃんはどのくらいの大きさだと思いますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ドッジボールくらい。</li> <li>・野球ボールくらい。</li> <li>・豆つぶくらい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それぞれ実物を示し、その小ささに気付かせると共に、本教材へとつなげる手立てとする。</li> </ul>
2 教材を読み、胎児の様子を見た時の主人公の気持ちを考える。	<p>お腹の中の赤ちゃんの様子を見た時、ゆかちゃんはどうな気持ちだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・顔や手が分かるようになったんだ。</li> <li>・お腹の中で、順調に育っているんだな。</li> <li>・早く生まれてきてほしいな。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・エコー写真を拡大したものを示す。</li> </ul>
3 主人公が胎児に話しかけた言葉について考える。	<p>病院の先生に、「もうすぐ、おねえさんになるよ。」と言われたゆかちゃんは、「あずきちゃん」に何て話しかけたでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・無事に生まれてきてね。</li> <li>・ちゃんと育って行ってね。</li> <li>・会えるのが楽しみだよ。</li> <li>・生まれてきたら、いっしょに遊びたいな。</li> </ul> <p>今日の授業のふりかえりを書きましょう。</p>	
4 本時のふり返しをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最初あずきのつぶだったのに、こんなに大きくなるなんて知らなかった。</li> <li>・ゆかちゃんもお母さんも、あずきちゃんのことを大切に思っているんだなあ。</li> <li>・生まれてくるって、とっても大変だけど、ぼくが生まれてきた時もそうだったのかなあ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あずきの粒と比較できるよう、赤ちゃんの模型も示す。</li> </ul>

## 3. 指導案の考察

### (1) 中心発問について

本教材は、「あずき粒」ほどだった命が、お腹の中でたくましく成長していくという「命の神秘性」と、多くの人に愛され、支えられて誕生してくるという「命の尊さ」について描かれている。

当初、中心発問にいたるまで「わたし」の視点だけで「あずきちゃん」を見ていた



が、「お母さん」の思い(出産の不安、切迫流産の危険性など)にも触れさせたいと考えた。「あずきちゃん」に声をかけた場面で、母親への労わりや励ましの言葉を引き出すことで、命が誕生することの「尊さ」に気付くことができるのではないかと考えたからである。

(2) 問い返し発問について

中心場面で、「わたし」が話しかけた言葉(行為)についてのみ尋ねるのではなく、「どうして話しかけたい気持ちでいっぱいになったのか」理由を問うことで、「わたし」の思いにさらに寄り添うことができるのではないかと考えた。「もうすぐ姉になる」ことへの期待感や、無事に生まれてきてほしいと願う気持ちに、大いに共感できるのではないかとと思われる。

(3) 本時のふり返りについて

本教材を学習した感想にとどまるのではなく、生活科で学習した「大きくなったよ」のアルバム作りとも関連させて自分自身のことを振り返らせたい。本教材を通して、誰もがみんな最初は「あずきちゃん」であり、多くの人の支えによって今日まで成長できたことを実感できるであろう。そこで、アルバム1ページ目の「生まれてきたよ」の前に、存在しない0ページ目を思い描かせたい。自分自身が胎児であった約10ヶ月間、家族から様々なエピソードを聞いている子もいるだろう。「あずきちゃん」と「自分」を重ね合わせて、「何て言葉をかけたいか」を考えさせることで、今日まで成長できた喜びと、今後も命を大切に生きていこうとする心情を育むことができるのではないかと考える。

4. 指導案研究後の「本時の展開」と板書

学習活動	主な発問と予想される児童の反応	留意事項
1 「お腹の中にいる赤ちゃん」の大きさをイメージする。	<p>お母さんのお腹の中で、最初赤ちゃんほどのくらいの大きさだと思いませんか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ドッジボールくらい。</li> <li>・野球ボールくらい。</li> <li>・豆つぶくらい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それぞれ実物を示し、その小ささに気付かせると共に、本教材へとつなげる手立てとする。</li> </ul>
2 教材を読み、あずきちゃんに話しかけた「わたし」の気持ちを考える。	<p>あずきちゃんにやさしく声をかけたのは、どうしてだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・無事に生まれてくるか、心配だから。</li> <li>・あずきちゃんが安心すると思うから。</li> <li>・お母さんにも、元気でいてほしいし、無事に赤ちゃんを産んでほしいから。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挿絵やエコー写真を示しながら、読み聞かせる。</li> </ul>
3 「わたし」があずきちゃんに話しかけた言葉について考える。	<p>病院の先生に、「もうすぐ、おねえさんになるよ。」と言われたゆかちゃんは、「あずきちゃん」に何て話しかけたでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・無事に生まれてきてね。</li> <li>・ちゃんと育てて行ってね。</li> <li>・会えるのが楽しみだよ。</li> <li>・生まれてきたら、いっしょに遊びたいな。</li> </ul>	<p>「お母さんに対してはどんな思いかな。」 →母への励ましの言葉も引き出したい。</p>
4 胎児であった時の自分自身について、考える。	<p>(生活科「大きくなったよ」の)アルバムの0ページ目には、どんなことが書かれているのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生まれてくるって、とっても大変だけど、ほくが生まれてきた時もそうだったのかなあ。</li> <li>・お母さん、家族のみんなから大切に育てられてきたんだなあ。</li> <li>・ここまで大きくなったよ。これからも毎日を大切に生きていくよ。</li> </ul>	<p>どうして、「話しかけたい気持ちでいっぱいになった」のだろう。</p>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活科「大きくなったよ」のアルバム作りの際に、インタビューしたことを思い出す。</li> </ul> <p>※0ページ目の自分に対して、何て言葉をかけたいですか。</p>



## 5. 授業実践と考察

- 導入であずきの実物を触らせたり、エコー写真を示したりしたことで、子どもたちが命の大きさや成長の様子についてよりイメージを膨らませることができた。
- 生活科の学習で作成した自身の成長アルバムと関連させたことで、自分が生まれた前後のことや今日まで育ってきたことへの喜びを感じさせることができた。
- 主発問「お腹の中の自分に、何て声をかける？」は、子どもにとって想像することが難しかった(0ページ目という表現など)ものの、考えさせる方向としては良かった。  
→ゆかちゃんがあずきちゃんに何て話しかけたのかをもっと子どもたちから引き出した上で、「あなたたちの両親や家族も、同じことを思ったんだろうね。」と返せばよかったのではないかな。

### 研究テーマ「共に考え、共に語る道徳授業」について

- 「共に考え、共に語る」ためには、お話に出てくる人物の視点を絞る必要がある。特に低学年児童は、一人の立場に絞る方が考えやすい場合が多い。これまで子どもたち一人ひとりがそれぞれの立場から自分の思いを述べる方が望ましいと考えてきた。しかし、授業のねらいを達成させるためにも、最初から人物を離れて自分の思いのみを語らせるのではなく、主人公について共感、共有する過程が大切である。

(2) 実践2 小学校 第4学年

1. 授業について

(1) 主題名 生命の尊さ

(2) 教材名 「わたしのいのち」

(3) ねらい 生命は多くの支えによって存在していることに気付き、与えられた生命を精一杯生きることについて考え、生命の大切にすることについての道徳的実践意欲と態度を育てる。

2. 指導案研究前の「本時の展開」

	学習活動	発問と予想される児童の発言	指導上の留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>「生命」について考える。</li> </ul>	<p>「生命」ってどんなもの？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>大切なもの。</li> <li>一つしかない。</li> <li>なくなったらもどらない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>時間をかけない。</li> </ul>
展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>7行目までの教師の範読を聞く。</li> <li>心臓は誰が動かしているか考える。</li> <li>8行目の判読を聞き「おかげさま」について考える。</li> <li>15行目「わしらにできる」ことを考える。</li> </ul>	<p>心臓は誰が動かしているのかな？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分。</li> <li>脳みそ。</li> <li>勝手に動いている。</li> <li>神様。</li> </ul> <p>「おかげさま」って何の「おかげ」なのかな？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>お母さんのおかげ</li> <li>お父さんのおかげ</li> <li>家族のおかげ</li> <li>友だちのおかげ</li> <li>みんなのおかげ</li> </ul> <p>おかげさまで与えられた生命を、これからどうしていく？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>大切にしていく。</li> <li>精一杯輝かせたい。</li> <li>大事にしたい。</li> <li>一生懸命生きていきたい。</li> <li>みんなの愛情に応えたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童は教科書を見ないことを伝える。</li> <li>時間をかけず8行目を読む。</li> <li>15行目「わしらにできるのは」までを読む。</li> </ul>
終末	<ul style="list-style-type: none"> <li>今日の感想を書く。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>感想を交流する。</li> </ul>

3. 指導案の考察

(1) 中心発問について

基本発問「おかげさまについて考える」において、自分の生命は自分ひとりだけの物ではなく、多くの温かな支えの上に成り立っている物だということを見事に気付かせたい。そのうえで、多くの支えに感謝して生きる生き方とはどんなものなのかを考えさせたいと考えた。中心発問として、候補として挙げたものは

「おかげさまで与えられた生命を…」

- ・ どうしていききたい？ → 一つの答えに収束してしまう可能性があると思予想した。
- ・ どうさせていききたい？ → 発問がまわりくどく、理解しづらいと思予想した。
- ・ どう使うべき？ → 「～べき」を使うと義務感になってしまうと思予想した。
- ・ どう使うのがいい？ → 「良い」を使うと、正解を当てなければという意識が働いてしまう。
- ・ どう使いたい？ → この発問でもよいかと思予想したが、「生命を使う」という言葉が理解しづらい。
- ・ どうしたい？ → 一つの答えに収束してしまう可能性があると思予想した。
- ・ どうする？ → 即時的な反応しか出ない可能性があると思予想した。
- ・ これからどうしていく？ → 「これから」を考え、様々な反応が出ると思予想したのでこの発問に決めた。

(2) 問い返し発問について

基本発問「おかげさまについて考える」では「お母さんのおかげ」などの反応に対しては「どうして?」「具体的には」と問い返すことで、「ごはんをつくってくれるから」「悪いことをすると叱ってくれるから」など深く考えることができると思予想した。中心発問「生命を、これからどうしていく?」の反応に対しては、わかりにくい表現や一言での反応(例「楽しく生きる」)であれば、「どういうこと?」「詳しく教えて」と問い返すことで深く考えることができると思予想した(例「友達と楽しく過ごす時間を大切にすること」)。だが、具体的な反応に関しては、様々な反応を受け止める姿勢で臨むため、問い返しは不要だと感じた。

(3) 予想される反応を準備し、類型化しておく

**基本発問について**

- 1 お母さんのおかげ → ごはんを作ってくれる。叱ってくれる。世話をしてもらっている。
- 2 お父さんのおかげ → 仕事をしてお金を稼いでくれている。
- 3 家族のおかげ → いろいろなことを教えてくれる。
- 4 友だちのおかげ → 一緒に遊んでくれる。楽しい。



5 みんなのおかげ → 先生 習い事のコーチ お医者さん 農家の人 …

「家族のおかげ」 1～3

「家族以外のおかげ」 4, 5

問い返して、広げ深められると予想する。

#### 中心発問について

1 大切にしていける。 → だらだら過ごさない。 できることを一生懸命にする。

2 精一杯輝かせたい。 → できることを一生懸命にする。

3 大事にしたい。 → 時間を無駄にしない。 危険なことをしない。 健康に気を付ける。

4 一生懸命生きていきたい。 → 友達とたくさん遊んで仲良く過ごす。

5 みんなの愛情に応えたい。 → 感謝の気持ちを伝えたい。 恩返しできるような生き方をしたい。

「今までの過ごし方を振り返り、よりよく過ごそうとする」 1～4

「多くの支えに気づき感謝の気持ちを感じ過ごす」 5

類型化すると2つのパターンに集約されてしまい、予想が貧弱であるが、これ以上思いつかなかった。

4. 指導案研究後の「本時の展開」

	学習活動	発問と予想される児童の発言	指導上の留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「生きていること」について考える。</li> </ul>	<p><b>心臓って誰が動かしているの？</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分。 ・脳みそ。 ・神様。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時間をかけない。</li> </ul>
展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・範読を聞く。</li> <li>・「おかげさま」について考える。</li> <li>・「せいいっぱい大切にすする」について考える。</li> </ul>	<p><b>「おかげさま」って何の「おかげ」なのかな？</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お母さんのおかげ。</li> <li>・お父さんのおかげ。</li> <li>・家族のおかげ。</li> <li>・友だちのおかげ。</li> <li>・ご飯作ってくれている人のおかげ。</li> <li>・服作ってくれている人のおかげ。</li> <li>・学校を作ってくれた人のおかげ。</li> <li>・生まれたときの病院の人のおかげ。</li> <li>・みんなのおかげ。</li> <li>・太陽のおかげ。</li> <li>・自然のおかげ。</li> <li>・神様のおかげ。</li> </ul> <p><b>◎「一日一日をせいいっぱい大切にすする」ってどういうこと？</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・命を大切に使う。</li> <li>・毎日を精一杯生きる。</li> <li>・後悔しないように生きる。</li> <li>・全力で生きる。</li> <li>・いまよりいい自分になる。</li> <li>・思いっ切り生きる。</li> <li>・ありがとうって感謝しながら生きる。</li> <li>・一瞬一瞬を無駄にしない。</li> <li>・楽しく生きる。</li> <li>・友達と楽しく生きる。</li> <li>・辛いことがあっても乗り越えて生きる。</li> <li>・目標を持って努力すること。</li> <li>・自分のできることを一生懸命やること。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が生きているのは、多くの人の支えがあることに気付かせたい。</li> <li>・支えてくれている人も誰かに支えられていることまで気付いてほしい。</li> <li>・一般論が多く出ることが予想されるので、より具体的に掘り下げたい。</li> <li>補 後悔をしない生き方ってどんな生き方？</li> <li>補 命を輝かすってどんな生き方？</li> <li>補 「大切にしていない」と思うのはどんな時？</li> <li>・意見が出なさそうであればホワイトシートを活用する。</li> </ul>

終末	<ul style="list-style-type: none"> <li>今日の感想を書く。</li> <li>感想を交流する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>今日みんなで話し合っ て感じたことを 書きましょ う。</li> </ul>	
----	---	---	--

## 5. 授業実践と考察

### (1) 中心発問について

『おかげさまで与えられた生命』を、これからどうしていく？」から

『一日一日をせいっぱい大切にする』ってどういうこと？」に変更した。

変更理由…変更前は教材から離れ、教師の意図が強くなるものであったが、変更後は教材を基にするので、児童にとっても考えやすい発問であると考えたから。

### (2) 問い返しについて

#### ア 基本発問「おかげさまについて考える」について

事前授業をすることで、児童の反応を確かめることができた。「お母さん」を問い返して深めていくことで「先祖」まで遡っていくことができるという視点や、「ごはん」を深めていくことで「農家の人」「自然」まで広げて考えることができるという視点に気付くことができた。

#### イ 中心発問について

「精一杯大切に生きる」について考えにくい様子であったので「精一杯大切に生きていると思う人」と挙手をさせた。逆に手が上がらなかった児童には「どうして精一杯大切に生きていないって感じるの？」と問い返すことで、「精一杯大切に生きる」ことについて考えやすいようにした。

## (2) 授業方法について

### 1. 「教材を途中まで読んで発問する」から「教材を最後まで読んで発問する」に変更した。

変更理由…「教材を途中まで読んで発問する」ことは、児童にこの後書かれている「正解」を考えさせることになってしまうと考えたから。正解を当てるのではなく、多様な反応を受け止めたいと考えたから。

### 2. ホワイトシート・マグネットの活用について

- 児童の多様な反応を、時間内に全て引き出すことは不可能だと考え、全員の考えを表出させる意図で行った。
- 初めての試みで慣れておらず時間がかかってしまった。
- 細かく記述させてしまい、相互に見る時間が十分に取れなかった。
- ホワイトシートの活用をせずとも、全員で深めていける内容であった。





(3) 実践3 中学校 第1学年

1. 授業について

(1) 主題名 D 主として生命や自然、崇高な者との関わりに関すること

19 生命の尊さ

(関連項目：11 公正、公平、社会正義 18 国際理解、国際貢献)

(2) 教材名 「命のビザ～杉原千畝～」

(出典 広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要

「道徳的価値に気づかせるための伝記教材の開発」著：鈴木由美子 他)

(3) ねらい 戦乱の中、自らの良心に従って多くの人命を救った外交官杉原千畝の決断を通して、人種や国籍にとらわれず、人間愛に根差した正義や公平の精神を大切にした杉原の生き方に共感させ、生命尊重のあり方について考えを深める。

2. 指導案研究前の「本時の展開」 吹き出しは研究部会での意見

	学習過程	発問と予想される反応	指導上の留意点
導入	事前に配布した『道「六千人の命のビザ」』について、感想を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>立派な人がいて、驚いた。</li> <li>日本人として、もっと知っておくべき人だと思った。 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">読んでくるだろうか？</span></li> <li>話は聞いたことがあったけど、こんな物語だとは知らなかった。</li> </ul>	授業で配付する資料が要約されたものなので、補助資料として、配付しておく。
展開	本時の資料を配付し、教師の範読に合わせて、黙読する。	<p>資料を黙読する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>本文では、杉原の葛藤が全て書かれている。読み取ったものを発表して終わりそう。</p> </div>	机間巡視を行いながら、範読を行う。

基本発問『なぜ、杉原は眠ることもできずに考えたのでしょうか？』		
人命と命令の板挟みになっていることに気付かせる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>ユダヤ人の人々を助けたいけど、外務省の許可が出ないので、どうしていいか分からない。</li> <li>どうすればユダヤ人の人々を助けることができるか。</li> <li>自分の家族も守らないといけないが、ユダヤ人も心配。</li> </ul>	杉原の立場で考えさせ、助けたいという個人の気持ちと命令に従わなければいけない立場両方を考えさせる。
中心発問『なぜ「国の方針がどうであろうと、私は人間としてこの人たちを見放すことはできない。」と決断したのでしょうか？』		
杉原が人命を優先し、助ける決断に至る理由を考えさせる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>多くの人命を救うことが大切。</li> <li>自分の出世より、大切なことだ。</li> <li>目の前の人を見殺しにできない。</li> </ul>	多く考えさせるため、テーマである「命」について考えることができる発問になっているか？
補助発問『外交官として活躍したいという夢は途中で終わったが、良かったのか？』		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>多くの命を助けることができたのでいい。</li> <li>未練はあるが、悔いはない。</li> <li>外交官以外でも、他の分野で活躍とができるはずだ。</li> </ul>	家族の命を危険にさらしてしまうことまで考えることができれば、より命について深められそう。
終末	『今日の物語から、生きていく上でどんなことが大切だと思いましたか。ワークシートに書きましょう。』	
	今日の学習内容を振り返り、感じたことや考えたことをワークシートに書き、自己評価を行う。	各自の考えを書かせる。

### 3. 指導案の考察

#### (1) 中心発問について

- 杉原(本文の主人公)の気持ちが大きく変わる箇所を中心発問としているため、中心発問の発問内容は変えず。補助発問や追発問でテーマである「命」に迫る。

<教材の中心場面>

- ・補助発問では、杉原自身の話になるため、変更を検討した。
- ・参考にした本文には、杉原の葛藤が全て書かれているため、葛藤の部分を削除した文章で授業を行う。

<研究部会にて検討・資料や題材について>

<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前資料を配付して、しっかり読んでくるだろうか？</li> <li>・該当学年によっては、時代背景等の理解が難しい。命が軽い時代がからこそ、しっかり考えられる。</li> <li>・偉人伝記関係のものは、生徒の知識や経験に大きく関わる。答える(考える)のが、個人差が大きい。</li> </ul>
--

これらの意見から、事前学習を行うことを検討した。事前学習として、映像教材を検討。教材に関しては、社会科教諭と相談を行った。

(2) 第2案(2018・12・11) 研究授業実施指導案 吹き出しは変更箇所の説明

	学習過程	発問と予想される反応	指導上の留意点
導入	「映像の世紀」について、感想を元に、第2次世界大戦について説話を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界中で大変なことが起きていたと改めに考えさせられた。</li> <li>・怖かった。 ・気持ち悪かった。</li> </ul>	感想文から、さまざまな意見を取り上げる。特に、「命」に関わるものを取り上げる。
	杉原千畝について、簡単な人物説明を行う	(教科書にも載っている人なんだ。)	時代背景についても触れ、意識させる。
展開	本時の資料を配布し、教師の範読に合わせて、黙読する。	資料	がら、範読を行う。
		より人物像に迫るため、社会科(歴史分野)の教科書を参考に見せた。	
		本文より、杉原の葛藤が書かれている部分を削除したものを使用した。	
	基本発問『「杉原は眠ることもできずに考えた」のは、なぜでしょうか?』		
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ユダヤ人の人々を助けたいけど、外務省の許可が出ないので、どうしていいか分からない。</li> <li>・どうすればユダヤ人の人々を助けることができるか。</li> <li>・自分の家族も守らないといけないが、ユダヤ人も心配。</li> </ul>	人命と命令の板挟みになっていることに気付かせる。  周りと話している生徒がいれば、指名して優先的に発表させる。

	中心発問『「国の方針がどうであろうと、私は人間としてこの人たちを見放すことはできない。」と決断できたのは、なぜでしょうか?』	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多くの人命を救うことが大切。 ⇒少なかったら?</li> <li>・自分の出世より、大切なことだ。 ⇒夢だった外交官をしているのに?</li> <li>・目の前の人を見殺しにできない。 ⇒目の前でなかったらできる?</li> </ul>	深く考えさせるため、追発問をしながら、答えさせる。 周りと話している生徒がいれば、指名して優先的に発表させる。
	補助発問『幸子(妻)が「そうして下さい。」と言えたのは、なぜでしょうか?』	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たち(家族)の命も危険になるが、目の前の人命を救うほうが大切だ。</li> </ul>	千畝だけでなく、家族の命もかかっていること
	杉原個人だけではなく、家族の命もかかっていることを考えさせるための補助発問を追加した。	
	『今日の物語から、生きていく上でどんなことが大切だと思いましたか。ワークシートに書きましょう。』	
終末	今日の学習内容を振り返り、感じたことや考えたことをワークシートに書き、自己評価を行う。	各自の考えを書かせる。 自己評価を忘れないように書かせる。

	学習過程	発問と予想される反応	指導上の留意点
導 入	(社会の教科書を基に)「日本人である杉原千畝さんですが、外国の切手になって います。何をした人でしょうか？」		
	杉原千畝につ いて、簡単な人 物説明を聞き、 人物像をとら える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国の発展に貢献した人</li> <li>・すごい偉業を達成した人</li> <li>・日本とその国の友好関係を結んだ人</li> </ul>	時代背景(第二次世界 大戦やユダヤ人に対し ての迫害など)につい ても触れ、意識させる。 「平和学習」等との連 携をはかる。
展 開	本時の資料を 配付し、教師の 範読に合わせて、 黙読する。	資料を黙読する。	机間巡視を行いなが ら、範読を行う。
	基本発問『「杉原は眠ることもできずに考えた」のは、なぜでしょうか?』		
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ユダヤ人の人々を助けたいけど、外務省 の許可が出ないので、どうしていいか分 からない。</li> <li>・どうすればユダヤ人の人々を助けること ができるか。</li> <li>・自分の家族も守らないといけないが、ユ ダヤ人も心配。</li> </ul>	人命と命令のどちらを 優先させるのか葛藤し ていることに気付かせ る。  周りと話している生徒 がいれば、指名して優 先的に発表させる。
	中心発問『「国の方針がどうであろうと、私は人間としてこの人たちを見放すこと はできない。」と決断できたのは、なぜでしょうか?』		
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・多くの人命を救うことが大切。 ⇒少なかったら?</li> <li>・自分の出世より、大切なことだ。 ⇒夢だった外交官をしているのに?</li> <li>・目の前の人を見殺しにできない。 ⇒目の前でなかったらできる?</li> <li>・人間として、見過ごすことが出来ない。 ⇒「人間として」とはどういうこと?</li> </ul>	深く考えさせるため、 追発問をしながら、答 えさせる。 社会正義に偏らず、命 を助けたことに目を向 けさせる。
補助発問『幸子(妻)が「そうして下さい。」と言えたのは、なぜでしょうか?』			
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たち(家族)の命も危険になるが、目 の前の人の命を救うほうが大切だ。</li> </ul>	千畝だけでなく、家族 の命もかかっているこ	

	<ul style="list-style-type: none"> <li>あなたの気持ちを尊重してください。</li> <li>家族は私も守ります。</li> </ul>	とに気付かせる。
	補助発問『杉原千畝さんが凄い所はどこでしょうか?』	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分や家族の危険を冒してでも、多くの人の命を優先した。</li> <li>命令に背いたが、命を救った。</li> </ul>	多くの命を救うことを貫いたことを再度押さえる。
	『今日の物語から、生きていく上でどんなことだと思いましたか。ワークシートに書きましょう。』	
終末	今日の学習内容を振り返り、感じたことや考えたことをワークシートに書き、自己評価を行う。	<p>第1案の際に頂いた意見を参考に、研究授業で追加した発問。全体のまとめにもなり、より深く考えることができた。</p> <p>各自の考えを書かせる。自己評価を忘れないように書かせる。</p>

<事後研・研究部会にて検討で頂いた意見>

・教科書に写真や切手が載っているので、「なぜリトアニア(外国)の切手になっているのか」を問うことで、導入時にもっと深められそう。

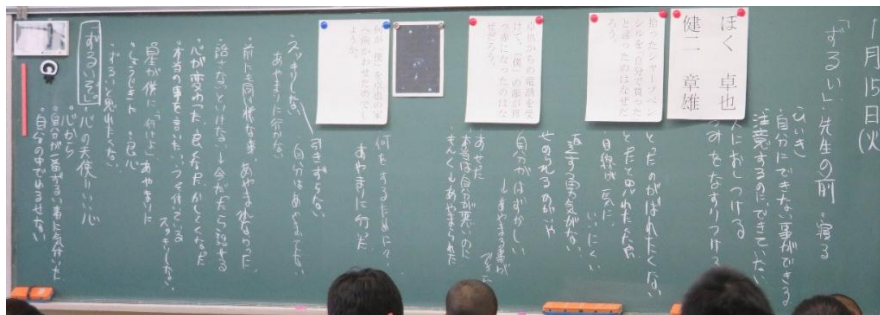
導入に関しては、必ず事前学習ができるとは限らないため、社会の教科書(リトアニアの切手)を使っての導入を検討した。

・「自分だったらどうするか」を問うことで、立場を超えて命について考えられるのでは。

基本発問や意見がなかなか発表できない生徒についての追発問として考えさせるのは有効である。また、学齢や既知の知識に応じて考えさせたい。

・「生命尊重」よりも「社会正義」に重きがあったように感じた。

関連項目ではあるが、「社会正義」に偏らないように、追発問を考える必要がある。



(4) 実践4 中学校 第3学年

1. 授業について

(1) 主題名 D 主として生命や自然, 崇高なものとの関わりに関すること  
生命の尊さ

(2) 教材名 「ドナーカード」(出典 あかつき「自分をのばす」)

(3) ねらい 決して軽々しく扱われるべきではない生命の尊さを深く自覚し, 自他の生命を尊重する道徳的態度を育成する。

2. 指導案研究前の「本時の展開」

	学習活動	発問と予想される反応	指導上の留意点
導入	1. 導入	「生きる」ことについて考えると伝える。 道徳は正解を求める授業ではないので, 自分の思ったことを素直に話してほしい旨を伝える。	
展開	2. 資料を読んで話し合う	「ドナーカード」を範読する 内容を簡単にまとめる 発問1: 高井さんの考えは, 狭く, 自分勝手だと思いませんか。 ・親にとって子どもが一番大事だから, 自分勝手ではない。 ・子どもが大人になっていたら, 移植を考えると言うのは分かる。 ・移植を待っている人のことを知っているのに, 心が狭い。 ⇒もし, 今小学四年生の娘が, 臓器移植の意志があるといったら? ⇒娘が臓器移植が必要な病気になったとき, 高井さんは? 発問2: 新見さんの考えの中で, 共感できる部分がありましたか。 ・死んでからも自分の臓器が人の役に立つというのは良い。 ・「あげたくない, でも, もらいたい」というのは分かる。 ・脳が死んだ状態なら, 心臓が動いている間は死を認めたくない。 ⇒共感だけでなく, 反対意見や思ったことも引き出したい。	・範読後, 30秒ほど間をあける  ・答えに対して問い返しを行い, 深く考えさせる
	3. 命について考える	発問3(中心発問): あなたは今すぐドナーカードに記入できますか。 ・自分一人では決められない ⇒自分の命なのになぜ?	生命の尊さ… 生命の尊さについて, その連続性や有限性なども含めて理解し, かけがえのない生命を尊重すること。  ・「臓器を提供しない=悪」にな

他者の視点ではなく, いきなり自分の意見を問われる。

高井さんや新見さんの意見を深めるよりも, 自分やクラスメイトの考え方を共有できたほうが良い。

自分の命と結び付けて考えることができるか。

		<p>・自分は臓器提供の意志があるけど、家族はダメって言うかも。</p> <p>⇒なぜ家族はそう言うと思った？</p> <p>→自分一人の命だが、そこに関わる人々の存在を考えると、自分の命についての考えを深めたい。</p>	らないように
終末	4. 授業の感想を書く。		

### 3. 指導案の考察

#### (1) 補助発問について

どちらも「高井さん」や「新見さん」の意見について「自分はどう思うか」を問うものになっているため、個人の意見を聞いているにすぎない。「共に考え共に語り合う」場にするために、他者の視点で物事を見る発問に変えたほうが良いと考えた。高井さんや新見さんは何を訴えたくて投書したのか、子供や妻がいる人の立場になって考えられるよう、それぞれ「高井さんはなぜ娘をドナーにできないのか」、「新見さんはなぜこのような意見を持っているのか」とした。

しかし、実際に授業をする中で、子供や妻がいる大人になったつもりで答えるのは難しく、黙り込んでしまったり、「自分だったら…」という答えが返ってくる生徒が多くいたため、簡単に内容を確認するだけにとどめたほうがよさそうだと判断した。

#### (2) 中心発問について

今回はオープンエンドの教材のため、具体的な結論が出せない。そのため、周囲の意見を知る中で、自分の中のドナーカードについての考えに気付き、「なぜ」ドナーカードについて考えるのが難しいのかを考えることで、より道徳的価値に迫ることができる授業にしたい。

ドナーカードについて考えることが、生命の尊さを考えることにつながるのか、見えない部分がある。そこで、自分の考えだけでドナーカードに記入できるかの問いとともに、その際に家族や身近な人のことを考えたかを問うことで、自分の命と周囲とのつながりを考えられるよう、問い返しを設定した。

また、公開授業の前に専任講師である四天王寺大学 杉中 准教授に指導助言を頂き、全員の意見を引き出すためにホワイトボードを使って中心発問を問う形式に変更した。全員の意見が一斉に見えるため、より多くの意見に触れることができ、今回のテーマである「共に考え共に語り合う」道徳の実現に近づけると予想した。また、他者の考えを知り、自分自身の考えの理由付けが深まることで、命について考えたことになることだった。

### 4. 指導案研究後の「本時の展開」



	学習活動	発問と予想される反応	指導上の留意点
導入	1. 導入	「生きる」ことについて考えると伝える。 道徳は正解を求める授業ではないので、自分の思ったことを素直に話してほしい旨を伝える。	
展開	2. 資料を読んで話し合う	「ドナーカード」を範読する 内容を簡単にまとめる <b>発問1：高井さんは、どうして自分の娘をドナーにできないのだろう。</b> ・親にとって子どもが一番大事だから。 ・いとおしく、手放せない存在だから。 ⇒移植を待っている人のことを知っている、高井さんの中の矛盾した気持ちについても気付かせたい	・範読後、30秒ほど間をあける <b>生命の尊さ…</b> 生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。
	3. 命について考える	<b>発問2：新見さんは、自分の臓器提供には肯定的だが、妻の臓器提供には否定的なのはなぜだろう。</b> ・死んでからも自分の臓器が人の役に立つというのは良いことだと思っているから。 ・自分の大事な人の臓器を、「あげたくない、でも、もらいたい」から。 ⇒自分の命も他者の命も同じ命なのに、同じように考えられない理由にも目を向けさせたい <b>発問3(中心発問)：あなたはドナーカードの何番を選びますか。理由を書いてください。※</b> ・1番 自分の命で人の役に立ちたい ・2番 心臓が止まっているなら家族も納得すると思う。 ・3番 体の一部が無くなるのは怖いし、家族が反対すると思う。 ⇒「共感したもの」、「質問したい」の磁石がたくさん貼ってある意見を中心に、生徒の考えの理由について考えを深めたい →なぜそう思ったかの理由付けに重点を置き、自分自身の考えを深めていく	・「臓器を提供しない＝悪」にならないように ・答えに対して問い返しを行い、深く考えさせる
終末	4. 授業の感想を書く。		

※①黒板を1(脳死、心臓死の場合)、2(心臓死の場合のみ)、3(提供しない)、に三分。  
②ホワイトボードに意見を書き、自分の意見の場所に貼ってもらおう。③磁石を2つ渡し、「共感したもの」と「質問したい」意見にそれぞれ磁石を貼ってもらおう。④自分の席につく。

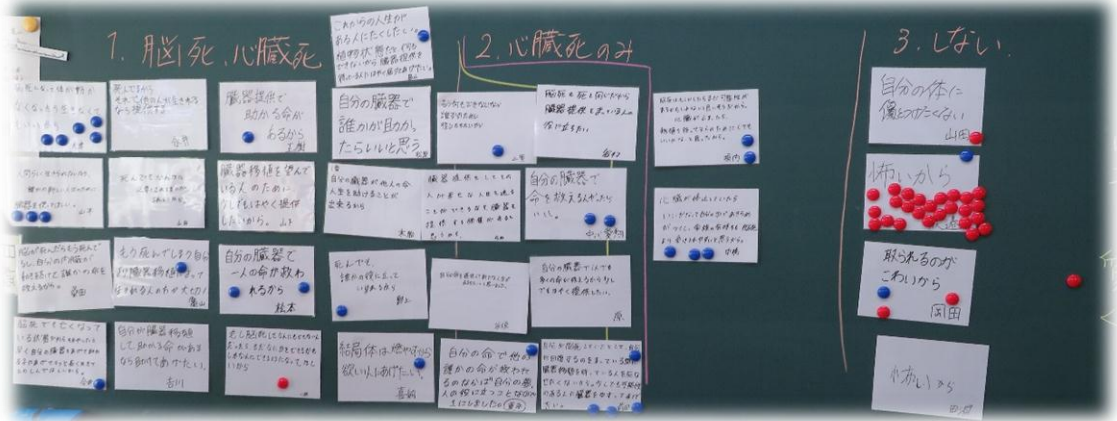
#### 5. 授業実践と考察

「ドナーカード」という教材を扱うにあたり、生徒たちには事前に臓器提供・臓器

移植に関してのリーフレットを配付し、基本的な知識を確認した。社会科の授業やドラマ等で、ドナーカード自体の存在や、臓器移植というものがあると知っている生徒がほとんどだったが、脳死や心臓死について曖昧な部分も多く、植物状態と混同して理解している生徒も多くいた。ある程度の知識がないと、深く考えることが難しい教材だったといえる。1時間という設定にこだわりすぎず、必要に応じた時間設定をすることで、よりよい授業にすることができると感じた。

助言頂いたホワイトボードを使って全員の意見を提示する、という方法を今回初めてとった。一人ずつ指名して考えを聞いていく従来の方法だと、クラス全員分の意見を聞いたり、それぞれに問い返しを行ったりすることが時間的に難しいが、この方法であればクラス全員の意見をクラス全員で共有することができ、より多くの意見に触れることができた。自分の意見を発表することに抵抗のある生徒でも、すでに掲示してある周囲の意見を参考にしながら書くことができるので、自分の意見を文章化できていたように感じた。また、磁石を用いて「共感」や「疑問」を全員で表すことで、生徒が関心を示した意見にピンポイントで考えを深める場を設けることができた。生徒たちからは、今回の授業方法について、普段発表しない生徒の考えが知れたことや、予想外の意見について考えている生徒の存在に気付くことができ、とても面白かったという反応がもられた。ただし、どの意見に磁石が多く置かれるか＝関心が向くか、については実際にやってみるまで予測ができず、その後の発問をどうするか・どの方向から価値に迫っていくのか等をその場で考える必要があるため、授業スタイルへの慣れが必要であると感じた。

また、今回直接的に生徒同士が意見をやりとりする場がなかったので、授業見学者からはどの程度考えが深まったのか、どこで生徒たちの考えが深まったのかが見えづらい展開であった。終末に書いた感想を、意見交流としてお互いに発表しあうことができているならば、そこから考えを深めていく生徒もいたかもしれないという意見を頂いた。今回のテーマである「共に考え共に語り合う」道徳にするためにも、より一層の授業方法の研究に励みたい。



(5) 実践5 特別支援学校 小学部1年

1. 授業について

(1) 主題名 D 主として生命や自然、崇高な者との関わりに関すること

生命の尊さ(関連項目：節度、節制 個性の伸長 家族愛)

(2) 教材名 「ノンノンだいじょうぶ」(出典 みんなのどうとく1ねん)

(3) ねらい いつもと変わらない朝を迎えられることに喜びを感じるノンノンを通して、自分の命と健康を大切にしようとする道徳的心情を育てる。

2. 指導案研究前の「本時の展開」

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ふれあい遊びをする。(あっちこっちいたい)</li> <li>・体と気もちのカードを見て、自分の気もちを表出する。</li> <li>・登場人物を確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・快・不快の表出をする。</li> <li>・触ってほしいところを表出する。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;">元気な体と笑顔のカード</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・快の表出(笑顔・発声)</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;">病気の体と落ち込んだ表情のカード</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・真顔もしくははしょんぼり顔</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の体を意識できるように、体の部分を言葉かけしながらふれる。</li> <li>・体の様子とその時の気もちが一致したカードを提示する。</li> </ul>
展開①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・P74 下, P75 上・中の挿絵を見る。</li> <li>・P76, P77 の挿絵を見る。</li> </ul>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;">ノンノンの様子を教えてください。</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体カード, 気もちカードから選択する。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;">ノンノンの様子を教えてください。</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体カード, 気もちカードから選択する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・数種類のカードから二者択一で選択していき、ノンノンの様子と自分の経験を照らし合わせることができるようにする。</li> <li>・数種類のカードから二者択一で選択していき、ノンノンの様子と自分の経験を照らし合わせることができるようにする。</li> </ul>

展 開 ②	・P77の挿絵と本児の好きな物カードを見る。 <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">           ノンノンのように好きな物がありますか？         </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <b>【食べ物】</b>            ・コロッケ，とんかつ，わかめごはん  <b>【遊びや乗り物】</b>            ・スクーターボード，オーシャンスイング，バス         </div>	・好きな食べ物や好きな遊びを問いかけ，笑顔や発声で答えることができるようにする。
終末	・全文の読み聞かせを聞く		・本時の学習を振り返りながら聞かせる。

### 3. 指導案の考察

#### (1) 〈教材の中心場面について〉

「いろいろなことがとてもすてきに思えました」

〈中心場面で深める内容について〉

- ・当たり前のことが素敵
- ・好きなことや好きな物があることが素敵
- ・健康で元気に過ごすことで，自分の好きなことが増える

#### (2) 中心場面をどのようにふれさせるか

ア 当たり前の概念形成は未発達のため，好きなことがたくさんあることの素晴らしさにふれてはどうか。

イ 健康に過ごすことと好きなことができることの因果関係を促せるか。

ウ 「元気」と「しんどい」時の様子を保護者から聞き取り，授業の中で児童に伝えることで，ノンノンとの同化を図ることはどうか。

#### (3) 児童の発達特性を踏まえた道徳的価値の設定

小学校学習指導要領解説第3章第2節「内容項目の指導の観点」によると，第1，2学年における「生命の尊さ」に関する指導の要点は，

この段階においては，生命の尊さを知的に理解するというより，日々の生活経験の中で生きていることのすばらしさを感じ取ることが中心になる。

と記されていることから，本児の発達段階に鑑み，「生きていることのすばらしさ」を「好きな物がたくさんある生きる楽しさ」と捉えることとした。

4. 指導案研究後の指導案(公開授業)

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ふれあい遊びをする。(あっちこっちいたい)</li> <li>・体と気もちのカードを見て、自分の気もちを表出する。</li> <li>・登場人物を確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・快・不快の表出をする。</li> <li>・触ってほしいところを表出する。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;">元気な体と笑顔のカード</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・快の表出(笑顔・発声)</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;">病気の体と落ち込んだ表情のカード</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・真顔もしくはしょんぼり顔</li> </ul> <p>ノンノンのカードを見て、学習の対象に興味をもつ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の体を意識できるように、体の部分を言葉かけしながらふれる。</li> <li>・体の様子とその時の気もちが一致したカードを提示する。</li> </ul>
展開①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・P74 下, P75 上・中 の挿絵を見る。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">ノンノンの様子を教えてください。</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お母さんからのお手紙を聞く(病気の時の様子)。</li> </ul> <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">保護者からのアンケート</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・P76, P77 の挿絵を</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">ノンノンの様子を教えてください。</div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体カード, 気もちカードから選択する。</li> <li>・真顔で聞く。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体カード, 気もちカードから選択する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上記のカードから二者択一で選択し、ノンノンの様子と自分の経験を照らし合わせるようにする。</li> <li>・ノンノンと同じ様子であることを確認する。</li> <li>・母親から伝えられた様子と選択したカードの一致点を認め、賞揚する。</li> <li>・上記のカードから二者択一で選択し、ノンノンの様子と自分の経験を照らし合わせるようにする。</li> </ul>

<p>展 開 ②</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お母さんからのお手紙を聞く(元気になったときの様子)。</li> </ul> <p>保護者からのアンケート</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・P77の挿絵と本児の好きな物カードを見る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・真顔で聞く。</li> </ul> <p>好きなことがたくさんあることの素晴らしさ</p> <p>元気な〇〇君の大好きなことを教えてください</p> <p>【好きな食べ物】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コロッケ，とんかつ，わかめごはん</li> </ul> <p>【好きな遊びや乗り物】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・スクーターボード，オーシャンスイング，バス</li> </ul> <p>準備するカード</p> <p>コロッケ，とんかつ，わかめごはん，スクーターボード，オーシャンスイング，バス，工作，プール</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・カードから好きな物を選び，シートに，貼り付ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ノンノンと同じ様子であることを確認する。</li> <li>・母親から伝えられた様子と選択したカードの一致点を認め，賞揚する。</li> <li>・好きな食べ物や好きな遊びを問いかけ，笑顔や発声で答えることができるようにする。</li> <li>・元気だったら～などの言葉かけをし，健康と好きなことの関係について感じることができるようにする。</li> </ul> <p>健康と好きなことと関係</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・カードの裏面に両面テープを貼っておき，児童がめくることができるように，手指の支援をする。</li> </ul>
<p>終末</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全文の読み聞かせを聞く。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習を振り返りながら聞かせる。</li> </ul>



## 5. 授業実践と考察

これまで、特別支援学校、特に重度重複障害である児童生徒が多数在籍する肢体不自由特別支援学校においては、自立活動を主として、教科等の時間に道德教育との関連を図った授業に取り組まれてきた。本校においても、生活年齢と発達年齢が乖離し、個別の教育ニーズが違う児童生徒が多く在籍している中、道德の授業単体ではなく、各教科等の時間に道德的内容を加味した実践がなされてきた。

しかし、道德の教科化を受け、重度重複障害のある児童生徒への道德の授業についてのあり方を検討し、実践する必要が出てきた。そこで、本校においては、以下のよう整理し、授業実践を進めていこうとしているところである。

①児童生徒の障害の状態により、特に必要のある場合には、道德科の内容の一部又は全部を当該各学年より前の学年の一部又は全部によって替える。

【特別支援学校学習指導要領解説第2章第8節の1】

②学校行事や体験的な学習活動との関連を踏まえ、学習を計画する。

③児童生徒の類型や発達段階に応じた学習を計画する。

具体的には、①教材や教具、行事、体験等の題材(着ぐるみ)から、道德的価値(内容)を個々の発達に応じて想定すること、②道德の内容項目又は関連する項目そのものもつ温かさや素晴らしさに改めて触れ、感じさせること、③児童生徒の主体的な学習活動とすること、を授業づくりの柱として取り組んでいる。授業の中では、児童生徒の表出を意味づけ(価値付け)することで、道德的な心情、判断力、実践意欲と態度の涵養を図り、道德教育の要として、児童生徒の豊かな心の醸成につなげていくよう取組を進めている。

本実践においては、「ノンノンだいじょうぶ」という教材を基に、病気を治癒し元気になり、当たり前のことを素敵と思うようになったノンノンと自身を同化し、病気でしんどい自分と元気な自分を保護者の協力を得ながら比べ(関連：家族愛)、元気な時(関連：節度、節制)には素敵なこと＝「好きなこと」がいっぱいできる(関連：個性の伸長)、好きなことがたくさんある素晴らしさを感じることを個別のねらいとした。なお、学習状況の意味づけ(価値付け)としては、自立活動の個別の指導計画に基づき、「心理的な安定」や「人間関係の形成」、「身体の動き」、「コミュニケーション」領域において目標としている表出や動きをみとり、授業を進めた。

授業の中で、本児は、カードの選択、ノンノンとの同化、好きなことを選択と多くの学習課題に取り組むことができた。特に、好きなことを選択では、表情と発声にはっきりとした変化があり、好き、苦手だけでなく、大好きを表出も見せていた。また、保護者からのアンケートを読み上げる際には、目線を教師から反らさず聞き、笑顔を見せたり、真顔になったりと興味深く聞き入っている様子も見られた。

しかし、健康と好きなことの関係性については、本児の表出から読みとることはできなかった。本児の発達を考慮し、本題材では、「当たり前」を「好きなこと」と捉え、元気で好きなことがたくさんあることは素敵な生き方であると道德的価値を設定するなど、工夫の必要性を感じた。

## 4 研究のまとめ

本研究会では、どのような発問をすれば道徳的価値に迫ることができるか、児童生徒がより多面的・多角的な見方へと発展していくか、また、対話を通して深めていくことができるかといった課題に迫るため、発問の工夫をし、多様な意見を出し合い深める授業実践を行ってきた。その授業づくりについて重要なポイントを次のようにまとめる。

### (1) 教材の分析

誰が、何によって、道徳的変容を遂げたのかをつかむ。また、児童・生徒の考えを深めさせたい中心場面をとらえる。

### (2) 道徳的価値の理解を深める

道徳的価値について児童・生徒が、どの段階まで理解しているのかをつかみ、また発達段階に合わせるなど、道徳的価値が深まるねらいを設定することが大切である。

### (3) 発問内容の検討

基本発問(before 発問)、中心発問、問い返し発問、補助発問、テーマ発問、を子どもの実態をよくつかみ、発問を検討することが重要である。子どもの考えの広がりや深まりを促す発問となるようにする。また、同じ内容の質問や、同じ反応が予想される質問はないように、発問を精選する。

### (4) 授業時間のマネジメント

授業前半の「導入・範読・内容理解」には時間をかけず、中心場面で時間をかけ、考えを深める時間を確保する。また、意見交流などのペアトークなどは、短く(1分程度)区切ることで発言を促すことにつながる。

### (5) 個人ホワイトボードとカラーマグネットの活用(クラス全員の意見をクラス全員で共有するために)

授業中に多様な意見を交流させるため、中心発問の場面で、より多くの(できれば全員の)意見を引き出したい。しかし指名での発表では、時間内に全員の意見を聞くことは、物理的に困難である。各自意見をホワイトボードに記入し、全員が黒板に貼り、全員で交流し、「共感」・「質問したい」の2色のマグネットをホワイトボードに貼る。子どもたちの共感できる意見や、質問したい事柄について、子どもたちが主体的に捉え、視覚化することができる。意見交流の時間短縮ができ、振り返りの時間の確保にもつながる。

### (6) 予想される子どもの発言の類型化

授業を進めながら子どもの発言を受容し、問い返す発問を考え、タイミングを計るのは難しい。そのため、あらかじめ予想される子どもの発言を類型化して、想定される発問を用意しておくことで、道徳的価値についての考えを深める発問をすることが容易になる。

### (7) 道徳的価値にじっくりと向き合う時間の確保

本時で学ぶべき道徳的価値について、振り返りシートに書かせるなどして、自分と向き合い、静かにじっくりと考える時間を確保することが大切である。

## 5 終わりに

「特別の教科 道徳」の授業において、子どもたちから多様な意見を引き出し、対話を通して道徳的価値の深まりを促す活動を行った。その中で、多様な意見を引き出すため、



発問内容の工夫や、指名をして発表させる方法の工夫について、様々な方法を研究し、実践するなかで、新たな疑問が生まれた。

挙手による指名で発表させる場合、中心発問の工夫により、活発にかつ多様な意見が出るようになった。しかし、多くの児童・生徒が活発に発表するあまり、その多様な意見をもとに、さらに道徳的価値を深める対話の時間をとることが難しい状況もみられた。

また、児童生徒からの発言をもとに、教師が追発問をし、指名発表させながら授業を進めると、授業の方向性は定まるが、多様な意見が埋もれてしまうことがある。クラスの意見が1つの方向に偏ってしまうこともみられた。つまり、多角的な見かたによる深まりのない授業となる危険性がある。

このように、多様な意見を、1時間の授業の中で引き出し、さらに対話を通して、深めるにはどうすればよいか。この疑問に、本研究部会専任講師の四天王寺大学准教授杉中康平氏から、ホワイトボードの活用による授業展開を指導していただき授業実践を行った。(実践2・4参照)

ホワイトボードと2色のカラーマグネットの活用による授業展開は、従来の挙手・指名による発表とは意見の交流にかかる時間が大きく異なるものである。全員の意見を一斉に見ることができ、「共感の意思表示」と、「詳しく聞きたい意思表示」を示すカラーマグネットを貼る。子供たちのマグネットによる評価によりさらに発問を行いながら、道徳的価値理解を深めていく。例えば、挙手指名による発表は、真っ暗な洞窟の中を懐中電灯1つで、宝物を探すようなものであるのに対し、ホワイトボードの活用は、スイッチ一つで部屋の電気がパッと点きすべてが明るく見えるようになるようなものである。

ホワイトボードの活用により、児童・生徒の思考を深める時間をより長く確保することができる。このことは、児童・生徒から多くの意見を引き出し、対話につなげ、道徳的価値理解を深めるために有効であった。

本研究部会で、発問の工夫と共に、多様な意見を出し合い深める授業実践を基に研究を進めることで、子どもたちが、主体的に道徳的価値について考え、他者と対話し、より多面的・多角的に考え、自分自身との関わりの中で自らの考えを深めている姿が見られた。

今後は、指導と評価の一体化を図り、どのようにその学習状況や成長の様子を把握し評価するかについて、研究していく必要がある。

#### 【参考・引用文献】

- ・文部科学省「小学校学習指導要領解説 総則」
- ・文部科学省「小学校学習指導要領解説 領特別の教科 道徳編」
- ・文部科学省「中学校学習指導要領解説 総則」
- ・文部科学省「中学校学習指導要領解説 領特別の教科 道徳編」
- ・兵庫県教育委員会 兵庫県道徳教育実践推進協議会「『特別の教科 道徳』の全面実施に向けて②」
- ・兵庫県教育委員会 兵庫県道徳教育実践推進協議会「『特別の教科 道徳』の全面実施に向けて③」
- ・横山利弘ほか『楽しく豊かな「道徳の時間」をつくる』ミネルヴァ書房 2015年4月

## 児童が、【書くこと】への意欲を高め、前向きに学習を進めることができる指導の在り方を探る

指導員	小谷 隆宏
研究員	野上 直哉(園和北小)
〃	太田 宏樹(立花小)
〃	水本 雅昭(水堂小)
〃	和田 紗知(小田北中)

### 【内容の要約】

平成32年度の小学校学習指導要領改訂では、外国語科の『書くこと』の目標において、『ア 大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする イ 自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする』と明記されており、新たに『書くこと』に関する事項が取り扱われることとなった。以上のような学習指導要領の方向性を踏まえ、『書くこと』についての指導イメージを持つことが難しいと感じる教員に対し、より具体的な指導イメージをもつことができるよう、本年度の研究テーマを『児童が、【書くこと】への意欲を高め、前向きに学習を進めることができる指導の在り方を探る』とした。

1	はじめに	83
2	研究の内容	83
(1)	研究テーマ	83
(2)	研究テーマの設定理由	83
(3)	研究の進め方	83
(4)	実践事例	84
(5)	事後研究会について	91
(6)	授業実践のまとめ	92
3	専任講師による研究の総括「研究のまとめとして」 (関西大学外国語学部 今井 裕之)	94
4	終わりに	95

## 1 はじめに

小学校における次期学習指導要領解説では外国語科の『書くこと』の目標において、『ア大文字、小文字を活字体で書くことが出来るようにする。また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことが出来るようにする イ自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことが出来るようにする』と明記されており、またその内容において、第5学年及び第6学年では(3)言語活動及び言語の働きに関する事項にて、『(イ)相手に伝えるなどの目的をもって、身近で簡単な事柄について、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句を書き写す活動 (ウ)相手に伝えるなどの目的をもって、語と語の区切りに注意して、身近で簡単な事柄について、音声で十分に慣れ親しんだ基本的な表現を書き写す活動』といった指導をすることが必要であると整理されている。

以上のような学習指導要領の方向性をふまえ、本研究部会では、前年度から継続的に指導をいただいている関西大学外国語学部教授 今井裕之氏の指導を受けながら、『書くこと』における授業の在り方について実践を通して探っていくこととした。

## 2 研究の内容

### (1) 研究テーマ

児童が、『書くこと』への意欲を高め、前向きに学習を進めることができる指導の在り方を探る

### (2) 研究テーマの設定理由

本市における外国語活動の研修について、3年間にわたり全小学校教員を対象として、次期指導要領に沿った理論的な研修と授業実践に関する研修を行ってきた。今回の学習指導要領の改訂において、新たに『書くこと』に関する事項が取り扱われるにあたり、昨年度、本研究部会提案授業を参観した教員に対し、「書くことにおける指導」についてアンケートを取ったところ、以下のような結果になった。

○できる・自信がある 0%

△どちらともいえない 45%

×できない・自信がない 55%

このことから、『書くこと』についての指導イメージを持つことが難しいと感じる教員が多いことがわかった。そこで、より具体的な指導イメージをもつことができるよう、本年度の研究テーマを『児童が、【書くこと】への意欲を高め、前向きに学習を進めることができる指導の在り方を探る』とした。

### (3) 研究の進め方

#### 1. 具体的な研究内容

○研究部員について

学校	名前	ひらがな	学年
園和小学校	野上 直哉	のがみ なおや	4年
立花小学校	太田 宏樹	おおた ひろき	6年
長洲小学校	水本 雅昭	みずもと まさあき	3年
小田北中学校	和田 紗知	わだ さち	3年

## 2. 年間の活動について

日程	研究部会回数	研究内容
7月5日(木)	委嘱式 第1回研究部会	○研究テーマの方向性の決定・共有 ○研究部会日程の調整 ○アルファベット学習シート『魔法のシート』の使い方の共有
8月20日(月)	第2回研究部会	○指導案検討 ○公開授業日程調整
10月4日(木)	第3回研究部会	
11月19日(月)	第4回研究部会	
1月24日(木)	第5回研究部会	
2月21日(木)	第6回研究部会	○公開授業 ○事後研究協議会 ○講話「知識・技能, 思考・判断・表現を踏まえた授業作り」

### (4) 実践事例

1. 単元名 My Best Memory 6年3組の小学校の思い出を紹介しよう

2. 単元目標

- ・思い出の学校行事について伝え合おうとする。

【コミュニケーションの関心・意欲・態度】

- ・学校行事について表す表現に慣れ親しむ。また学校行事について簡単な語句や基本的な表現を推測しながら読んだり, 例を参考に書いたりすることに慣れ親しむ。

【外国語への慣れ親しみ】

- ・英語の書き方の規則に気付く。

【言語や文化に関する気付き】

3. 単元について

本教材は, 思い出に残る行事について伝える過去形の言い方を知り, 尋ねたり答えたりする活動を通して, 積極的に相手に関わろうとする態度を培うことをねらいとしている。小学校生活を終えようとする節目に自らの学校生活を振り返ることはとても有意義である。それを英語で表現することで子ども達の生活に自然に英語が浸透していくことになる。様々な学校行事を英語で学習することで児童は自分たちが経験した行事を思い出し, また, 外国の学校行事との類似点や相違点を見つけながら, 自分たちの学校生活をより深く振り返ることができる。と考える。

本学級の児童は男女問わずに仲良く元氣に行動する児童が多い。授業中も積極的に自分の考えを発表する姿がよく見られる。外国語活動の授業では, ALT や JTE の先生と楽しくゲームや歌などの活動を積極的に行い, 英語への興味や関心を持ちながら, 外国語活動に取り組んでいる。しかし, 英語で発表することを恥ずかしいと思い, 発表も一部の児童だけになることがある。また, 文字を書くことに苦手意識を持っている児童もいる。4本線の使い方や書き方を忘れ, 上手くアルファベットを書けずに, 適当に書いてしまいがちである。

指導にあたっては、児童は前時までに「went to～」や「ate/saw/enjoyed」などの過去を表す表現について学習してきている。本単元ではそのことを活かしながら学習を進め、単元末には6年3組の児童の思い出をクラスで伝え合う活動を設定し、みんなの思い出を書いた文章を教室内に掲示する。本時では、最初にフラッシュカードを使い、行事や簡単な表現の発音の練習をする。声に出すことで恥ずかしいという思いを少しでも少なくしたい。次に、事前に録画しておいたALTの音声を聞く。思い出の文章を書くときの参考にできるように、行事と感想に着目させ聞き取らせたい。そして、一番の思い出の行事を考え、それについて行事と感想をワークシートに書く。その際に「行ったところ」「楽しんだこと」「感じたこと」などを考えさせてから、書かせるようにする。ワークシートに書く時も、4本線を守り、大文字や小文字に注意し、ゆっくり丁寧に書くことを意識させる。書いた内容のワークシートをボードに挟み、クラス全体で自由に交流する。相手に読んでもらえる字で書けているか、相手に正しく意味が伝わったかを確認するために、ボードを相手に見えるように掲示しながら読んでもらい、自分のワークシートにサインをもらう。その際に、軽く質問をし、感想が言えるようにさせたい。行事や感想が思い浮かばない児童には、行事ではなく日常の学校生活で考えさせるようにする。書くのが苦手な児童には、あらかじめある程度文章が書かれているワークシートを用意し、例文を参考にさせたり、写させたりして、まずは書くことに慣れさせる。児童の実態に合わせたワークシートを用意することで、児童の文字を書くことへの苦手意識を軽減し、書くことの楽しさや大切さを感じさせたい。過去形を正確に使って表現できる力を付けることはもちろんだが、これまでの学校生活を振り返り、思い出の学校行事について考える中で、これまでの学びや成長を感じさせられるように指導していきたい。

#### 4. 単元の評価規準

コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に関する気付き
進んで英語を使い、相手に自分の思い出の学校行事を伝えようとしている。	学校行事について表す表現や基本的な表現を読んだり、書いたりすることに慣れ親しんでいる。	英語の書き方に注意し、文の語順や規則に気付いている。

#### 5. 単元で扱う語彙・表現

<主な語彙> best, memory,

行事(sports day, school trip, field trip, music festival, swimming meet, entrance ceremony, summer vacation, graduation day)

<主な表現> What's your best memory?

My best memory is (Music Festival).

We enjoyed (playing/singing).

We [went to (Gifu/Little World)/ate (Japanese food)/saw(Gifu Castle)].

We enjoyed (school trip / field trip / music festival)].

6. 単元の指導計画(全4時間)

時	目標と主な学習活動1稿	評価		
		評価の観点		評価規準 【観点】[方法]
		コ	慣	気
1	<p>学校行事について表す表現を知り，慣れ親しむ。</p> <p>○1月から時計回りに月の言い方を復習し，それぞれの月に描かれている行事を予想し，考える。</p> <p style="text-align: right;">(We can!2 P. 50, 51)</p> <p>○デジタル教材でALTが話す学校行事についての映像を見て，分かったことを誌面に書く。</p> <p style="text-align: right;">(We can!2 P. 50, 51)</p> <p>○【Let's Listen1 P. 52】学校行事の話を読み，登場人物がどの行事を話しているかを聞き取り，答える。</p> <p>○ポインティングゲームをする。</p> <p>○【Let's Chant P. 51】チャンツを歌う。</p>		○	<p>【学校行事について表す表現や基本的な表現を読んだり，書いたりすることに慣れ親しんでいる】(慣)</p> <p>[観察，教科書の誌面，振り返りシート]</p>
2	<p>学校行事について表す表現に慣れ親しみ，英語の書き方の規則に気付く。</p> <p>○フラッシュカードで行事を確認し，一緒に発音する。</p> <p>行事と英語が一致しやすいように，実際に児童が行った行事の写真を使う。</p> <p>○集中力ゲームをする。</p> <p>教師がいくつかの学校行事の名前を続けて言い，児童は順番どおりにカードを並べる。</p> <p>○【Let's Listen2 P. 52】音声を聞いて，写真を選ぶ。</p> <p>P. 52の誌面上の写真について話している内容を3つ聞き取り，どの写真についてかを予想し，誌面に番号を記入する。</p> <p>○英語の言い方と意味を確認する。</p> <p>Enjoyed～ing/went to～/ate/saw/の言い方と意味を確認し，4本線に書いてみる。(魔法のシート)</p>		○	<p>○</p> <p>【学校行事について表す表現や基本的な表現を読んだり，書いたりすることに慣れ親しんでいる】(慣)</p> <p>【英語の書き方に注意し，文の語順や規則に気付いている】(気)</p> <p>[観察，発言，魔法のシート，振り返りシート]</p>

3	<p>英語の書き方の規則に気付き、思い出の学校行事について伝えようとする。</p> <p>○【Let's Chant P.51】チャンツを歌う。</p> <p>○【Let's Talk P.53】友達の好きな行事を予想し、尋ねる。</p> <p>クラスの友達がどの行事が好きかを予想し、尋ね合う。</p> <p>What is your best memory?</p> <p>My best memory is～</p> <p>○【Let's Listen3 P.54】登場人物の学校行事について聞き、どの行事か、その時の感想を予想し、教科書の誌面上に記入し、答える。</p> <p>① basketball match:exciting ②English speech contest:great ③International festival:fun</p> <p>○【Let's Watch and Think2 P.55】映像を見てわかったことを発表する。</p>	○	○	<p>○【進んで英語を使い、相手に自分の思い出の学校行事を伝えようとしている。】(コ)</p> <p>【英語の書き方に注意し、文の語順や規則に気付いている。】(気)</p> <p>[観察, 発言, 教科書の誌面, 振り返りシート]</p>
4 (本時)	<p>学校行事について表す表現や基本的な表現を読んだり、書いたりすることに慣れ親しむ。</p> <p>○フラッシュカードで月と行事を確認し、一緒に発音する。</p> <p>○ALTの音声を聞き、分かったことを発表する。</p> <p>exciting/fun/greatなどの既習表現を参考にし、ALTがどのような感想をもったのかを聞き取るようにさせる。</p> <p>○小学校の思い出を紹介する文を書き、伝え合う。</p> <p>自分の学校生活での一番の思い出やその感想をワークシートに書き、クラスのみなどと伝え合う。</p> <p>○学校生活の思い出について伝え合う。</p> <p>学校生活の一番の思い出やその感想をペアで伝え合い、その後、全体で伝え合う。相手に読んでもらえたら、ワークシートにサインをもらう。</p>	○	○	<p>○【進んで英語を使い、相手に自分の思い出の学校行事を伝えようとしている。】(コ)</p> <p>【学校行事について表す表現や基本的な表現を読んだり、書いたりすることに慣れ親しんでいる】(慣)</p> <p>[観察, 発言, ワークシート, 振り返りシート]</p>

7. 本時の学習(4/4)

(1) 本時の目標

学校行事について表す表現や基本的な表現を読んだり、書いたりすることに慣れ親しむ。(外国語への慣れ親しみ)

(2) 準備物

デジタル教材(We can!2)・フラッシュカード(行事名)・ワークシート・探検ボード・振り返りシート

(3) 本時の展開

学習活動	指導上の留意点	評価
<p>1 はじめの挨拶をする。 ・調子, 天気, 曜日, 日付</p> <p>2. フラッシュカードで行事名を確認する。 ・Entrance Ceremony/ Field Trip/School Trip/ Swimming Meet/ Tachibana festival/Sports day/Nature School/ Music festival Basketball match/6th grade farewell party/ Graduation ceremony</p>	<p>・活動への意欲を持たせることができるようにする。</p> <p>・My best memory～の後に続けて、一緒に言わせるようにする。</p> <p>・学校行事を題材にして、児童とやり取りをし、紹介文を書くときの参考になるようにする。</p>	
<p>自分の思い出を書き、みんなに紹介しよう。</p>		
<p>3. 【Lets Listen4】 ALTが学校行事について言っていることを聞いて, 分かったことを発表する。</p> <p>4. 【Let' s Read and Write】 ・小学校の思い出を紹介する文を書き, 伝え合う。 ①自分が選んだ思い出の「行事」「行ったところ」「楽しんだこと」「感じたこと」を考える。</p>	<p>・全てを聞き取れなくてもよいことを伝え, 聞き取れた語や文章を発表させる。</p> <p>・exciting/fun/greatなどの既習表現を参考にし, ALTがどのような感想をもったのかを聞き取るようにさせる。</p> <p>・ My best memory is～ I enjoyed～/ went to～/saw/like～ It was～などの表現を使い, 文章を書かせるようにする。</p>	<p>【進んで英語を使い, 相手に自分の思い出の学校行事を伝えようとしている。】(コ)</p>



<p>②ワークシートに自分の思い出の文章を丁寧に書き写す。</p> <p>③書き写した文章をもとに、全体で交流する。</p> <p>5. 本時の学習を振り返る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 言葉が思い浮かばない児童や書くのが苦手な児童には、日常の学校生活で考えさせ、あらかじめ文章が書かれたワークシートを用意し、書かせるようにする。</li> <li>• 本時のめあてについて振り返らせる。</li> </ul>	<p>【学校行事について表す表現や基本的な表現を読んだり、書いたりすることに慣れ親しんでいる】(慣)</p> <p>[観察, 発言, ワークシート, 振り返りシート]</p>
--	--	---



Grade( ) Class( ) No( ) Name

自分の思い出について書いてみよう。

My best memory is

I  went to  like  ate/saw

It was

【児童用ワークシート① 手

本】

Grade( ) Class( ) No( ) Name

自分の思い出について書いてみよう。




友達に読んでもらえたら、サインをもらおう。


【児童用ワークシート

②】

Grade( ) Class( ) No( ) Name

自分の思い出について書いてみよう。

My best memory is

I

It was

友達に読んでもらえたら、サインをもらおう。


【児童用ワークシート

③】

## (5) 事後研究会について

### 1. 成果

#### ①『書くこと』の指導について

- ・“小学校の思い出”という単元は、この時期の児童にとって自分の思いを持つことが出来、書く事柄を自分の体験から想起できている児童も多かったので、取り組みやすいものであった。
- ・児童がワードやセンテンスを書く活動と、児童同士が交流する活動のバランスが良かった。
- ・書く活動が苦手な児童への支援として、ワークシートをレベル別に複数から選べるようにしていたり、黒板に例文を掲載し、また手本となる文を児童に配布したりするなど、様々な配慮が見られてよかった。
- ・教科書にあるローマ字表やテキストの単語リスト等を参考にして、スペリングを書こうとする児童がおり、児童の書きたいという意欲が伝わってきた。
- ・「交流を行う」ために「書く」といった、書く必要のある構成が良かった。またペアトークの時に、児童同士が文章を読もうとしていた姿がよかった。
- ・ワークシートが4本線であり書きやすく、正しいアルファベットを書くことの意識付けとしてよかった。
- ・大文字と小文字について、4本線のない黒板掲示の文字をみて、自分のプリントに正確に書けている児童が多く、日常においてアルファベット指導がしっかりと出来ているところが良かった。

#### ②その他

- ・友達の発表を聞いて、相手のワークシートにサインをすることで、双方向のやり取りがあって良かった。
- ・「自分の思い出を書き、みんなに紹介しよう」という目当てが明確で、児童は意欲的に取り組んでいた。
- ・教師が的確な指導で、分かりやすかった。
- ・【Let's Listen】の活動で、事前にALTと撮影したビデオを使っており、ALTの発音をしっかりと聞き取れておる児童が多くいた。
- ・ピクチャーカードの写真が児童の活動写真だったので、興味・関心を高めた。

### 2. 課題

#### ①『書くこと』の指導について

- ・書く活動の際、書くことが速い児童が、書き終えて待っている時間が長かった。
- ・「書きたい」と児童が思うのは、書くことでしか表せない環境・状況が必要ではないか。思い出を話して終わってしまうのでは、書く必要性はないのでは・・・？
- ・今後「書くこと」に対し、どこまで正確さを求めるのか。例えばワードとワードの間を適切に空ける、といったことや、文の初めは大文字にする、といった指導をどこまで行うのか。
- ・児童は「good」「excite」「great」の違いを伝えるのが難しい。児童は違いを理解していたかどうかが分からない。
- ・本時の展開は「話すため」に「書く」という流れだったかと思うが、児童の意識として「話したい」、そのために「書きたい」となっていたのか。

- ・書くことに対し、意欲付けがまだ弱かったように思う。例えば本時のワークシートを集約し、一冊の本にする、という目的があれば、さらに「書く」ことへの意欲が高まったのではないか。
- ・コミュニケーションを行う際、書いた文章を見せながらだと、コミュニケーションに必要な要素が欠けるのではないか。
- ・例示以外の単語を書きたい児童については、テキストの巻末に単語集があるので、それを見て書くように促しても良かった。
- ・板書でも4本線のひいてあるものを用意して、児童に意識させても良かった。
- ・児童の「書きたい」という想いや、「書くこと」を「楽しい」と感じられるように、どのような学習展開が考えられるのか、さらに研究が必要である。
- ・「書く」活動と「交流・発表」する活動、その往復が児童の意欲を育てていくのではないか。
- ・書く活動が終わった後、書いた文章を友達と交流していたが、その前にまず自分で書いた文章を読む練習する時間があっても良かった。
- ・今回は「書く」→「話す」という流れであったが、逆に「話す」→「書く」と言った流れの方が、児童は意欲的に取り組めたのではないか。

#### ②その他

- ・ワークシートが少し小さく、英文を書ききれない児童がいた。
- ・活動の後、その活動に対しての評価があっても良かったと思う。
- ・書く活動があったので仕方ないことかもしれないが、本時における児童の発言量が少なかったように思う。

### (6) 授業実践のまとめ

本年度においては研究テーマのもと、『書くこと』における指導の在り方について研究し、その具体的な成果発表として提案授業を行った。今回の提案授業を組み立てる中で、授業者としては「児童の『小学校生活での思い出を友達に伝えたい』という気持ちを引き出したい、そしてその気持ちを大切にしたい」というねらいが強くあり、そのために、①ピクチャーカードの写真を児童の活動写真とする②自分の思い出について、自由に表現したい児童のために、自由に記述できるワークシートを準備する。といった2点の手立てを打つことになった。しかし一方で、研究主題である「書くこと」における学習活動について実践後の課題として、①何のために書く活動を行うのか、今回の提案授業については、児童の“書きたい”という意欲を引き出すにはまだ至らなかった、②ワークシートは、自分の思い出について相手に伝える際に自分で確認するためのメモとして効果的であったが、《自分の思い出について書いた文章を、相手に読んでもらうことで思いを伝える》というところまで求めることが難しかった、といった点があった。

授業後の児童アンケートによると、『自分の思い出を書き、みんなに紹介しよう』というめあてについて、全体の97%の児童が、【よくできた】または【できた】と答えており、『自分の思い出を書き、みんなに紹介できる』というめあてを達成できたと感じていた。このことから、授業者のねらいを達成するための手立てが効果的であったことがわかった(資料1参照)。一方、『丁寧に文字を書くことができたか』というアンケートに対する結果は、全体の94%の児童が【よくできた】または【できた】と肯定的な自己評価をしていた(資料2参照)。しかしながら、本授業の『書く活動』において、

丁寧に書けた，という満足感を持つことができた児童は半数程度であった。

実践後，児童及び授業を参観された先生からは以下のような感想があった。

【児童より】

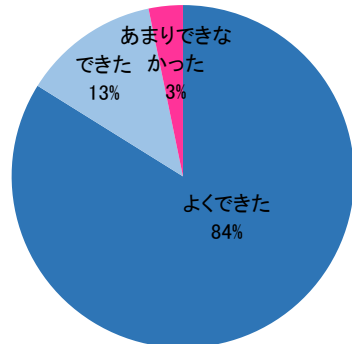
- ・みんなそれぞれ思い出が違う行事だったり，内容についても色んな個性がでていて楽しかった。
- ・思っていた以上に英語で伝えることが難しかった。もう少しすらすら英語をしゃべりたいと思った。
- ・英語が苦手で，上手に伝えられるか不安だったけど，友達に教えてもらったので楽しく発表ができた。
- ・日本語なら簡単に伝わるのが，英語では伝えにくくて難しかった。
- ・英語を書くこと，みんなに自分の思い出を紹介するのが楽しかった。最初はめんどくさいと思っていたけど，交流していくうちに，とても楽しくなっていた。

【先生より】

- ・児童はアルファベットを書く力がしっかりと身についていた。6年生でしっかりとアルファベットを書くことが出来るようにすること，また書くことが苦手な児童に対しての支援など，書く力を育てるためのしっかりとした手立てが必要だと感じた。
- ・アルファベットを書くことについて，児童に定着させるためには，授業中だけでなく，帯時間などでスペリングの練習を持つ必要があると感じた。
- ・「書くこと」に対する意欲を引き出すためには，児童が「書く目的」をしっかりと理解していないと難しいと感じた。
- ・改めて「書くこと」の指導について，今後どう指導していくか考えるきっかけとなった。

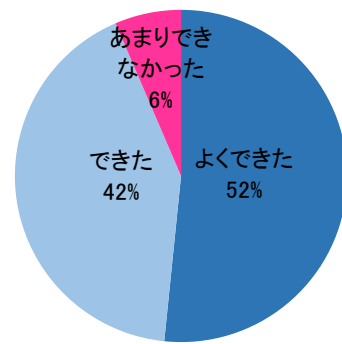
このような結果から，児童の学習意欲を引き出すための指導方法について研鑽していく以外にも，児童の「書きたい」という意欲を引き出すことや，書く必要性のある学習展開について研究を進めること，さらにアルファベットを含む書く活動を，授業の中でどう位置づけるか，といったことなど，今後も様々な観点から指導の在り方について研究を重ねることが重要である。

自分の思い出を書き，みんなに紹介できた



【資料1 児童用学習振り返りアンケート 項目1】

丁寧に文字を書くことができた



【資料2 児童用学習振り返りアンケート 項目2】

### 3 専任講師による研究の総括「研究のまとめとして」

関西大学外国語学部 今井裕之

新学習指導要領に基づく英語教育改革，特に外国語活動の教科化にともなう小学校での教育課程の変化は，今後これまで以上に大きくなる。2016-17年度は Hi Friends!，2018年度は Let's Try!と We Can!(タイトルから感じる圧力が徐々に強まっている。次は You must!か?)を用いた授業研究を研究部会では実施してきた。「三人称」「過去形」「書くこと」などを単に知識や技能として指導するのではなく「言語活動」での言語使用体験を通して学ぶ授業を公開できた。どれも先生がたの関心や不安が高い内容だけに，有意義な提案になったと思う。

#### □移行期のうちに備えたいこと

「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」を育成するには，言語活動中心の授業展開は不可欠であり，言語活動を通して実感したことを，児童自身の振り返りや教師からのフィードバックを通して，意識化，言語化して学びに転化していく過程を単元計画，授業指導案に位置づけることは，今後の小学校英語の成否に関わる重要事項であろう。移行期に「言語活動をゴールとする単元づくり」のノウハウが普及すれば，2020年度の本実施で検定教科書にどんな新しい内容が盛り込まれてきても，大きな変化を受け止める土台となるだろう。「教科書が変わっても，授業の基本は変わらない」と言えるまでになれば，2020年のインパクトも少し柔らかくなる。

#### □変化の見通しを立てるために

2020年度から検定教科書を使用した外国語科が始まるわけだが，その後も大きな変化は続く。2020年度以降同じ教材を毎年しばらくは使い続けることになる一方で，児童たちの英語力も，英語学習体験の量・質も，毎年変化していく。それゆえ20年度以降は，同じ教科書を使用しながらも，児童たちの力量を把握して，毎年のように授業内容や方法を積極的に変更・改善していく必要がある。そのために，指導計画(年間計画，単元計画，授業指導案)を立てるだけでなく，児童たちの活動・評価(スピーチやプレゼンの原稿，ポスターなどの作品，会話や発表の録画など)の記録をデジタルメディアで残すことに，学校ぐるみで取り組んで欲しいと思う。各年度に1度か2度でも良いので，児童たちのパフォーマンスを録画すれば，評価だけでなく，翌年度の計画，児童の活動目標の提示などにも使える貴重なデータである。

#### 4 終わりに

本年度、外国語活動・英語科教育研究部会の研究を進め、その成果を具体的に知ってもらうことの一つとして、6年生において公開授業を行った。研究協議会后に、本研究協議会に参加いただいた先生からのアンケートにおいて、大きく分けて2つの意見(問題提起)が出た。

- 「本日の研究授業及び事後研究協議会で得た学び(知識)を、学校でどう広げていくかが大切だと思う」
- 「外国語の教科化に向けて、これからも教育委員会が研鑽し、現場をリードしてほしい」

どちらにおいても、これから外国語が教科となるにあたり、重要なことであると感じた。

次期学習指導要領の完全実施に伴い、2020年度から第3学年及び第4学年では外国語活動の年間授業時数が50時間、第5学年及び第6学年では外国語科の年間授業時数が70時間となる。今後教員の指導技術は当然のことながら、より専門的な知識や技能が求められることが予想される。次期学習指導要領が求める資質・能力に基づき、「書くこと」の指導の在り方について研究を重ねることが大切である。また、『話すこと[やり取り]』において、デジタル教材「Small Talk」を効果的に活用した授業の提案や、授業の雰囲気作りのための「クラスルーム・イングリッシュ」活用方法など、教員がこれから身に付けていくべき知識・技能について整理し、外国語担当の先生を中心に研修の場等において提案していくこと、そして外国語担当の先生が受講した研修内容について、校内に広げる機会が得られるよう管理職に働きかける等、教育委員会が主体的に提案していくことの重要性を感じた。その第一歩として本提案授業があると考えている。本研究を通じて、教員が「書くこと」における指導について立ち止まり、その在り方について考える一つのきっかけとなれば幸いである。

#### 【 参考・引用文献 】

- ・「小学校学習指導要領解説外国語編」 (文部科学省 2017)

平成30年度 尼崎市立教育総合センター

専任講師

桃山学院教育大学	准教授	今宮 信吾
関西大学初等部	教諭	尾崎 正彦
大阪教育大学大学院	准教授	寺嶋 浩介
鳴門教育大学大学院	講師	泰山 裕
関西大学	教授	今井 裕之
四天王寺大学	准教授	杉中 康平